「江田船山古墳」の被葬者と「鞠智城（くくちじょう）」築城の背景をさぐる

菊池女子高校講師・文学博士　堤　克彦

目　次

■はじめに
一、「鞠智城」の位置への素朴な疑問
　1、「鞠智城」＝大宰府兵站基地説への疑問
　2、「鞠智城」＝大宰府兵糧基地説への疑問
二、原始・古代の日韓交流

■第一部　「江田船山古墳」の被葬者
一、江田の位置
　1、過去の地形から推定される江田の位置
　　①若園貝塚
　　②諏訪原遺跡・清原遺跡
　2、古代の交易港「江田港」（推定）
二、江田船山古墳
　1、江田船山古墳の「清原台地」
　2、江田船山古墳の概要・副葬品
三、江田船山古墳の太刀銘
　1、通説
　2、船山古墳の大刀銘の読み方
　　①大刀銘「獲□□□鹵大王」の諸説
　　②東野治之氏の解読
　　③江口素里奈氏の「吏読」による解読
四、江田船山古墳の被葬者諸説
　1、白石太一郎説
　2、江口素里奈説
　3、西田道世説
五、浮かび上がった被葬者像
　1、江田船山古墳の築造の頃
　2、第１代被葬者の頃
　3、「百済の今来漢人」（「今来の才伎」「今来漢人」）
　4、第２代被葬者の頃
　5、第３代被葬者の頃
　6、被葬者は百済系王族の出自
六、「飛鳥文化」の形成
七、西海道の古代官道の通過
　1、古代官道の通過
八、菊池川流域の在地豪族「火の中君」
　1、前方後円墳の内陸部移動（玉名→山鹿→菊池）
　　①玉名の装飾古墳
　　②山鹿の装飾古墳
　　③菊池の装飾古墳
九、菊池川流域は「百済文化圏」
十、木柑子フタツカサン古墳の「銀象嵌の鍔」と伊勢市南山古墳の「銀象嵌の鍔」の酷似性

■第二部　古代朝鮮（百済）式山城「鞠智城」
一、「鞠智城」築城前後の大和政権
　1、百済系の斉明・天智天皇
　2、百済国との交流開始
　3、百済国との交流続行
　4、「百済王氏」・「百済氏」
　5、「王興寺」の建立
二、「白村江」の敗北・「百済国」の滅亡・亡命難民
　1、「白村江」の敗北、「百済国」の滅亡
　2、鞠智城は「百済難民施設」では
　3、「白村江」の捕虜たち
三、古代朝鮮式山城「鞠智城」の築造
　1、従来の諸説
　　①「鞠智城」築造の経緯
　　②「鞠智城」の立地条件
　　③鞠智城跡出土の木簡を通して
　　④秦氏と「鞠智城」
　　⑤「百済立像」の出土
　2、現在の見解
　　①他の古代山城と異なり、極めて内陸部に入り込んでいる事
　　②築城時期に関する記載記事が無い事
　　③他の古代山城と異なる立地条件
　　④鞠智城と管理棟的建物の関係について
　　⑤建物の建て替えについて
　　⑥貯水池について
　　⑦百済系菩薩立像の出土について
　　⑧鞠智城の整備

■第三部　地名「鞠智」と「菊池」の解明
一、「鞠智城」の読み
二、地名「鞠智」と「菊池」からの古代史解明
　1、「鞠智」から「菊池」へ改字
　2、「鞠智」も「菊池」も“久々知（くくち）”
　3、「鞠智」（くくち）地名の起源と意味
　4、「鞠智」地名は和名か、韓名か
　5、「鞠智」（くくち）は「百済音」読み
　6、「菊池」（きくち）は「漢音」
　7、「菊池」（きくち）読みのはじまり

■おわりに

■はじめに

本論では、古代朝鮮式山城「鞠智城」の築造目的が、奈辺にあったのかを考察してみることにしたい。結論からいえば、日韓両国の考古学者や古代史研究者たちの見解とは大きく異なっている。しかしこれまでいろいろ研究してきた私なりの到達点である。

「鞠智城」に関しては、文献的には『日本書紀』・『続日本紀』や『三代実録』の記述しかない。従来の研究のほとんどが、特に『続日本紀』の文武二（698）年の「大宰府をして大野・基肄（肆）・鞠智の三城を繕治せしむ」の記事に依拠し、大野城・基肄（肆）城・「鞠智城」の並列記載から、この三つの古代城を、常に大宰府と関係づけ、それを大前提にした考察・研究がなされてきた。

考古学者や古代史研究者たちは、この記事の呪縛から、一向に解放されなかったばかりか、その通説からの脱皮を進んで試みようとしてこなかった。

私は、考古学者でも古代史研究者でもなく、専門外の一研究者である。そのため幸いなことに、考古学・古代史学会の権威主義に束縛されることがない。私に与えられた特権である。この特権を活用して、従来とはまったく違った視点で以って、より「鞠智城」の築造目的の真実に接近することができるのではないかと思っている。

古代史に関しては、老若を問わず、国内外の有名・無名の研究者たちによる数多くの著作が出版されている。多種多様なアプローチの仕方があることを教えられる。またその内容は面白いばかりでなく、何よりも古代史専門家にない柔軟さが刺激的である。拙論では、それらの著作も参考にして、論考を進めてみたい。

本論の「鞠智城」に関しても、最近では、複数の専門家によって、従来通説とされていた見解に、異論が出され、見直しが始まっている。どちらかといえば、少数の考古学・古代史の専門家によってリードされてきた古代史は、かなり硬直していたので、非常に歓迎したい。

このような古代史の研究状況は、いまやっと本流の澱みから、少しずつ流れ出している。拙論のような「鞠智城」の築造目的についての見解も、その流れの一つとして、古代史論争の中に加えていただきたい。

ここで展開する拙論は、従来の通説に納得できず、長い間温めてきた一研究者のあくまでも私論である。もちろん、専門家から見れば、荒唐無稽との厳しい批判を受けるであろう。百も承知しているし、覚悟している。一研究者の良心からの決意である。

一、「鞠智城」の位置への素朴な疑問

これまで通説のように、「鞠智城」を大野城・基肄（肆）城と同じように、大宰府との関係で論じた時もあった。その際、どうしても引っ掛かるのは、大宰府からの距離と菊池という地理的位置であった。

どう考えても、「鞠智城」は、大野城・基肄（肆）城の立地条件と、余りにも違い過ぎるのではないか。従来のように、この三者を同一に論じてよいのだろうかという疑問が残っていた。

1、「鞠智城」＝大宰府兵站基地説への疑問

『延喜式』によれば、運脚日数は、肥後国府から大宰府まで、往路３日・復路２(1.5)日の行程であった。「鞠智城」からも、同じ日数を要したと思われる。もし軍事的後備の兵站基地であったとすれば、果たして適地といえるだろうか。

「鞠智城」は、大宰府から直線にして約62kmの僻遠の地、また当時の有明海沿岸（江田）から約20kmも内陸部に築城されている。仮に通説を認め、唐・新羅連合軍の攻撃に備えての築城としても、何故わざわざこのような僻遠の地を選んだのか、その理由が理解できない。考えれば考えるほど、疑問が膨らんでくる。

もっと素直に、別の理由によって、この地に「鞠智城」を築城したのではないかという視点が必要になってくる。そんな疑問が出てくるのは、門外漢の私ばかりではなく、誰でもが、ごく自然に持っているものであった。このような疑問と発想が、考古学者や古代史研究者の中から何故出てこなかったのか。実に不思議である。

その解明のキー・ワードは、「鞠智城」の築城場所の選定を、誰が主になってしたかということである。菊池の地形を熟知した人物または氏族が存在していたのではないのか。この地に古代朝鮮式山城を築城することの有利性を主張した地方の有力な人物が存在した可能性も出てくる。

2、「鞠智城」＝大宰府兵糧基地説への疑問

従来の通説では、「鞠智城」の設置条件として、大宰府の兵糧基地として重視、強調されてきた。現在確かに「鞠智城」址の南側には、広大な平野（盆地）が存在し、優良な穀倉地帯が広がっている。その現状からAD 7世紀頃の当時を推量し、天智朝の大和朝廷は、大宰府の兵糧基地として目をつけたと推測することもできなくはない。

しかし、すでに『高校研究紀要』39号（2009年5月）に掲載した拙論「神話・伝承の『茂賀の浦』を科学する」で論じたように、「茂賀の浦」の石壁は、おそらくAD4世紀中（上限をAD3世紀後半、下限をAD4世紀末期）に崩壊し、AD6世紀後半には、その石壁の湖水面側および崩壊部分に、「鍋田横穴墓群」が造営されている。

即ちAD4世紀中頃からAD6世紀後半までの約200年余の間、石壁の崩壊で「茂賀の浦」は枯渇したものの、かっての湖底部分には、数多くの湖沼が散在していたことは、現在の地形からしても、容易に想像できる。そして「茂賀の浦」の湖底部分には、AD 8世紀中頃の「条里制」の遺構が確認されている。

傍証になるかどうかはわからないが、明治期に富田甚平が考案した「暗渠排水」の技術は、この菊池平野（菊鹿盆地）の七城町の深田を利用して考案・改良されたものであった。

以上の「茂賀の浦」の湖底部分、即ち現在の菊池平野（菊鹿盆地）は、663年「白村江の敗戦」での百済国滅亡直後、即ち「鞠智城」が築城されたAD 7世紀中頃には、果たして優良な穀倉地帯であったのだろうか。

菊池平野（菊鹿盆地）は、湖底部分であったため、生産力のある肥沃な土地柄であったことは間違いない。しかし同時に、数多くの湖沼が各地に散在していて、当時の農業技術からして、余り農耕には適さない湿地帯であったとも考えられる。

私は、優良な穀倉地帯となった時期を、「鞠智城」築城以後と推定している。その理由は、まず「茂賀の浦」湖底部分の大規模な灌漑事業（干拓・開拓）を行い、各地の湖沼が取り除く必要があった。その技術を、当時先住者の弥生人たちは、果たして持ち合わせていたであろうか。

むしろその土木技術は、百済国の滅亡後に、菊池地方に亡命して来た百済難民たちの持つ「鞠智城」築城技術ではなかったのだろうか。亡命百済難民たちの土木技術を駆使することによって、はじめて「茂賀の浦」湖底部分の灌漑工事は可能になり、湖沼が取り除かれ減少した結果、干田化して優良な穀倉地帯となったと推定している。

しかしながら、日韓の古代史研究者たちには、「鞠智城」跡（址）に立ち、現在の菊池平野を眺望しながら、前の時代的な制限を加味することなく、直ちに大宰府の兵糧基地説に納得している。果たして如何なものであろうか。

以上のような素朴な疑問を持つ私は、従来の「鞠智城」＝大宰府兵站・兵糧基地説に、長い間すんなりと賛成できなかったし、実をいうと、いまでも賛同していない。

私自身、地元の多くの人たちに、自説の「鞠智城＝百済難民施設」を説明している。みんなも従来の通説には承服していないことがわかった。また私説に興味を示してくれる人も少なくない。

そこで改めて、一体「鞠智城」の築城目的は何であったのかについて、拙論を展開してみることにした。

二、原始・古代の日韓交流

現在、日本史の研究では、全時代を通じて、従来のように日本列島という枠内で考えてしまうような一国完結主義的な学問方法は、まったく通用しなくなっている。それは、日本の原始・古代の歴史を考える場合も同様である。というよりも、むしろ原始・古代の研究によって、先鞭をつけられたと言った方が正確かもしれない。

日本の原始・古代では、今まさに「東アジア」という範囲で、少なくとも日・中・漢の三国間の「交流」を歴史的前提とした研究が常識となっている。特に最近では、日韓両国間の発掘・出土品などの詳細な比較検討やそれに基づく考察などによる共同研究が、その主流となっている。非常に歓迎されるべき傾向である。

ここで、原始（旧石器）・縄文・弥生・古墳・古代期の日韓交流について、各時代の特徴を概観しておきたい。

(1)

原始（旧石器）・縄文・弥生・古墳・古代期の日韓交流の遺跡・遺物			
時代	遺跡・遺物	韓半島	日本列島
原始（旧石器時代後期）		陸続き	
	細石器・細石核	公州石壮里遺跡	北海道安住遺跡
	剥片尖頭器	韓国丹陽垂陽介遺跡	鹿児島県前山遺跡、宮崎県蔵田遺跡
縄文期（新石器時代・土器）	円形住居址	ソウル岩寺洞遺跡	九州・全国各地の遺跡
	結合式釣針	韓半島南海岸の貝塚（西北九州型）	西・北九州の貝塚
	櫛目文土器（韓国）	南海岸・島嶼、釜山東三洞遺跡（轟式土器と一緒に）	対馬腰高遺跡（90%が韓国系）
	轟式土器（日本）	釜山東三洞遺跡	長崎（櫛目文土器と一緒に）
	曽畑式土器（日本）	韓半島南部で出土	櫛目文土器の影響
	黒曜石	釜山東三洞遺跡（九州産、60～80%が対馬腰高産）	
	貝の腕輪	釜山東三洞遺跡	対馬佐賀遺跡（釜山東三洞と同じ）
弥生期（水稲耕作・金属器文化）	弥生環濠集落	慶尚南道検丹里遺跡	吉野ケ里遺跡
	無文土器・把手付壺	京畿道水石里遺跡	佐賀土生（はぶ）遺跡
	青銅器		
	石包丁	検丹里遺跡（石包丁多数出土、専門工人）	壱岐辻の原遺跡（検丹里遺跡と酷似）
	支石墓	韓半島全域	西・北九州
古墳期（竪穴石室→横穴石室、前方後円墳）	婦人壁画（高句麗系）	平壌付近水山里古墳（高句麗）	奈良高松塚古墳
	高野槙	南道忠清武寧王陵の王妃木棺、百済王族木棺に使用	
	銅鏡	武寧王陵（6世紀前半）、右古墳出土の銅鏡に酷似	佐賀甲山古墳・群馬観音山古墳）
	金冠（百済系）	武寧王陵	熊本江田船山古墳
	金冠（新羅系）	慶州皇南大塚古墳	群馬金冠塚古墳
古代期（仏教・儒教）	観音像	百済公州の金銅観世音菩薩立像法	隆寺百済観音像
	弥勒半跏思惟像	百済三山冠金銅弥勒半跏思惟像	広隆寺弥勒半跏思惟像
	寺院伽藍（高麗尺）	百済王興寺遺跡（高句麗清岩里廃寺・定陵寺説あり）	奈良法興寺（飛鳥寺）
	五重塔の形態	中清南道扶余定林寺跡五重塔	法隆寺五重塔
	朝鮮式山城	二聖山城・八角塔	鞠智城・八角楼

もちろん上表は完全ではないが、これだけでも、考古学によって明らかにされた遺物・遺跡・遺構・形態の比較によって、日本列島と韓半島の間で、想像以上に長期間しかも多岐にわたった交流があっていたことを知るのに十分であろう。しかも日本から韓半島へ、また韓半島から日本への対馬海峡を越えての往来は、今日的な国境を考慮する必要のない分、むしろ恒常的な交流が営まれていたといえるかもしれない。

別の見方をすれば、中国や韓半島の政治動向は、直ちに対馬海峡を越えて、九州・大和に影響を与えていた。その点では文化もまた例外ではなかった。日本列島は大海の孤島ではなく、東アジアの一構成員であったのである。

前表の補足として、韓国教員大学歴史教育科著（吉田光男監訳）『韓国歴史地図』（平凡社　2006年）の内容を紹介しておきたい。日本と韓半島の各時代の歴史が、地図上に非常にヴィヴィッドに作図されている。それを見ていると、日韓両国の関係は、「近くて遠い国」という表現は、歴史の黎明期からまったく当てはまらない。

例えば、古日本人と古韓国人は、いずれも非常に近い「北方系モンゴロイド」であり、旧・新石器時代の韓半島の考古学的遺物は、日本の縄文・弥生の遺物も同じ分布圏内のものと考えてよい。韓半島では、古朝鮮から三国（高句麗・百済・新羅）の建国など、独自の歴史と文化を持っていたが、それらの文化は、これらの三国との交流を通して、倭（日本）にもたらされた。(2) 前表の多くの遺物や古代文化が証明している。

当然ながら、遺物や文化の伝播は、人的交流によるものである。韓半島の文化は、多くの古韓国人の渡来と日本定住によって、その地に母国の文化を根付かせ、古韓国人の「ムラ」（村）ができ、さらに「クニ」（国）にまとまっていった。

想像を逞しくすれば、弥生後期の『魏志倭人伝』に記された多くの「小国家」（江戸期の郡と同じ程度）、それを統率した「邪馬台国」、また対峙した「狗奴国」およびその属下の国々の人々は、「倭人」と称されながらも、同じ韓半島からの渡来人たちの故国の「侯国」（小分国）ではなかったのか。即ち「邪馬台国」の女王「卑弥呼」も、「狗奴国」の役人「狗古智卑狗」も、その祖は、同じ古韓国人であったと思われる。

以上のように、頻繁な日韓二国間の交流の観点を踏まえて、菊池川流域の古代の玉名・山鹿・菊池の地域を改めて見直すことは、決して無駄なことではあるまい。本論では、まず「江田船山古墳」を取り巻く地理的景観やその被葬者について、これまでの考古学や古代史などの研究成果をもとに論及を試みることにする。

■第一部　「江田船山古墳」の被葬者像を探る

一、江田の位置

1、過去の地形から推定される江田の位置

本論を考えていく上で、重要なのは「江田船山古墳」の被葬者との関係であるが、まずその前に、江田とその周辺の地形的な位置について言及しておきたい。

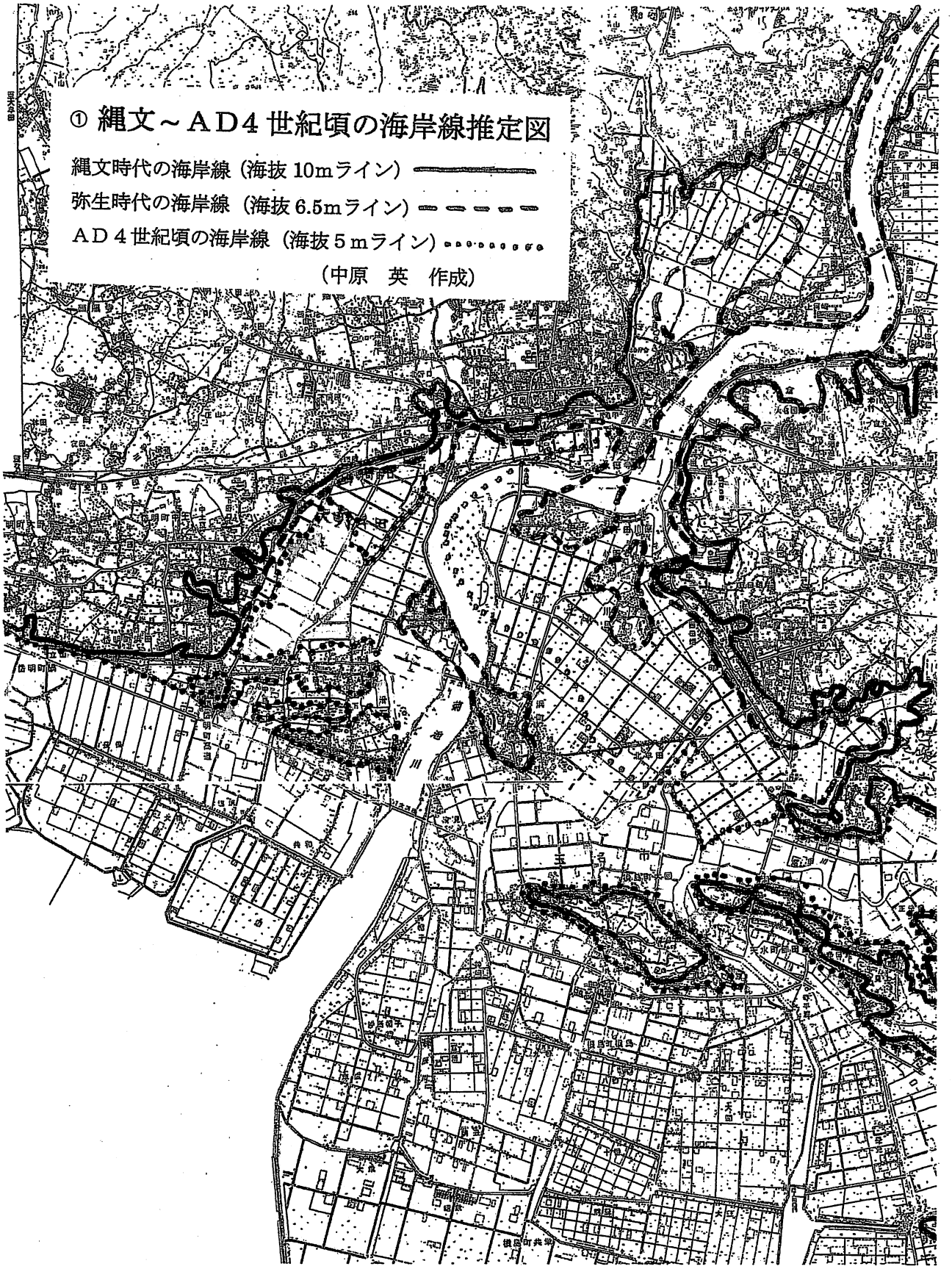
①若園貝塚

「若園貝塚」（海抜26m〈玉名平野部から約10m〉、長さ45m×幅12m以上）は、菊池川と江田川の合流点近くにある縄文中期から後期の貝塚である。鹹水産と淡水産の貝類（ハマグリ・アサリ・オキシジミ・マガキなど）を含む。鹹水産の割合が多く、そのうちでもマガキが半数以上を占める。

この他の出土遺物は、石器（石簇・石斧・石錘・石皿など）、獣魚骨（鹿・猪・クロダイ・ボラなど）、人骨などである。

これらに結びつく縄文人たちの集落は、『熊本県遺跡地図』によると、「江田船山古墳」のある「風土記が丘」〔清原台地〕・その東側の西中原・北原寺跡・トンカラリンなど、「若園貝塚」付近にあったと推定できる。前出の遺物の種類から見ると、この地域の生活基盤は、おそらく漁撈を主としていたと思われる。

「若園貝塚」の地形的な立地条件を考察すると、江田とその周辺は、有明海が大きく湾入した縄文時代


① 縄文～ＡＤ４世紀頃の海岸線推定図
縄文時代の海岸線（海抜 10mライン）
弥生時代の海岸線（海抜 6.5mライン）
ＡＤ４世紀頃の海岸線（海抜５ｍライン）
（中原　英　作成）

の海岸線に接していたことになる。「若園貝塚」の始まりは縄文中期で、ちょうど「縄文海進」(3～5m)の時期とも一致する。

前ページの地図は、熊本地学会員の中原英氏が、いろいろな条件を加味しながら作成した海抜10m(縄文海進)と5m(弥生海岸)などのライン図である。縄文期の海岸線は海抜10mのライン(――)とほぼ一致している。

さらに2005年7月1日の水防法一部改正に基づく国土交通省九州地方整備局菊池川河川事務所作成の「菊池川水系浸水想定区域図」(総括版)には、「浸水した場合の水深」のランク2.0m～5.0mのラインとその範囲が示されている。前述した「縄文海進」(3～5m)の海岸線と完全に一致していた。江田付近まで、有明海が大きく湾入していたことの証明の一つとなろう。

②「諏訪原遺跡」・「清原遺跡」

江田地域の弥生遺跡としては、「諏訪原(すわばる)遺跡」と「清原(せいばる)遺跡」が有名である。前者は弥生後期の大集落と墓地が隣接した遺跡であり、後者は後述する「江田船山古墳」などの古墳群を含む遺跡である。

『熊本県遺跡地図』によれば、前掲の縄文遺跡の他に、松坂原・寺山小原・立石島崎・馬場堂ノ上などの弥生遺跡があるが、そのほとんどが縄文遺跡と重なっている。

もちろん、弥生期はすでに「縄文海進」も終わって、海退の時期に当たり、海面が3～5mも下がっていた。弥生期の海岸線は、かなりも後退していただろうが、縄文・弥生期を通して住居址の移動が見られない。おそらく弥生期の海岸線は、「茂賀の浦」石壁の崩壊以前であれば、江田付近まで大きく湾入したままであろう。また海退部分には、農業可能な海岸平野が出現していたと思われる。

周知の通り、弥生人たち(おそらく韓半島からの渡来人が主流であろう)は、金属器と水稲耕作の技術を持ち、それらによる農業生産を行なっていた。その主な耕作地域は、上記の弥生遺跡の分布からして、おそらく菊池川と江田川の合流点付近の江田地域に集中していたと推定される。

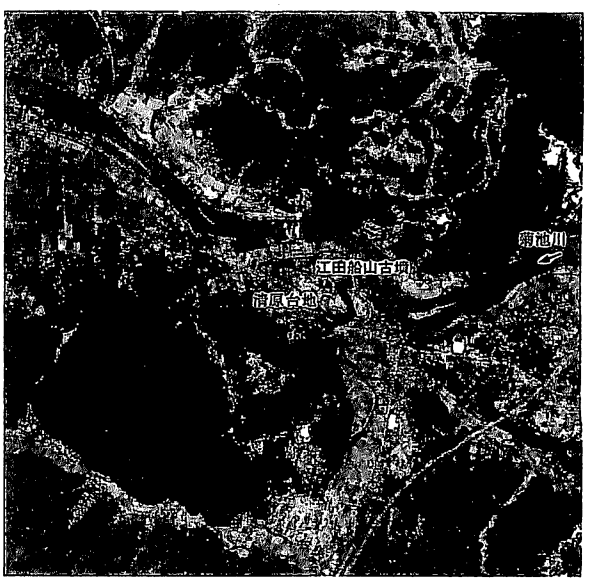
この弥生期には、「茂賀の浦」石壁は崩壊せず、「茂賀の浦」(弥生湖)は存在していた(『高校研究紀要』39号〔2009年〕、拙論「神話・伝承の『茂賀の浦』を科学する」〔試論〕参照)と推定されるので、その海岸平野の堆積物は、後述する「茂賀の浦」石壁の崩壊後と格段の差があったと思われる。しかしながら、その海岸平野の面積はよく分かっていない。

その海岸平野での農業生産物も加わって、「諏訪原遺跡」や「清原遺跡」に代表される大集落址を残した弥生人の生活を支えたことは確かである。

③「茂賀の浦」石壁の崩壊

既号掲載の拙論では、「茂賀の浦」(弥生湖)は、おそらくAD4世紀中(上限をAD3世紀後半、下限をAD4世紀末期)に崩壊したと推定した。その石壁の崩壊によって、「茂賀の浦」(弥生湖)は渇水化し、その湖底部分が現れ、やがて耕作可能な干地となっていった。

石壁の崩壊時には、大量の水とその水勢が、崩壊した石壁ばかりでなく、湖底に沈殿・堆積していた大量の土砂もろとも、一挙に押し流したと思われる。当然ながら、石壁より下流域には一本の河道(菊池川)が生じ、両岸の土砂を削り取りながら流れ下ったことであろう。大量の土石流は、「清原台地」によって狭小になった地形のため、江田地域の菊池川と江田川の合流



②清原台地航空写真

点付近では厚く堆積したと推定される。(前頁写真②参照)

それを通過すると、急に開けた海岸地形となるため、水勢は急に衰え、扇状に拡散する。そして弥生期までにできた有明海の海岸平野の上を、幾重にも河道を変えながら流れ下り、大量の土砂の堆積を繰り返したと思われる。

現在の高瀬町と対岸の大倉・桃田の間は、非常に狭まった地形となっている。この地形は、弥生後の「茂賀の浦」石壁の崩壊した当時のAD4世紀中も同じであったことは間違いない。

また菊池川の河道は、現在と違い、千田川原から真っ直ぐ南下し、伊倉のすぐ西側を流れ、天水町部田見脇を通り、現在の唐人川のコースを流れていた。(図版③参照) 中原英氏は、「茂賀の浦」石壁の崩壊したAD4世紀以降の地形を、前掲の作図の海抜5～6mのライン(……)と推定している。

「茂賀の浦」石壁の崩壊で生じた大量の土石流は、この所で再び遮られたため、その上流域では容易に肥沃な氾濫原が形成されたと思われる。この地形的な条件の下で、江田以西の菊池川流域、特に菊池川右岸には、現在に近いような沖積平野が作り出されただろう。この部分には8世紀中期に「条里制」が施行されることになる。

西田道世氏は、「江田船山古墳の位置」を論ずる中で、上記のことに関して、「船山古墳築造期の平野は、現在よりも1～2mほど標高も低く、打ち出し口にこそ網目状の水路が走っていたようであるが、多くは島原海湾まで湖水様の沼沢地風景が広がっていたと思われる。現在ではやや内陸になるが、当時の交通事情からは海岸にあるのと変わりなかったであろう」(1) と述べている。

玉名市川崎の「柳町遺跡」は、多種多様な木製品、「木製単短甲」と文字の棒状留具類の出土で有名である。この環濠集落の遺構を持つ弥生後期～平安初頭の複合集落地(但し『熊本県遺跡地図』では縄文期からとなっている)は、前のような状況の下に、定住集落ができ始めたと考えられる。

2、古代の交易港「江田港」(推定)

これらの堆積物によって、古代の有明海の海岸線は大きく変わったであろう。しかし中国・韓半島からの交易船は、容易に菊池川を江田まで遡及できたのではないか。おそらくこの地に「江田港」があったと推定される。地名からの考察を試みたい。

「江田」地名は、「エ」(江)・「タ」(処)の語幹からなり、「エ」(江)には、「川・海・湖・堀などの一般的な呼び名で、とくに陸に入り込んでいる部分をさすことが多い」(2) という。そうであれば、この「江田」地名そのものは、有明海の海岸線が、「江田」付近まで入り込んでいたことを示す地名の名残と考えられる。「江田港」が存在した可能性も浮上してくる。

また「江田船山古墳」の「船山」の意は、「前方後円墳を船にたとえたもの。船塚とも」(3) とされる。しかし単なる古墳の形状からの命名ではなく、「江田港」の存在を暗示するようで棄てきれない。検討してみる必要があろう。

ついでに「伊倉」地名についても考察しておきたい。菊池川河道は、加藤清正によって大幅に河道が変更された。それ以前は、今の「唐人

③中古附上古玉名郡繁昌図

川」筋に河道があった。その旧菊池川脇には、中世の交易港として栄えた「伊倉」があった。それを物語る遺跡は、伊倉台地およびその付近に数多く点在している。詳しくは『玉名市史』や『天水町史』などに譲りたい。

自然的な地形・形状および歴史的視点から「伊倉」の地名を考察してみると、「伊倉」は「イ・クラ」の語幹からなる。「イ」は、①高くそびえた所、②ヰ（井）で「泉や流水から水を汲み取る所」、③掘り井戸、④ヰ（居）で「集落」の意など(4)が考えられる。

また「クラ」は、①山中のきりたった岩盤・岸壁・断崖、②動詞クル（刳）の連用形クリの転か、あるいはクル、またはクユ（崩）語幹クに接尾語ラのついた形で、「崩壊地形・浸食地形」の意(5)が該当する。

即ち「伊倉」は、有明海の海岸線に面した自然の岸壁上の高台という地形・形状的な特徴を意味する示す地名である。また歴史的には、十分「泉や流水から水を汲み取れる所」で、掘り井戸なども整備した「集落」の地名であった。

一般的に、地名には、自然的な地形・形状および歴史的見地を反映している。そうであれば、「江田」地名は、「伊倉」地名同様、かなり正確に古代当時の自然的な地形・形状ばかりでなく、古代の「交易港」という歴史的事実も物語っているのではないだろうか。

この「江田」は、原始・古代には交易港として栄え、中国や特に韓半島からの渡来人が定住し、つぎに述べるように、「清原台地」はその中心地となっていたのではないかと推測される。

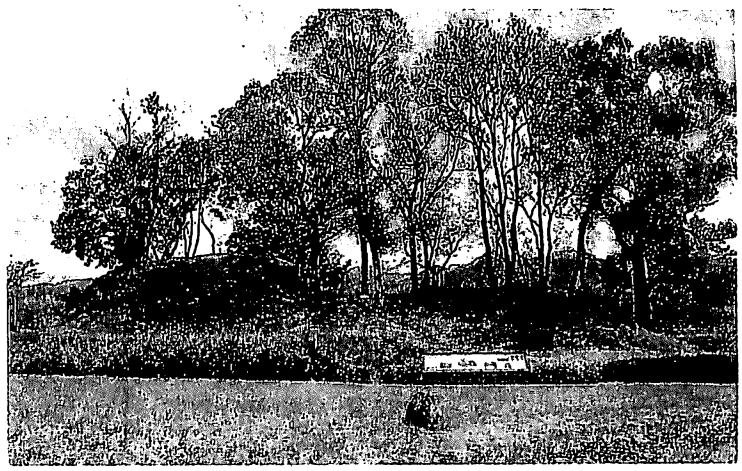
二、江田船山古墳

西田道世氏は、古代の日本の全人口は300万～400万人、肥後国全体10万人前後、玉名郡は『和名抄』から8000～1万人と推定している。(6) この人口数は、被葬者の権力や当時の状況を想定する上で、非常に参考になる。例えば、男女8000～1万人の半数（4000～5000人）が男とし、さらに老人・子供を除けば、江田船山古墳などの築造動員に可能な人数は、その三分の一か、四分の一の男1000人規模となる。この約1000人の中から動員して、その労働力で以て、AD5世紀後半から6世紀初頭にかけて、菊池川デルタ（台地）の最頂部にある「清原（せいばる）古墳」群を築造したと推定できる。

1、江田船山古墳の「清原台地」

その「江田船山古墳」を論じる前に、地元で「セイバル」「セバル」と読まれる「清原台地」の「清原」地名について見ておきたい。

江口素里奈氏は、その著『古代史発掘・江田船山古墳鉄剣銘の秘密－被葬者は百済王の王子だった!!』（五月書房　2007年）の中で、武光誠氏の「ばる」地名は韓国の集落をあらわす古語「フル」との見解を参考に、「フル」は朝鮮半島原語のbeol（地・原・野原）から派生した言葉とした。(7)



④写真　江田船山古墳

また金容雲著『日本語の正体－倭の大王は百済語で話す』(三五館　2009年)によれば、「原っぱ」の「原」は、韓語「ボルboru － horu － haraはら（原）」で「広く平らなところ」の意で、「みはらし（見晴らし）」

は「見原し」で、「広く見渡す」に通じるという。(8) そのような地形はいうまでもなく「台地」である。

さらに『地名用語語源辞典』によれば、「ばる」(「はる」) には「原」「張」などの漢字を当て、「台地、台地の上の平地」「大きく開いた所」の意 (9) であった。両氏の説は、それなりの説得力がある。

江口氏は、「セバル」(saj-pal) には「東方・曙国・新地」の意があり、「清原台地」はかつて韓半島からの渡来人には故郷であったとし、江田船山古墳被葬者の出自との関係を論じている。(10)

武光・江口両氏の指摘のように、朝鮮古語の「フル」「ハル」「バル」が、集落を意味するものであれば、玉名地域の「清原 (セイバル) 台地」ばかりでなく、山鹿地域には、弥生後期から古墳前期にかけて、製鉄・鋳造工房の「方保田東原 (ヒガシバル) 遺跡」があり、鹿央には 6 世紀以前に築造された「岩原 (イワバル) 古墳」群がある。

そうすると、古代朝鮮式山城「鞠智城」が築造された「米原 (ヨナバル) 台地」も、築城以前から韓半島系の渡来人が居住した可能性も出てくる。「米原台地」が、何故古代朝鮮式山城「鞠智城」築造の候補地に選出されたのか、その理由も納得がいく。

玉名には「疋野長者」(炭焼長者、製鉄鍛冶)、山鹿には「駄の原長者」(子宝長者)、菊池には「米原長者」(炭焼長者、製鉄鍛冶) の長者伝説がある。しかも「駄原長者」と「米原長者」は財宝の自慢比べをしている。朝鮮古語の「バル」と長者 (炭焼長者、製鉄鍛冶) 伝説は、韓半島からの百済系渡来人、即ち後述する「百済の今来漢人」(「今来の才伎」「今来漢人」) との関係を暗示するものかもしれない。

2、江田船山古墳の概要・副葬品

◎「江田船山古墳」－熊本県菊水町 (現・和水町) の清原台地上にある古墳中期の前方後円墳で、明治六 (1863) 年に発掘。墳長 62m、後円部径 41m、高さ 10m の三段築成で、周囲に盾形の周壕をもつ。円筒・朝顔形・家形・馬形方の埴輪がある。くびれ部からは陶邑 (すえむら) 産の 14 個体分の須恵器が出土。後円部中央に阿蘇溶結凝灰岩製の横口式家形石棺を直葬する。副葬品には、神人車馬画像鏡などの中国鏡 5 面と仿製鏡 1 面、玉類・武器類・甲冑・馬具・須恵器のほか、金銅製の冠・冠帽・沓・帯金具、金製垂飾付耳飾など、朝鮮系要素の濃厚な装身具類がある。銀象嵌された 75 文字の銘文をもつ大刀も出土。国史跡。(『日本史広辞典』 吉川弘文館)

三、江田船山古墳の太刀銘

1、通説

『日本史広辞典』(吉川弘文館) には、「江田船山古墳出土大刀」と大刀銘の「獲加多支鹵大王」について、つぎのように説明されている。

◎「江田船山古墳出土大刀」－熊本県菊水町の江田船山古墳 (国史跡) 出土の有銘大刀。古墳は古墳中期の前方後円墳。大刀は 1873 年 (明治 6) に金銅製冠や沓・耳飾など豪華な副葬品とともに発掘された。鉄製で長さ 90.7cm、鉄刀の刀背部に銀象嵌で 75 文字の銘文が刻まれている。銘文冒頭の「獲□□□鹵大王」は、稲荷山鉄剣の発見により、「獲加多支鹵」(ワカタケル＝雄略天皇) であるとする考え方が有力となった。典曹人 (文官) である无利弖が 4 尺廷刀を作ったという由来が記される。稲荷山鉄剣銘と類似の表現が多くみられ、大和政権が東から西までその勢力を及ぼしつつあった状況がうかがわれる。東京国立博物館蔵。国宝。(『日本史広辞典』 吉川弘文館)

◎「獲加多支鹵大王」(わかたけるのおおきみ) －埼玉県行田市の稲荷山古墳から出土した鉄剣の銘文中にみえる大王。斯鬼 (しき) 宮を営んだ。鉄剣に刻まれた辛亥年が 471 年と想定されること、また雄略天皇の名の大泊瀬幼武 (おおはつせわかたけ) と類似することから雄略に比定される。熊本県玉名市 (ま

ま、旧菊水町）の江田船山古墳出土の鉄刀銘文中の大王は、以前は「治天下蝮宮弥都歯（たじひのみやにあめのしたしろしめすみつは）大王」と推測され、反正天皇をさすと考えられてきたが、稲荷山鉄剣銘の大王と同一人物とする説が強くなっている。(『日本史広辞典』 吉川弘文館)

以上は、現在の「江田船山古墳出土大刀」銘の「獲加多支鹵大王」に関する日本史学界の共通見解であり、高等学校の教科書「日本史」や副教材資料「図説日本史」などは、これに準拠している。

2、船山古墳の大刀銘の読み方

①大刀銘「獲□□□鹵大王」の諸説

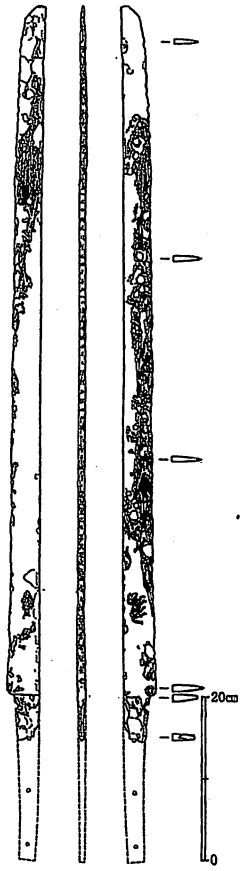
前掲のように、今日では、船山古墳の大刀銘の読み方は、「獲□□□鹵大王」(「獲加多支鹵大王」) が有力で定説化しているといってよい。西田道世氏の「船山古墳被葬者像研究略史」は、研究史上の「獲□□□鹵大王」の比定人物について、その変遷をたどるには好資料である。

それによると、本格的な「獲□□□鹵大王」の人物比定は、昭和九 (1934) 年の福山敏男氏の「反正天皇」説であった。その約 35 年後の昭和四十二 (1967) 年には、大韓民国の金錫亨氏が、百済「蓋鹵王」説を主張した。

昭和四十六 (1971) 年に、韓国公州で発見された武寧王陵の出土品が、江田船山古墳出土品に類似していた。それを受けて、昭和四十八 (1973) 年、朝鮮民主主義共和国の李進熙氏は、大刀銘の「王」は「蓋鹵王」と読むべきとの説を出した。また船山古墳の年代を、従来よりも六世紀初頭まで降ろした。

その後、昭和五十三 (1978) 年、稲荷山古墳出土の鉄剣銘「獲加多支鹵大王」が「ワカタケル大王」と読めることから、江田船山古墳の大刀銘の「治天下獲□□□鹵大王」も「ワカタケル大王」と読んだ。そして今日の日本古代史では定説化している。(11)

しかし果たしてそれでいいのだろうか。そんな疑問がいつもつきまとっている。つぎに「治天下獲□□□鹵大王」＝「ワカタケル大王」説と、それと違った「(治天下復) 百□ (済) 蓋鹵大王世」＝「百済蓋鹵 (こうろ) 大王」説について見ていきたい。



⑤江田船山古墳太刀銘

②東野治之氏の解読

江田船山古墳の大刀銘の代表的な解読として、東野治之氏の釈文とその読み下し文を紹介しておきたい。

(釈文)

台 (治) 天下獲□□□鹵大王世、奉事典曹人名无□ (利カ) 弖、八月中、用大鉄釜、并四尺廷刀、八十練、□ (九カ) 十振、三寸上好□ (刊カ) 刀、服此刀者、長寿、子孫洋々、得□恩也、不失其所統、作刀者名伊太□ (和カ)、書者張安也

(読み下し文)

天の下治らしめしし獲□□□鹵大王の世、典曹に奉事せし人、名无利弖、八月中、大鉄釜を用い、四尺の廷刀を并わす、八十たび練り、九十たび振つ。三寸上好の刊刀なり。此の刀を服する者は、長寿にして子孫洋々、□恩を得る也。其の統ぶる所を失わず。刀を作る者、名は伊太和、書する者は張安也。(12)

③江口素里奈氏の「吏読」による解読

前の東野治之氏に代表される日本の研究者の解読に対して、江口素里奈氏は、大韓民国の金錫亨氏や朝鮮民主主義共和国の李進熙氏の百済「蓋鹵王」説の上に立って、前掲の著『古代史発掘・江田船山古墳鉄剣銘の秘密－被葬者は百済王の王子だった!!』の中で、船山古墳の大刀銘を、「吏読」（りとう）で読むことに着目している。

「吏読」（りとう）とは、「漢字を基本手段として、その字音や意味を韓国語・朝鮮語の立場から利用してその構造的特性に合うよう独特な方式に記した特殊な流行文字」(13) で、李氏朝鮮の世宗王の時に完成した「ハングル」以前の漢字の読み方で、ウラル・アルタイ語族の古韓国人の言葉であった。漢字の伝来後も、漢字の「呉音系」の発音は「吏読」を基に「百済音」で発音された。

江口氏は、江田船山古墳の大刀銘も「呉音系」で書かれている (14) とし、その「吏読」で解読する方法を採用して、つぎのようなまったく新しい解釈を試みている。

(釈文)

□□□□（治天下復）百□（済）蓋鹵大王世、奉□（為）典曹人名无利□（工）、八月中、用大鋳釜、并四尺迂刀、八十練、六十振、三才上好□（迂）刀、服此刀者、長寿、子孫洋洋、得三恩也、不失其所統、作刀者名伊太於、書者張安也

(日本語訳)

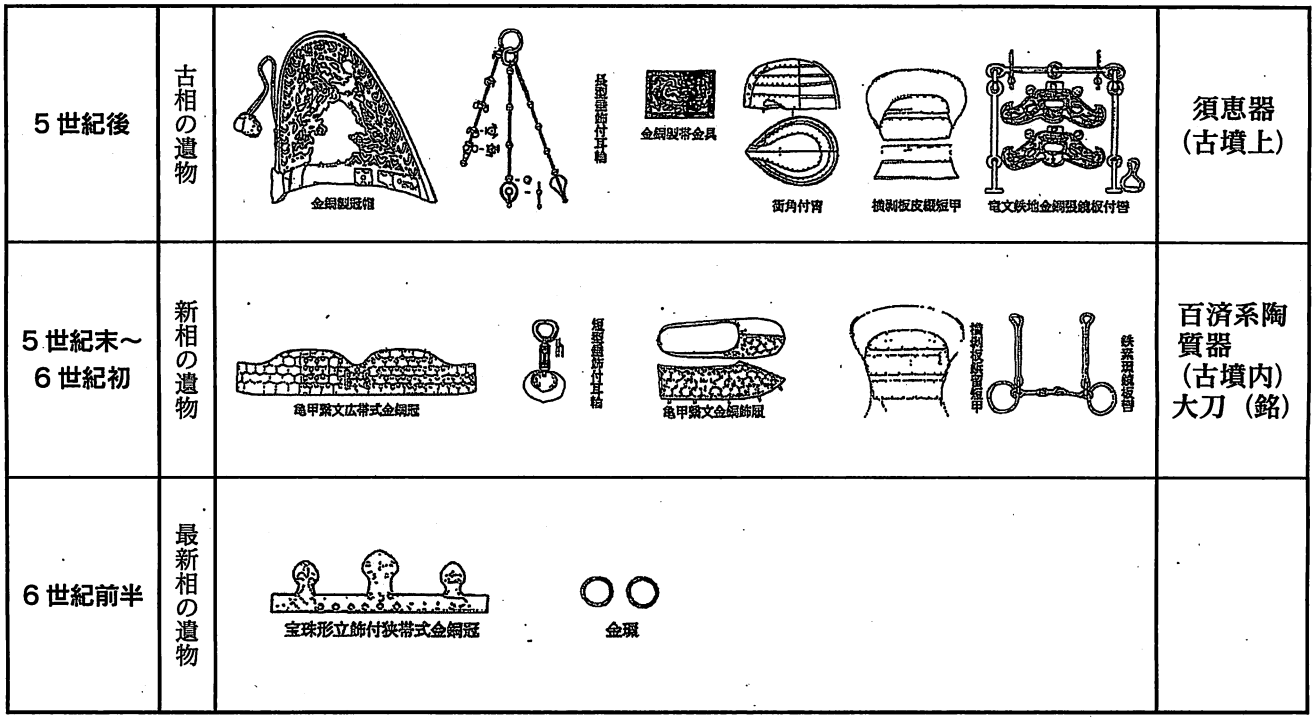
天下を治めるしし□（復）百済蓋鹵（こうろ）大王の命を受けた担当役人である名は无利（むり）という人物が製作した。八月中（吏読で「に」）、大鋳釜を利用して、四尺に調合して刀を配分し、八十回鍛錬し、六十回打ち払って、天・地・人の世上においても最もよい刀で子孫も多く、三通りの恩恵を得る筈であろうし、その納める所（ナラ〈国〉）を失うこともない筈である。この大刀を製作した人は伊太於（吏読では「で」）、刻字下者は張安である。(15)

四、江田船山古墳の被葬者諸説

以上のように、江田船山古墳の大刀銘の解明に、日韓の考古学者や古代史研究者が取り組んでいるが、実にいろいろな読み方があって、正直なところ決定打がないといえよう。しかし江田船山古墳の被葬者像に接近することは可能ではないだろうか。そんな思いから、つぎの三説を取り上げてみた。

1、白石太一郎説

白石太一郎氏は、平成十一（1999）年玉名歴史研究会主催のシンポジウム「東アジアと江田船山古墳」での講演「船山古墳の墓主は誰か」の中で、つぎのように「江田船山古墳の副葬品」を分析・分類して、三相・三人の被葬者の可能性を指摘している。



⑥江田船山古墳の副葬品にみられる三相・三人の被葬者（縮尺不同）

また白石氏は、前掲の東野治之氏の釈文を基に、つぎのような被葬者像を描いている。

・六世紀以前の同一古墳内の被葬者（合葬）は、首長にならなかった血縁関係者である。

・江田船山古墳の中心的被葬者は、大刀銘の所有者ではなく、追葬者の持ち物である。

・ヤマト王権の中で、軍事とか外交とか一定の職掌を分担した中央の大豪族大伴氏などの族長が作り、自分の家の職掌を果たす上で提携関係にあった地方豪族に銘のある大刀を与えた。

・江田船山古墳の三人の被葬者は、いずれも百済系の金銅製の豪華な装身具を所有することから、「江田船山古墳の被葬者も、この菊池川流域の有力豪族であって、おそらく百済をはじめとする朝鮮半島諸国あるいは南朝との交渉・交易に重要な役目を果たした」人物であろう。

・「五世紀後半から六世紀の初頭に、ほかに例を見ない見事な朝鮮半島系の装身具を副葬した江田船山古墳の被葬者は、おそらく有明海を起点に日本列島の各地、さらに朝鮮半島にまで海上交通の担い手として活躍していた、この地の在地首長層ないしその子供たちにほかならなかった。（中略）彼らは中央で外交を担当している大豪族にとっても、江田船山大刀のような銘を持つ刀剣を、わざわざ作って与えなければならないほど重要な存在であったと考えていいのではないか」

・そのような存在の一人として、火の葦北国造阿利斯登の子の達卒日羅をあげ、日羅は、「わが君大伴金村大連」と呼んだ例をあげている。(16)

【参考】菊池市七城町には、橋田に「日羅」を祭る「橋田寺」廃寺がある。また五海に関しては、昭和六十三（1988）年に、奈良大仏殿の西脇から出土した木簡には、表「薬院依仕奉人　大伴部鳥上　入正月□□・大伴部稲依　入正月五日〔併記〕　肥後国菊地郡□（子）養郷人」、裏「悲田　悲□院　充　大□不□□末□□□」と墨書されていた。

この中の「□（子）養郷」は「五海」に比定され、また九州の「大伴部」姓は、六世紀に設置された大伴氏の部民であったと推定されている。(17) このように、この地域は「日羅」や「大伴部」に関係ある土地柄であったのかもしれない。

2、江口素里奈説

江口氏は、前に紹介した「吏読」による大刀銘の解読によって、この銘文の形式が、「他国の高位な他者に宛てたもの」ではなく、「近親者が身内の目下の者に贈呈する場合にのみ使用される」「気軽な吉祥句」を用いた非公式的な書き方であることに着目している。

つぎに掲載したのは、『日本書紀』の「武烈四年夏四月」を、江口氏が読み下した文である。黒板勝美編『日本書紀』中巻(岩波文庫　1931年)とは、その読みが若干違っているが、内容の解釈には相違がみられない。

「――《是の歳に、百済の末多（また）王、無道にして百姓に暴虐す。国人、遂に除（す）て島王（せまきし）を立つ。是を武寧（むねい）王とす。百済新撰に云はく、「末多王、無道にして百姓を暴虐す。国人、共に除て、武寧王立つ。諱は斯麻（しま）王といふ。是琨支王子（こにきしせしむ）が子なり、即ち末田（まま、多）王が異母兄なり、琨支、倭に向（まい）でし時に、筑紫嶋に至り、斯麻王を生む。嶋より還送（かえしおく）りて、京にいたらずして、嶋に産まる。故（かれ）、因りて名（なつ）く。今各羅の海中に主嶋（にるむせま）有り。王の産れし嶋なり。故、百済人号（なづ）けて「主嶋」とすといふ。今案（かんが）ふるに嶋主は、是蓋鹵王が子なり。末多王は、是琨支王の子なり。此を異母兄と曰ふのは、未だ詳かならず。」(18)

黒板勝美編『日本書紀』中巻により、この内容の骨子を整理しておきたい。混支（こむき）王と末多（まつた）王は父子の関係にあるが、異母兄弟という説もある。後者が王位を継いだが、国民の支持を得られず、島王（斯麻王・武寧王）に代わった。この島王（斯麻王・武寧王）は混支（こむき）王の子とされるが、実は蓋鹵王の子であった。(19)

前記の江口氏の引用部分よりも、前掲の黒板勝美編『日本書紀』中巻の「雄略五年夏四月」には、「百済の加須利君〔蓋鹵王なり〕」「其の弟軍君〔混支君なり〕」と明記し、また「加須利君」（蓋鹵王）と「島君」（武寧王）の父子関係がはっきりと読み取れる。(20)

その部分を、宇治谷孟著・全現代語訳『日本書紀』上（講談社学術文庫　2007年）で確認しておきたい。兄加須利（かすり）君が弟軍君（こにきし）を倭に使わした。その時、兄加須利君は、弟軍君に自分の女（妊婦）を与えた。女は加羅島（主島・にりむせま）で、嶋君（せましき武寧王）を出産したので、弟軍君は母子ともに百済に帰した。兄加須利君が蓋鹵王で、弟軍君が昆支君である。即ち嶋君（武寧王）の父は加須利君（蓋鹵王）であった。(21)

以上の百済王の系譜をたどると、〔21〕蓋鹵王（兄）―昆支君（弟・父）―〔24〕末多王＝東城王（子）―〔25〕武寧王（蓋鹵王の子）となる。また「主島」の「各羅島」は、佐賀県松浦郡鎮西町の「加唐島」(22)に比定され、誕生譚の伝承遺跡も存在する。

さて本題に返ろう。江口氏は、この資料、特に『百済新撰』の内容に注目し、自らの「(治天下復)百□(済)蓋鹵大王世」＝「百済蓋鹵（こうろ）大王」説の論拠とし、5世紀後半から6世紀中期（AD450～550年）に造立された「船山古墳」の被葬者は、蓋鹵王（在位455～475）の子・孫・弟・侯王などの可能性があると指摘する。

具体的に「同古墳から出土した夥しい副葬品は、(武寧王〈在位501～523〉が侯王時代に父王から頂戴したものだけではなく）百済王として即位するために帰国した後に、その次の侯王となった「斯我君」、一度日本に来て帰国した形跡のない叔父琨子王の所持品や斯麻君（武寧王）が帰国した後も、日本に在ったかもしれない母堂の持ち物などを合葬したもの」で、百済系の複合墓ではないかと推定している。

また「筆者流に考証するならば、「銀象嵌銘文」の名宛人は、盛百済期に宗主国の百済の「大王」が、その侯国であった檐魯（タムロ、玉名郡の元の字）国の王あるいは、九州の一角の侯王を担った斯麻王（後に帰国して武寧王となった）が日本に滞在中に受け取ったか、その孫に当たる『日本書紀』に見る斯我君「法師君」別名「倭君の先祖（やまとぎみ）」と呼ばれ夭折した（斯麻王の太子とされる）人ではないか。そして、副葬品は、既に帰国した斯麻王の宝物や、また先に他界した大叔父（琨子王）の宝物などを葬ったので、夥しい量となった」と、肥後国玉名郡を舞台に推測している。(23)

その上、江口氏は、「九州・熊本の江田船山古墳の被葬者も、そして、その年が四十歳になるまで、日

本にいた嶋王（斯麻王）も、百済の侯王の位置で存在した百済王家の一員であったろう」と推測している。(24)

この他、複数の著書には、韓半島からの渡来者が、九州各地に故国の分国を設置したとする「侯国論」などもあって、なかなか棄てがたい。

さらに、江口氏は、象嵌技術の日本伝来の上限が古墳時代であることから、この有銘大刀は、日本製ではなく「百済製作刻字」（江口氏は470年製作説）ではないかという。(25) この見解は、白石太一郎氏が、同大刀を二人目の被葬者の副葬品「新相の遺物」の一つとし、5世紀末～6世紀初に比定していることとほぼ一致している。

3、西田道世説

西田道世氏は、2009日韓歴史シンポジウムin玉名「熊本県北部の古代文化と韓半島」で、江田船山古墳の被葬者について、まず同古墳出土品の「副葬品の製作時期と製作地」を考察し、つぎのような見解を述べている。ここでは、本論に関係するものをあげておきたい。

・銀錯銘大刀－「服此刀者、長寿、子孫洋々、得三恩、得三恩也、不失其所統」の吉祥句があり、「5世紀第3四半期前半」で、「佩刀者は无利弖、作刀者は伊太加、書者は張安とあり、日韓に関係する人々が共同で鍛刀したことも国際的な雰囲気を持つ」という。

・銅鏡6面－西田氏は、車崎正彦氏の「6面中5面が南朝の宋代の踏返鏡で、年代は5世紀後葉」、「江田船山古墳の被葬者はその航海術の能力が認められて、（中略）南朝の宋への海路案内する役を担うことがあり、その功績によって劉宋の下賜品の踏返鏡の分配を多く受けることができた」という見解を紹介している。

・金製垂飾付耳飾り－同氏は、野上丈助氏の「金製心葉形垂飾付耳飾りは、忠清南道公州市の百済第25代武寧王陵出土のそれと明瞭な系譜関係を持つ」との指摘（定説）を採り、製作時期は6世紀前葉前半と推定している。

・陶質の土器－同氏は、木村龍生氏の「坏蓋・坏身各2点、提瓶形土器1点は、韓国忠清南道公州市錦江流域産」で、6世紀初め頃との説を紹介している。

・須恵器－同氏は、田中新史氏の「副葬品ではないが、460年代を前後した倭王武の初期、大王権確立期のもの」との見解を紹介している。

・埴輪－同氏は、車崎氏の「清原古墳群の4基の古墳に配列された埴輪は、5世紀中葉後半」説を紹介し、田中氏の須恵器の歴年観とほぼ一致しているとする。(26)

・副葬品や出土遺物を見る限り、第1期は古墳築造と須恵器で、第1世代の埋葬（5世紀第3四半世紀前半）、第2期は銀錯銘大刀と鏡で、第2世代の埋葬（5世紀第4四半期）、第3期は金製心葉形垂飾付耳飾と陶質土器3点で、第3世代の埋葬（6世紀第1四半期）の時期区分をしている。この時代区分は、白石氏と一致するが、ただ第2世代の被葬者の所持品とされた銀錯銘大刀の副葬は第3世代によってなされたとする点が異なっている。

・また西田氏は、「江田船山古墳被葬者の活動」の中で、「船山被葬者は銀錯銘に「典曹人」（文を読み、儀礼に通じた官僚又はその属官）で、外交儀礼にも詳しい文官、国使の青・博徳の属官としては実に相応しい」とする。

・さらに「船山古墳の被葬者は、島原海湾に面した地の利をえている。おそらく制海権さえ握っていたろうし、外洋の航海も熟達していたろう。文と航海術に長けた船山被葬者は、（中略）積極的に遣呉使の先導役や舟師役を買って出たもの」と推定する。

・また雄略天皇の評価として、「雄略帝は宋への遣使を格段に重要視していた。「典曹人」として、そのような大事な国使への随行と秀でた外交儀礼の知識による積極的貢献が雄略からの評価を高めたのも肯ける。これが5面の鏡が語る事情であり、銀錯銘大刀が鍛刀された事情である。船山被葬者の絶頂感と

高揚感がうかがわれる」とする。

・また「この航海の技量によって自らも百済との直接交流も図ったと思われる。冠帽や飾履、耳飾などは、倭大王家からの直接拝領品とは思われない。武寧王からの下賜品であろう。とするなら、直接交流以外考えられない。はたしてそういう事例はあるのだろうか」と記す。

・さらに「船山古墳の被葬者は、韓半島では王を名乗って交流を図っていたものであろう」「典曹人としての知識も武寧王寵愛の因となったであろう」と推定する。(27)

・西田氏は、清原古墳群の被葬者に関して、最古の埴輪を出す京塚古墳〔円墳〕は「清原古墳群の「草分け」「鼻祖」」であり、虚空蔵塚古墳（44.5m）〔以下いずれも前方後円墳〕は、「地域首長として認可された初代」であった。江田船山古墳（62m）は、「経済的にも裕福であり、内外で確固とした地位を獲得してはいたが、鼻祖の崖下に築造されたことから傍系だった」とする。塚坊主古墳（44.3m）は、「京塚・虚空蔵塚から続く地域の直系だった」と推定する。

・また塚坊主古墳の副葬品の馬鈴が、慶尚南道陜川郡玉田M3号墳出土のものと同工品（新羅系）であることや、出土した須恵器の年代が船山古墳に接近していることから、船山被葬者と対抗していたようにも感じられるという。(28)

五、浮かび上がった被葬者像

以上の見てきたように、白石氏の江田船山古墳の副葬品の考察による百済系の三人・三代被葬者説は、江口氏の『日本書紀』の記事を中心に論及した蓋鹵王の子・孫・弟・侯王など百済系の複合墓説と奇しくも一致している。また西田氏も3世代埋葬説をとっている。これらの一致を論拠に、拙論を展開してみたい。

ここで重要なのは、江田船山古墳の被葬者が、①「百済系人物」であること、②少なくとも「三人・三代被葬者」であること、③被葬者が「血縁的関係」であること、④被葬者の埋葬が「5世紀後半～6世紀前半」の約1世紀の長期にわたっていること、⑤金冠などの副葬品が「百済系王族」か、それに関係する「王族一門」の所持品に類似または酷似していること、⑥第二代目の被葬者は「有銘大刀」と一緒に葬られていること（但し西田氏の場合は、第二代目の被葬者の所持品とされた銀錯銘大刀の副葬は第三世代目によってなされたとする）などである。

もちろん、被葬者像については、別の見解もある。例えば、田辺哲夫氏は一時「日置氏」説を唱え、また田中正日子氏の「東城王」説などがある。

特に田中氏は、白石氏の百済系の三人・三代被葬者説を前提にして、「雄略天皇が滞在中の末多王に武器をあたえて帰国させ、百済の王位を継がせた。この時菊池川の典曹人（宮居の出仕した曹を司る人）ムリテの一族が、末多王の帰国にかかわった可能性もある。江田船山古墳から出土した百済系の陶質土器や王族の持ち物に匹敵する豪華な副葬品は、末多王が東城王となって、直接あたえた返礼の品ではなかったか」と推測する。

また江田船山古墳の副葬品の中には、「東城王だけではなく、武寧王の即位にかかえわって百済の高級品を入手した首長もふくまれていた可能性がある」(29) ともいう。

このように、江田船山古墳の被葬者の比定は簡単ではない。よくぞここまで被葬者への接近ができたものだと感心する。しかし後述する古代朝鮮式山城「鞠智城」が「百済式」であることの視点に入れて論じられていない。

1、江田船山古墳の築造の頃

つぎの表は、江田船山古墳の出土・副葬品から、白石氏の被葬者像を中心にし、韓半島からの渡来人の時代別の特徴などを追加してまとめたものである。

	時期	江田船山古墳の出土・副葬品	日本の動向	朝鮮・中国の動向
3世紀	弥生後期	・清原遺跡(大集落址) ・諏訪原遺跡(弥生後期)大集落・墓地 ・「柳町遺跡」(弥生後期～平安初期)		
4世紀	後半	・この頃「茂賀の浦」石壁の崩壊(推定) ・菊池川の江田下流域に沖積地形成→農業可能 ・朝鮮式横穴石室墓(古墳中期)の移入(～5C)、鉄製武具(剣が主流)・馬具の副葬	・大和政権の九州征伐(～5C初) ・韓半島との交易・交流	
5世紀	中期	・半世紀間、前方後円墳の空白期		第一期渡来人(王仁・阿知使主の伝説)
	後半	①百済系王族の渡来、古棺の遺物(最初の被葬者、鉄製武具(剣が主流)・馬具、陶質土器(百済系)副葬		第二期渡来人(百済今来漢人・伽耶地方の倭漢氏、技術集団)
	末期	②百済系王族の大伴氏所属、新棺の遺物(第2番の被葬者、鉄製武具(太刀が主流・太刀銘)・馬具の副葬		
6世紀	初期		・527～8「磐井戦争」(親新羅系、装飾古墳・石人石馬)	武寧王〈在位501～523〉陵出土品 第三期渡来人(仏教・儒教、飛鳥文化)
	前半	③百済系王族の大和政権(百済系天皇)配下、最新棺の遺物(第3番の被葬者)		
	後半		・「フタツカサン」古墳	
7世紀		・663白村江の敗北→百済難民の日本亡命 ・685「鞠智城」築城	・天智天皇(百済系)政権成立	660百済国滅亡 第四期渡来人(百済・高句麗の難民) 鞠智城の「百済立像」
8世紀		・古代九州官道「江田駅」の設置 ・玉名郡司日置氏	・律令制度、「条里制」の施行	

(白石太一郎監修・玉名歴史研究会編『東アジアと江田船山古墳』〔雄山閣　2002年〕・他より作成)

この表から何がわかるか、少し説明を加えておきたい。4世紀になると、本格的な韓半島との交易・交流が始まった。その後の5世紀、所謂「古墳中期」には、朝鮮式横穴石室墓の技術が移入され、また象徴的な副葬品として、「古墳前期」には見られなかった鉄製武具(剣が主流)・馬具の副葬が始まった。これは、江上波夫氏の有名な「騎馬民族説」の契機となった。また『古事記』・『日本書紀』には、この4世紀から5世紀初め大和政権による九州征伐の記述が登場する。

2、第1代被葬者の頃－表中①

5世紀後半になると、江田船山古墳が築造され、鉄製武具(剣が主流)・馬具、陶質土器(百済系)の副葬品を持つ最初の被葬者が埋葬される。その副葬品は、周知のように、百済系王族かまたその一族しか所持できないような豪華な遺物であった。これによって、最初の被葬者は、この玉名・江田地域に渡来してきた百済王族系の渡来人と推定される。

ただ高木恭二氏は、朴天秀氏の「考古学から見た古代の韓・日交渉」(『青丘学術論集』第十二集　1998年)から「一回目の埋葬時の遺物には朝鮮半島の特に大伽耶系のものが多く含まれている」(30) ことに注目し

ている。

日韓両国の考古学者や古代研究者の間では、韓半島南部の加耶（伽耶）地方の研究が盛んで、朴天秀には、その著『加耶と倭』（講談社　2007年）があり、その他では、田中俊明著『古代の日本と加耶』（山川出版社　2009年）、金容雲著『日本語の正体』（三五館　2009年）など、相ついで出版されている。各著に共通するのは、百済との交流以前に、すでに加耶地方とかなり濃厚な交流があったとの指摘である。

これらの研究からも、江田船山古墳の第1代被葬者頃の遺物に、朴氏の「大伽耶系のものが多く含まれている」とする見解は、古墳時代の日韓交流の実情を正確にとらえたものといえる。

これらの著者の指摘は、この第1代被葬者以前に、この玉名・江田地域は（後述するように、八女地方を含んで）、すでに伽耶地方との直接交流があったこと、その後で、伽耶地方を席巻した百済系の王族が、その交流関係を引き続いだと推測できる。

しかし5世紀は、第二期渡来人即ち「百済の今来漢人」・「伽耶地方の倭漢氏」などの技術集団（今来の才伎）が数多く渡来する時期に当たるが、江田船山古墳の築造と第1代被葬者の時期が一致する。そうすると、「百済の今来漢人」が、江田船山古墳の築造を直接指揮した可能性も出てくる。また金冠などの副葬品は、百済からの直接持ち来たったものであることは確かであろうが、この玉名地方で「百済の今来漢人」らの技術によって製作された可能性も考えられなくはない。

3、「百済の今来漢人」（「今来の才伎（いまき てひと）」「今来漢人（いまきのあやひと）」）

「百済の今来漢人」とは何であろうか。まずその前史を見ておきたい。百済国は、建国以来の「技術・文化立国」で、倭国にとって、重要な「技術・文化の輸出国」であった。この背景には、百済が、倭国の支援を受けながら、高句麗や新羅の圧力から対抗してきた経緯があった。それは、また百済が、永年多種多様の高度な技術や文化を、倭国に提供して来た理由であり、倭国も大いに期待して、好みを通じていた。

応神天皇は、最初の実在の天皇で、百済系の「九州王朝」説もあるが、その応神即位以降の5世紀には、百済・伽耶諸国・新羅などから多くの渡来人（帰化人）がやってきた。この第一期渡来人には、伝説的な百済の王仁（わに）（西文氏（かわちのあやうじ）、『論語』『千字文』の伝来）、阿知使主（あちのおみ）（東漢氏（やまとのあやうじ）、文筆・史部の管理）・弓月君（秦氏の祖とする百済系帰化人、養蚕・機織などの技術）らがいる。

ついで、第二期渡来人には、「今来の才伎」（新来の南朝人と百済人で、「今来漢人」と同じ）がいる。彼らは、「5世紀後半頃、朝鮮からさまざまな技術をもった人々の集団」の渡来人(31)であった。即ち「五世紀末に、日本と百済の関係が軍事的に深まり、また中国の南北朝の対立抗争によって、南朝人の百済への流入が多くなったため、日本には百済人・南朝人の渡来が急速にふえ、彼ら新鋭の技術をもつ帰化人」(32)として、大和政権の韓鍛冶部（からかぬちべ）・陶作部（すえつくりべ）・錦織部（にしごりべ）・鞍作部（くらつくりべ）・史部（ふひとべ）などの「品部（しなべ）」（手工業的技術集団）に編入され、主に畿内を中心に、主に東国に集住した。しかし前述したように、「今来の才伎」の一団が、有明海を経て、この玉名・江田地域に定住した可能性も十分想定できるのではなかろうか。

4、第2代被葬者の頃－表中②

白石氏は、第2代被葬者は、5世紀末から6世紀初期の頃、百済系王族で大伴氏に所属した者と推定している。また百済系の金冠などや鉄製武具（太刀が主流・太刀銘）・馬具の副葬品と、武寧王の在位期間（501～523年）と一致し、武寧王陵の豊富な出土品との類似性あるいは酷似性から、百済国との関係を強調する説がある。また江口氏のような太刀銘の「吏読」読みする「（治天下復）百□（済）蓋鹵大王世」＝「百済蓋鹵（こうろ）大王」説もある。

しかし白石説は、「六世紀以前の同一古墳内の被葬者（合葬）は、首長にならなかった血縁関係者」で、「江田船山古墳の中心的被葬者は、大刀銘の所有者ではなく、追葬者の持ち物」であり、有銘大刀の所有者は、第2代被葬者とする。この点では、副葬時期の違いはあるものの、西田氏の見解と一致している。

一方、江口氏は、江田船山古墳の出土・副葬品は、「武寧王が侯王時代に父王から頂戴したもの」、「武寧王の次の侯王斯我君」、「叔父琨子王の所持品」、「斯麻君（武寧王）の母堂の持ち物」などを合葬した百済系の複合墓と推定している。

江田船山古墳の第２代被葬者は、生前百済系の金冠などを所持・装着していた身分であった。しかし「首長にならなかった血縁関係者」の「追葬者」でありながら、「大刀銘の所有者」であった。西田氏は、江田船山古墳の被葬者について、「経済的にも裕福であり、内外で確固とした地位を獲得してはいたが、（中略）傍系だった」可能性を示唆する。

高木恭二氏は、「象嵌銘を持つ鉄刀は二回目の埋葬に伴うもの」で、これには「百済地域、特に陶質土器などから考えても全羅道地域を含むもっと広い半島の西南部の勢力との関係を重視すべきである」(33)という。

またこの２代被葬者の陶質土器に関して、「墓室の中に土器を入れる習慣は日本に列島にはない」こと、福岡県の重藤氏の研究から「大体五世紀の後半代に土器を墓室内に入れる習慣が始まる」こと、さらに「陶質土器は韓半島の西南地域、百済あるいは百済南の栄山江流域の陶質土器の可能性」(34)があることを指摘している。

前の江口氏の有銘大刀の「吏読」読みによる蓋鹵王（在位 455 ～ 475）の子・孫・弟・侯王などの可能性の指摘や、考古学的には武寧王〈在位 501 ～ 523〉王陵の豊富な副葬品と酷似していることから、「船山古墳」の第１代・第２代の被葬者と百済国および百済系王族との直接的な関係は、ますます明白かつ確固たるものになった。

しかし疑問が残らない訳ではない。例えば第２代被葬者の場合、その所持品・装身具類は、百済国で製造したものか。第１代被葬者がもたらした伝世品の可能性も十分考えられるが、何しろ５世紀末から６世紀初期は、百済系の「今来の才伎」（「今来漢人」）が渡来・定住した時期でもあった。

おそらく大和政権下の「品部」のように、玉名・江田地域でも、小規模ながらも、すでに韓鍛冶（大刀・金製装身具）・陶作（登り窯使用の陶質土器）・錦織・鞍作などの集団が定住していて、母国百済の当時最高の手工業技術を駆使した製品を作り出していたと推定できないだろうか。

もしそうであれば、第２代被葬者の副葬品類は、これら百済系の「今来の才伎」によって、大和政権の許可を得ずに、金冠も有銘大刀も製造した可能性も出てくる。あるいは、大和政権もそれを黙認せざるを得なかったほどの独立性の強い勢力であったとも考えられる。

江口氏は、象嵌技術の日本伝来の上限が古墳時代であることから、この大刀銘は、日本製ではなく「百済製作刻字」（江口氏は 470 年製作説）との見解を示している。しかしこのように見ていくと、大刀に銀象嵌の銘を掘り込む技術は、必ずしも百済製とは限らず、あるいは玉名・江田地方に来住した百済系の「今来の才伎」およびその子孫たちであっても、十分可能ではなかったか。即ち「百済製作刻字」でなく、「倭製作刻字」であった可能性が脳裏をかすめてしまう。

5、第３代被葬者の頃－表中③

白石氏は、６世紀前半の第３代の被葬者は百済系王族で、大和政権の配下にあったという。その時期の 527 ～ 8 年には、「磐井戦争」（筑紫国造磐井の乱、装飾古墳・石人石馬文化）が起こっている。これは、親百済の大和政権と親新羅の磐井を盟主とする九州勢力の内乱であった。

西田氏は、この時期の第３番の被葬者について、つぎのように推定している。

「船山被葬者の第３代は、雄略の系譜の断絶を見たとき、そして筑紫における国造磐井の隆盛を見たとき、時代の変化と喪失感を覚えたのではなかろうか。おりしも、同族塚坊主古墳被葬者が成長し、対抗してきた。塚坊主は新羅と情報交換の証しとして新羅産の馬鈴を所持した。筑紫国造磐井には膝下の礼を尽くし、石製表飾の広場も京塚古墳周辺に整備した。その一方で、装飾古墳の様式を導入することで、火国南部勢力とも情報の共有を行った。

3代目はこれに対抗できなかった。地域では地域の序列があったのである。3代目は、自分の死期を悟った時、所持している者の永遠の富と繁栄が約束された伝来の銀錯銘大刀の副葬を命じた。そして大刀は副葬された。自分系譜の永続的繁栄が絶望的になった、と感じた結果ではなかったろうか」(35)

西田氏は、「磐井戦争」に直面した「清原古墳群」の被葬者たちの中では、塚坊主古墳被葬者のように、磐井に組みする者も出現した。「清原古墳群」の被葬者たちの間では、生き残るために分裂が生じた。即ちこの3代目被葬者は、磐井側にはつかなかったので、この情勢に抗しきれなかった。そこで第2代被葬者の所有であった有銘大刀（「伝来の銀錯銘大刀」）の副葬を命じたと推測している。

6、被葬者は百済系王族の出自

いずれの説をとるにしても、江田船山古墳の被葬者は、百済王族系の一族と推定あるいは確定してもよかろう。その被葬者が、大和政権の配下で「典曹人」（文官）として仕えていたとしても、単なる従属者ではなく、母国百済の王族系としての誇りを堅持し続けていたと思われる。

ただ多くの考古学者や古代史研究者は、数多くの百済系の副葬品に関して、「典曹人」に対する大和政権からの下賜品と主張しているが、全国を掌握しようとしていた当時の大和政権が、王族の身分を表わすような装身具を、しかも百済系の装身具を作ってまで下賜することがあるだろうか。その可能性は低いのではないのか。

それよりもむしろ前述したように、百済から直接移入したか、あるいは玉名・江田地域在住の「今来の才伎」が密かに製造したかのいずれかの可能性が考えられないだろうか。その点からすれば、むしろ江口氏の太刀銘の「吏読」読みによる「（治天下復）百□（済）蓋鹵大王世」＝「百済蓋鹵（こうろ）大王」を基盤にした説の方が説得力がある。

私見を許されるなら、一緒に出土した百済王族系の副葬品と有銘太刀は、一括して大和政権の下賜品として見るのではなく、百済王族系身分に付随したものと、大和政権下の役職に付随したものと、まったく別々の副葬品であったものが、一緒に埋葬されただけの話ではないだろうか。

前者は、西田氏もはっきりと「冠帽や飾履、耳飾などは、倭大王家からの直接拝領品とは思われない。武寧王からの下賜品であろう」というように、百済王族系の三代の被葬者の所持品であったことは間違いない。そうすれば、後者の有銘太刀のみが、白石説や西田説をとれば、大和政権からの下賜品であり、江口説では百済系の副葬品であったことになる。

しかし、いずれにしても重要なのは、江田船山古墳の被葬者が百済王族系であって、六世紀後半以降も、百済王族系の一族という誇りを持ち続けていたこと、しかも大和政権も認めざるを得なかった勢力であったことである。この歴史的な事実の背景があって、はじめて後述する七世紀後半の「鞠智城」築城に繋がっていくと思われる。

六、「飛鳥文化」の形成

ここで、6世紀の第三期渡来人についても見ておきたい。この時期には、百済の五経博士が「儒教」（『書経』『易経』『詩経』『春秋』『礼記』など）を、百済の聖明王が「仏像」・「経典」、その他にも暦・医などの博士や「採薬師」が帰化している。

平野邦雄氏によれば、蘇我氏は、「国情が危機におちいっていた百済を助け、百済からのおびただしい帰化人を支配下に入れて、勢力を強大にした豪族」であり、「名だたる百済派」であった。(36) その蘇我氏は、7世紀の大和政権のもとで、「大王説」もあるくらいの権力者であった。そして「百済一辺倒の外交」を行い、「今来の才伎」を大和朝廷の「品部」に編入していた。

その「今来の才伎」は、蘇我氏や推古天皇・摂政聖徳太子の庇護のもとで、「飛鳥文化」の形成に大きく貢献した。特に仏教文化での百済人の存在は大きく、南梁系の造仏技術（南朝様式）も、中国の司馬達等・鞍作鳥（止利仏師）らの造仏技術（北魏様式）も、百済経由で伝来している。

蘇我氏は、推古天皇・聖徳太子と血縁的にも政治的にも関係の深い百済系の帰化人であり、そのことが、物部氏との「崇仏・廃仏」論争で勝利し、仏教や仏教文化の公的に導入する大きな契機でもあった。

聖徳太子の死後、蘇我氏の横暴が増したため、大化元（645）年には、中大兄皇子（天智天皇）・中臣鎌足らの「大化の改新」クーデターにより粛清された。しかしその当事者側の斎明天皇（皇極重祚）も天智天皇も、実は百済系の天皇であった。

このように「技術・文化立国百済」からの「今来の才伎」が、日本の古代文化の形成に、多大な影響を与えた。そんな中での660年の「百済国」の滅亡と663年の「白村江」の敗北が、天智天皇にどれほどの大打撃を与えたか、十分想像できる。

七、西海道の古代官道の通過

律令体制の整備を急ぐ大和政権にとって、九州の古代主要官道をどの地域に通すかは、そう簡単な問題ではなかったと思われる。今日でさえ、高速道路のインター・チェンジや新幹線の停車駅の設置に大騒ぎをしている。

しかも高速道路や新幹線の設置には、その利便性を最優先としながらも、地元の要求や有力な地元出身の国会議員によって左右されることがあると聞く。

以上のような現在の卑近な例を引くことは、本論の趣旨からして、非常に気が引ける。しかし古代においても、同様に地元の有力者の勢力関係に大きく左右されたのではなかったか。この推測はかなり有効で説得力があると思っている。

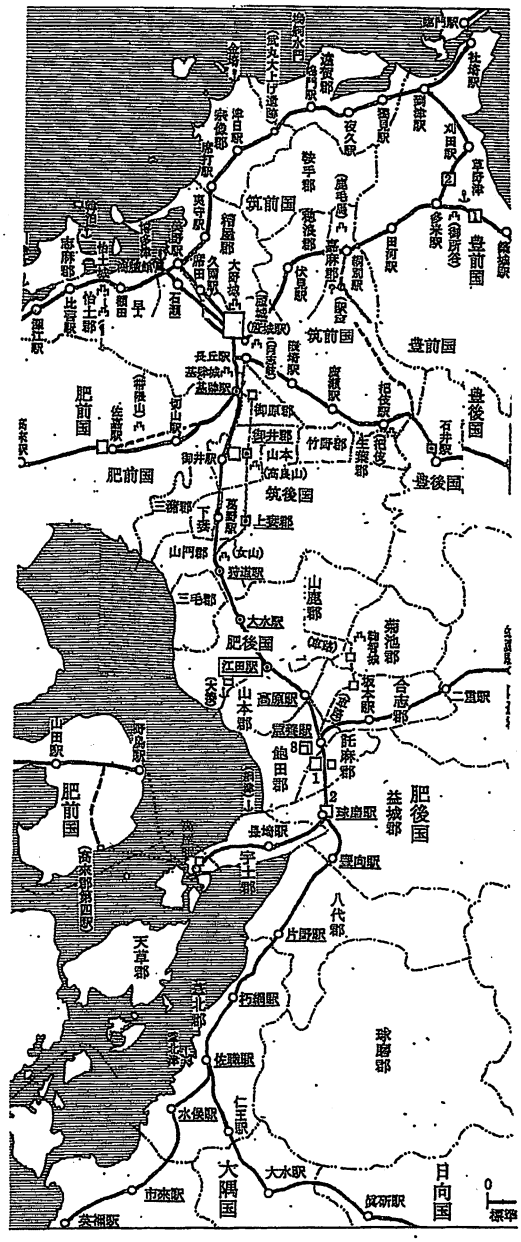
そんな視点から、九州の古代官道を見てみると、主要官道が「江田港」のすぐ近くを通過していること、また「江田駅」を設けたことは、もっと重要視すべきだと思っている。即ちこの江田地域には、それを可能にした当時の有力者がいた証左となる。

1、古代官道の通過

田中正日子氏は、江田船山古墳の被葬者の支配権力について、「被葬者たちは、一族の「統る所を失わず」という在地支配権の確保を前提として、盟主（大王）との関係を維持していることを重視すべき」(37) という。傾聴すべき意見である。

これまで見てきた諸説を背景に、江田船山古墳の被葬者の「統る所」について、拙論を述べてみたい。

前述したように、AD6世紀後半に築造された「江田船山



⑦西海道の古代官道図

古墳」の被葬者は、その副葬品の内容から、百済系王族の一族や庶子など、関係のある人物であったことは間違いない。これらの被葬者の一族は、玉名・江田地域に集住し、かなり有力な百済の「侯国」を立てていたのではないか。その可能性が高い。

その上、多くの考古学や古代史の研究者の意見が一致しているように、彼らは有明海の南半分の交易権を所有し、その交易拠点の一つであった「江田港」を、完全に掌握していたと考えられる。おそらく当時の宋や韓半島との交易権が、被葬者の一族の有力な財源であり、この地域一帯を支配する権力の基盤であった。また大和政権にその存在を認めさせた大きな要因でもあった。

その有力な百済の「侯国」的存在が、律令制度による西海道の古代官道の通過と「江田駅」設置の理由と考えられる。これらの背景には、玉名・江田地域に集住した「江田船山古墳」被葬者の一族ばかりでなく、その「侯国」的存在という条件があった。即ち「江田船山古墳」「江田港」「江田駅」の三者は、密接な関連があるばかりでなく、その存在そのものが、大和政権にとっても無視できないほどの大きさであった。古代官道の通過と「江田駅」の設置は、この大きさの度合いを計る有力なバロメーターではなかったかと推測している。

その後、律令制度の進行に従って、奈良時代には、この玉名・江田地域の「侯国」の中心は、おそらく「江田」から「高瀬」に移っていった。西田説のように、「清原古墳群」の出土品から推測される「江田」の百済系王族の後裔たちの勢力争いがあったとしても、彼らの後裔たちは、確実に「高瀬」地方へ移動・定住したと思われる。

「玉名郡衙」の設置場所から推測すると、やがて「江田港」は利用されなくなり、おそらく加藤清正による菊池川河道の変更前の「高瀬港」（柳町遺跡付近か）に変わったとも考えられる。

また朝廷に仕えた高句麗系帰化人の品部の日置部（神事の聖火の材料調達・炭焼に従事）の長（伴造）であった日置氏は、AD7世紀後半に玉名郡司として下向し、「疋野神社」（式内社）を建立した。この「疋野神社」の祭神は、製鉄神「波比岐」であり、この地に伝わる「疋野長者」伝説（炭焼長者伝説と同類で、鍛冶技術者）は、日置氏に非常に関係深いものである。

【参考】山鹿市の「方保田東原遺跡」の東部には「金凝神社」（「日置神社」、阿蘇十二社）がある。また菊池市河原には、阿蘇姫（後に阿蘇十二神）を祭る「四宮神社」があるが、その宮司は、初代より歴代「日置氏」が勤めている。いずれも古代鍛冶に関係の深い神社である。

八、菊池川流域の在地豪族「火の中君」

前掲『東アジアと江田船山古墳』の中で登場する言葉に、菊池川流域の「火の中君」がある。私には耳新しい言葉であったが、考古学者や古代史研究者の間では常識であった。『日本書紀』の欽明十七（556）年春一月の条に、つぎのように出ていた。

「百済王子・恵（余昌の弟）が帰国を願い出た。よって多くの武器・良馬のほかいろいろの物を賜わり、多くの人々がそれを感嘆した。阿部臣・佐伯連・播磨直を遣わして、筑紫国の軍船を率い、護衛して国に送りとどけた。別に筑紫火君を遣わし、勇士一千を率いて、弥弖（みて、港の名）に送らせ、航路の要害の地を守らせた。（中略）十八年春三月一日、百済の王子余昌は王位を嗣いだ。是が威徳王である」(38)

田中正日子氏は、「百済本記」の「筑紫火君は筑紫君の児で、火中君の弟なり」について、「火中君」の「中」が何をさすのかはわからないとしながら、筑紫君と火中君の間に婚姻関係があったと推測する。(39) そして「菊池川水系に火中君を称する豪族がいて、（磐井の）乱の前に筑紫君と婚姻関係を成立させていた。従って筑紫火君はもちろん、母方の火中君は磐井の乱に筑紫君側に加わっていた」とする。

また田中氏は、火君と火葦北君の擬制的な同族関係または政治的な同盟関係が成立していたとし、それを菊池川水系の在地豪族にも適用する。即ち「火中君」は「火君」と擬制的同族関係にあり、「火中君は、筑紫君と火君という大国造の中間にいて、その両氏との間で勢力の伸長を計っていた。そのために磐井が敗北すると、火君との関係を強化することで一族の存続を計った」という。(40)

また白石太一郎氏は、後述する高木正文氏の菊池川流域の古墳規模の変遷と衰退を考え合せ、「火中君」は「菊池川下流域の勢力は磐井の乱で磐井側に味方したために没落する。それに代わって、肥後南部の氷川の下流域の勢力が出てくる」(41) としている。

そして527～8年の磐井の乱（磐井戦争）から約30年後の556年には、『日本書紀』の百済王子・恵（余昌の弟）の帰国に際して、「阿部臣・佐伯連・播磨直を遣わして、筑紫国の軍船を率い、護衛して国に送りとどけた。別に筑紫火君を遣わし、勇士一千を率いて、弥弖（みて、港の名）に送らせ、航路の要害の地を守らせた」記事に繋いでいる。

田中氏は、「火中君の根拠地について、江田船山古墳などの朝鮮半島との交流が色濃くうかがえる菊池川下流域ではないか」の指摘があることを紹介し、さらに「火中君」の「中」を、「中世には玉名市大字中と山鹿市大字中の「中」に通じる地名が確認されて、しかも装飾古墳も多くある」(42) ことに関連させ、その領域を菊池川中流域の山鹿地域まで拡大している。

百済王族系の江田船山古墳の第3代目の被葬者は、前述した白石説のように、大和政権（百済系天皇）の配下にあっても、おそらくその後も、この菊池川流域の有力な在地豪族として存続したと思われる。

これらの先達の研究者が指摘するように、「火中君」は、菊池川水系の在地豪族で、百済国や国王や王族と深い交流関係のあった一族の後裔であったことは確かであろう。

ここで、前掲の「百済本記」の「筑紫火君は、筑紫君の児で、火中君の弟なり」の文面通りに解釈すると、三者の関係は、筑紫君（父）と子の火中君（兄）・筑紫の火の君（弟）である。田中氏は、筑紫君（父）と筑紫の火の君（弟）の根拠地を鳥栖市周辺とし、火中君（兄）の根拠地は菊池川流域に比定している。そうすると、「磐井の乱」後、「筑紫君」の支配領域は、筑紫・筑後の両国ばかりでなく、肥後国北部も入っていたのではないか。諸先学の見解を聞きたい。

また『日本書紀』では、「磐井の乱」の背景について、つぎのように記されている。

「二十一年夏六月三日、近江の毛野臣が、兵六万を率いて任那に行き、新羅に破られた南加羅（ありしひのから）・喙己呑（とくことん）を回復し、任那に合わせようとした。このとき筑紫国造磐井が、ひそかに反逆を企てたが、ぐずぐずして年を経、事のむつかしいのを怖れて、隙を窺っていた。新羅がこれを知って、こっそり磐井に賄賂を送り、毛野臣の軍を妨害するように勧めた。

そこで磐井は肥前・肥後・豊前・豊後などをおさえて、職務を果たせぬようにし、外は海路を遮断して、高麗（こま）・百済・新羅・任那などの国が、貢物を運ぶ船を欺き奪い、内は任那に遣わされた毛野臣の軍をさえぎり、（後略）」(43)

この件に関して、『東アジアと江田船山古墳』所収のシンポジウム2「磐井の乱をめぐって」の中での八女市教育委員会の赤崎敏男氏の見解は、非常に興味深い。

まず前段には、筑紫国造磐井君は、新羅と同盟して、大和政権に抗したとされているが、赤崎氏によれば、「八女地方からは新羅系の遺物は発見されていない」、「ほとんどが伽耶系の遺物」(44) という。磐井君と新羅との関係は、両者の思惑が、反大和政権で一致した結果の一時的な同盟関係であったことが、十分推測できる。

『日本書紀』の「磐井の乱」の記述には、大和政権は、九州の北・中部の支配権を掌握していた磐井君を平定する口実として、磐井君の反大和政権的な色彩を鮮明にする必要があった。そこで大和政権の援軍を阻止する敵として、磐井君と新羅の同盟関係を強調する作為的記述が感じられる。

また後段の「磐井は肥前・肥後・豊前・豊後などをおさえて」云々に関して、赤崎氏は、八女古墳群の調査の結果から、「磐井の乱後に肥後系の石室が八女の古墳群にいってくる」とし、岩戸山古墳・乗場

古墳・善蔵塚古墳・童男山古墳など30基の古墳の内部構造のほとんどが、肥後系の石室（石棚・石屋形・石棺）であると指摘する。(45)

以上のことから、おそらく「百済本記」の「筑紫火君は、筑紫君の児で、火中君の弟なり」の関係は、考古学的に実証されたのではないか。菊池川流域の古墳群の中に、装飾古墳が集中し、磐井君の勢力を象徴する石人石馬などの石飾文化の存在そのものが、この地域を席巻した証ではないだろうか。

1、前方後円墳の内陸部移動（玉名→山鹿→菊池）

それでは、菊池川流域の在地豪族の「火の中君」は、具体的にどのような経緯のもとで形作られて行ったのであろうか。肥後考古学会の高木正文氏の論文を参考に見ていきたい。

高木氏は、2009年11月1日の日韓歴史シンポジウムin玉名「熊本県北部の古代文化と韓半島」で、古代の菊池川流域を特徴づける装飾古墳について発表。新聞記事によれば、高木氏は「首長墓とみられる古墳が玉名、山鹿、菊池の3領域に分かれて造営されている」と指摘。それぞれの地域で百済系の特徴を持つ副葬品が出土していることを挙げ、「首長らはかなりの富と権力を持ち、大陸と交流していた」といっている。(熊本日日新聞2009.11.2)

当日参加できなかったので、八代市立博物館未来の森ミュージアムの学芸員鳥津亮二氏に依頼し、その発表資料集「熊本県北部の古代文化と韓半島」（熊本日韓文化交流研究会編）を入手した。

以下、この発表資料集「熊本県北部の古代文化と韓半島」の高木論文を中心に、前掲『東アジアと江田船山古墳』所収の高木論文と併せて、その内容を紹介したい。

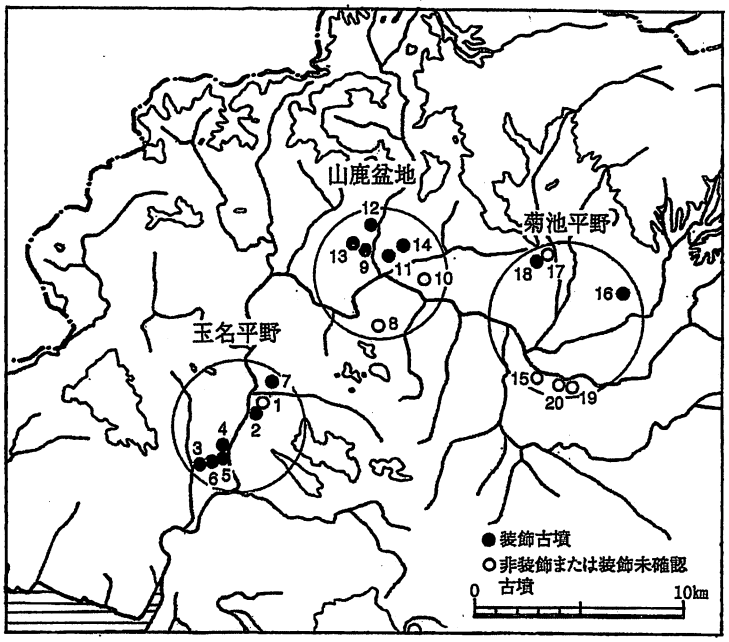


図1　菊池川流域の装飾古墳など分布図（横穴墓を除く）
1江田船山古墳　2塚坊主古墳　3大坊古墳　4馬出古墳
5永安寺東古墳　6永安寺西古墳　7江田穴観音古墳　8岩原古墳
9チブサン古墳　10中村双子塚古墳　11白塚古墳　12馬塚古墳
13オブサン古墳　14弁慶ケ穴古墳　15蛇塚古墳　16袈裟尾高塚古墳
17御霊塚古墳　18御霊隠穴古墳　19木柑子フタツカサン古墳　20木柑子高塚古墳

⑧菊池川流域の装飾古墳などの分布図（横穴を除く）

高木氏は、前著所収の「装飾古墳について－菊池川の古墳－」の中で、全国の装飾古墳約700基のうち、その約3割にあたる200基が熊本県内に集中していること（装飾古墳館によると、2007年5月現在、全国657基、九州367基、県内196基という）、しかも日本列島で最古段階のものもあり、装飾古墳の出現と展開を考える上で、重要な地域であると指摘している。

かなり以前に出された山鹿市博物館編『熊本の装飾古墳』によれば、「菊池川流域の装飾古墳」は、およそ117基で、全国の17.8%、九州の31.9%、県内の59.7%を占めるなど、有数の密集地域である。(46)

現在その後の発見もあって、「菊池川流域の装飾古墳」は約120基で、そのうち、玉名地域では玉名40基（33.3%、但し%は引用者算出））・菊水4基（0.4%）、山鹿地域では山鹿53基（44.2%）・鹿央13基（1.1%）、菊池地域・その他は10基（8.3%）となっている。その10基のうち、菊池・菊鹿は4基である。

さて高木氏は、「菊池川流域の装飾古墳」について、菊池川下流域から上流域に向かって、玉名→山鹿→菊池の装飾古墳の地域的特徴を具体的に論じている。その詳細な内容については、高木論文に譲りたい。ただ拙論の展開上、地域の首長墓として、装飾古墳の有無・古墳の規模や副葬品の種類などを検討する

ことが最適と思うので、高木正文論文からそれに関連する部分を紹介し、かつ拙いコメントを加えておきたい。

①玉名の装飾古墳

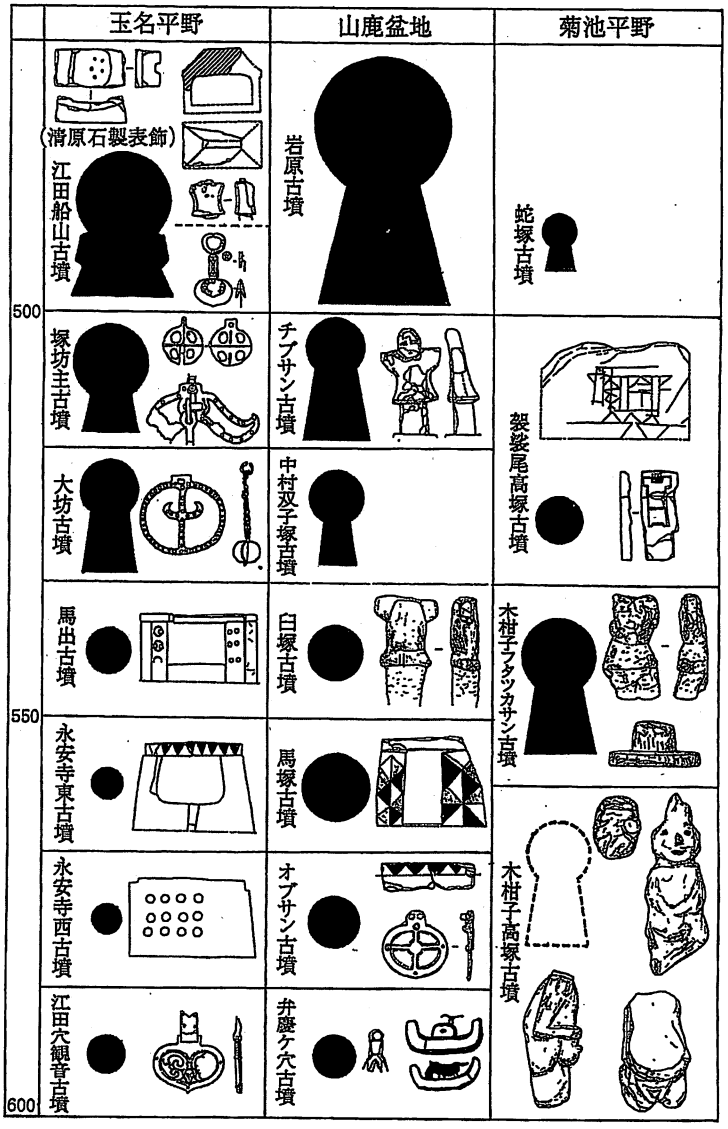
玉名地域の装飾古墳の発祥地は「清原台地」で、京塚古墳（円墳）・虚空蔵塚古墳（前方後円墳）・江田船山古墳（前方後円墳）がある。江田船山古墳は５世紀末の築造で、横口式家形石室から銀象嵌大刀・金銅製冠・金製垂飾付耳飾など武具や装身具が多数出土。また塚坊主古墳（前方後円墳）は、「江田船山古墳の被葬者の直系の首長の墳墓」と推定。前の西田説は、同古墳を「京塚・虚空蔵塚から続く地域の直系」とし「船山被葬者と対抗」するという見解と異なっている。

その後、「玉名平野の首長の墳墓は、清原台地からやや菊池川を下った位置の対岸（右岸）の玉名市玉名へ移動」(47) している。

６世紀前期中葉の大坊古墳（前方後円墳）では、金製垂飾付耳飾・玉類などの装身具や馬具や武具が出土、その一方で、馬出古墳（円墳）・永安寺東古墳（円墳）・永安寺西古墳（円墳）の円墳の築造が始まっている。また６世紀末～７世紀初頭に位置づけられる江田穴観音古墳からは、金銅製心葉形杏葉・金環・ガラス製勾玉などが採取されている。(48)

以上のように、玉名地方の首長墓の装飾古墳は、５世紀末～６世紀前半にかけて、「清原古墳群」から対岸の玉名に移っているが、そこでも百済王族系と思われる副葬品が出土している。

高木恭二氏によって、５世紀前半の玉名・江田地域、特に玉名市玉名から溝上・青木・石貫付近には、舟形石棺の製作工房があって、その石棺は、香川県・愛媛県・岡山県・大阪府に搬送されていたこと、しかし５世紀末期になると、宇土半島に取って代わられ、馬門石製石棺が、近畿地方、特に大阪府・奈良県・滋賀県へ搬送されたことが明らかになった。(49)



⑨菊池川流域の首長変遷図

このことをどう考えるのか。５世紀前半の玉名在住の豪族は、「舟形石棺の製作工房」を持ち、瀬戸内海沿岸地方の香川県・愛媛県・岡山県・大阪府に搬送していた。しかし５世紀末になると、「清原古墳群」の中には、江田船山古墳のように、墳丘内に「横口式家形石室」と百済王族系の副葬品を持つ韓半島からの渡来人が来住しきたと考えられる。

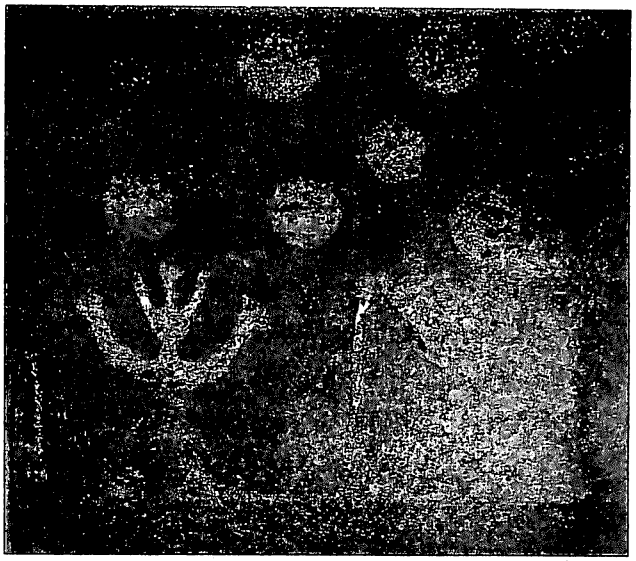
また５世紀末には宇土半島の馬門石製石棺に取って代わられたことは、あるいは玉名在住の「石棺製作工房」の技術集団が、大挙して宇土へ移住した結果ではないのか。移住後も玉名時代の搬送関係は絶

えることなく、宇土に代わっても、以前と同様、あるいはさらに拡大して、近畿地方、特に大阪府・奈良県・滋賀県まで搬送したとは考えられないだろうか。

②山鹿の装飾古墳

山鹿地域の装飾古墳出現前の5世紀後半には、高木氏は、すでに有力首長墓である岩原古墳が存在していた。「菊池川流域で最大の前方後円墳で、主体部は不詳であるが、江田船山古墳と同様の家形石棺と推定される。この岩原古墳の首長の系譜を引く首長が六世紀代になって装飾古墳を築いたもの」と推定する。この地域の「駄原長者」伝説との関連も捨てがたい。

この地域の装飾古墳は、6世紀全体にわたって築造されている。そのうち、6世紀初頭のチブサン古墳（前方後円墳）には「石壁に冠をかぶり両手をあげた被葬者の姿」がある。高木氏の推定通り、百済王族系の人物であると思われる。また、この後に中村双子塚古墳を位置づけている。



⑩チブサン古墳壁画

ついでながら、松本雅明氏は、『熊本の装飾古墳』（熊本日日新聞社　1976年）の中で、同壁画について、「王冠をつけ両腕、両脚をひろげて立っている人物像と、その上に円文がある。人物は踊っているようで、ズボンをはいた服装は異国的で、北アジアの風俗を思わせる」(50) と解説している。

臼塚古墳（円墳）から円墳にかわるが、この遺物には金銅製冠・水晶製勾玉・雲珠などがあり、墳丘上には武装石人が立っていた。この円墳への形態の変化を、玉名地方の馬出古墳の時期に比定される。両地域に共通する「前方後円墳」から「円墳」への墳墓形の変化は何を意味するのであろうか。

馬塚古墳（円墳）の石室からは金銅製尾鉈・大刀・鉄鉾などが出土、オブサン古墳（円墳）からは金銅製杏葉・轡・飾り金具の馬具や金環が発見されている。6世紀末の弁慶ケ穴古墳（円墳）には「鳥船」「馬船」の壁画があり、雲珠・飾り金具などの馬具、鐔・鉄鏃などの武器、金環が発見されている。(51)

山鹿地域の首長墓を考える場合、前述した「茂賀の浦」の石壁崩壊の時期を考慮しなければならない。「茂賀の浦」（弥生湖）の崩壊時期は、おそらくAD4世紀中（上限をAD3世紀後半、下限をAD4世紀末期）と推定されるが、石壁の崩壊によって、「茂賀の浦」（弥生湖）は渇水化し、湖底部分が現れ、やがて耕作可能な干地となった後のことになる。

即ち「茂賀の浦」（弥生湖）の渇水化後、約1世紀して岩原古墳群の首長墓が出現した。その首長の後裔となる装飾古墳の被葬者は、約2世紀後の6世紀前半に、一時的にしろ親新羅の筑紫国造磐井の勢力下となり、石人石馬文化の影響を受けた。しかし上記の副葬品には、百済系の影響が見られるものの、新羅色は薄かったようである。

③菊池の装飾古墳

菊池地域では、5世紀に、七城町林原に蛇塚古墳（前方後円墳）が出現している。この地域の湖底部分は、「茂賀の浦」の縄文湖と弥生湖の境界に当たり、縄文湖底の部分はすでに干地化され、「茂賀の浦」の石壁崩壊から約1世紀は経った弥生湖底の部分も干地化が進み、湖沼は散在するが、耕作可能な土地になっていたと思われる。

その後6世紀前半に、袈裟尾高塚古墳が築造された。石屋奥に靱と連続三角文があり、また靱の浮き彫りの石製表飾がある。中期には花房台地に武装石人を持つ木柑子フタツカサン古墳（前方後円墳）が

築造されている。二重の周壕からは、石製の蓋２個、「コンマ状の文様を銀象嵌した鍔」が出土した。すぐ近くの木柑子高塚古墳（前方後円墳）の周壕からは、冠帽の男性石人や裸の女性石人など、特異の形態の４人以上の石人、また金銅製杏葉なども発見されている。おそらくこの２基の古墳は、「(玉名･山鹿)直系の首長の墳墓」と推測される。銀象嵌の鍔や金銅製杏葉などについては、専門家の教示を仰ぎたい。

また菊池地方の装飾古墳は、玉名・山鹿地域よりも簡単で、装飾性に乏しく、また石人の形態も玉名・山鹿のものが直立した静的な人物表現に対して、作りは粗雑であるが、動的な人物表現などの相違点が見られる。

高木氏は、この石人について「奈良県飛鳥村の石造物を連想させるような特異な形態」(52) と表現している。この見解は、後述する「木柑子フタツカサン古墳出土の「銀象嵌の鍔」と伊勢市立博物館の南山古墳出土の「銀象嵌の鍔」の酷似性との関係からも、十分な考察の必要があると思っている。

高木正文氏は、最後につぎのようにまとめている。

・菊池川流域の玉名・山鹿・菊池の３領域の装飾古墳の横穴式石室は、地域首長累代の墳墓で、系譜的に造営され、３地域それぞれに首長の存在が想定される。３地域の石室構造と装飾文様が連動して変遷することから、政治的な結びつきの強さがうかがえる。

・菊池川流域の首長墓の装飾の特徴は、彩色で描かれ、幾何学文を主に人・馬・武具・舟・鳥なども見られる。特に山鹿の弁慶が穴古墳の「天の鳥船」などは、６世紀後半には新たに大陸文化の思想を取り入れたと考えられる。

個人的見解を許されるならば、同古墳の船上の馬と柩上の鳥の壁画について、前者は、江上波夫氏の「騎馬民族説」に近い。また後者は、被葬者の故国百済への霊魂の葬送を表現したものではないかと思われる。

・菊池川流域の装飾を持つ首長墓からは、玉名の大坊古墳の金製垂飾付耳飾、山鹿の臼塚古墳の金銅製冠飾、菊池の銀象嵌唐草文鍔などの豪華な副葬品を出土、また山鹿のチブサン古墳に描かれた戴冠の人物像は被葬者自身と推定している。

以上のことから、菊池川流域の首長は、江田船山古墳の首長以降もかなりの富と権力を誇り、領内の統治とともに対外交渉も行っていたと考えられる。

・玉名・山鹿においては、６世紀前葉段階で前方後円墳の築造が終わり、その後は円墳に代わるのに対して、逆に菊池では、６世紀後葉段階に二重周壕を持った前方後円墳の築造が始まる。これは菊池の首長が広大な菊池平野と周辺丘陵の生産力を背景にして権力を増大し、中央政権との関係を強固なものにした証とみられる。なお７世紀代に大和朝廷がこの地を古代山城築造の地として選定し、鞠智城を築いたのは、６世紀代の結びつきを抜きにしては語れない。(53)

以上のことから、菊池川流域の装飾古墳の首長級の被葬者たちは、①「３地域それぞれに首長の存在が想定」され、その地域を支配しながらも、「政治的な結びつき」が強かったこと、②いずれも「かなりの富と権力を誇り、領内の統治とともに対外交渉も行っていた」こと、③特に６世紀後半には、「菊池の首長が広大な菊池平野と周辺丘陵の生産力を背景にして権力を増大し、中央政権との関係を強固なもの」にしていたこと、それが、④「７世紀代に大和朝廷がこの地を古代山城築造の地として選定し、鞠智城を築」くことになったとまとめることができる。これらの高木正文氏の推定は、拙論と同じ基盤を持ち、十分納得の行く説である。

しかし高木氏の見解は、「鞠智城」の築城の目的を、従来の通説に依拠し、大宰府後備の兵站基地・食料基地とする。即ち高木氏は、多くの考古学者や日韓の古代史研究家と同様、かつて「茂賀の浦」の湖底であった菊池平野および周辺丘陵の生産力を過大評価し、それが大宰府の後備的な「鞠智城」築城の選定につながったとしている。この前提が拙論と違っている。その理由については、第二部で詳述する。

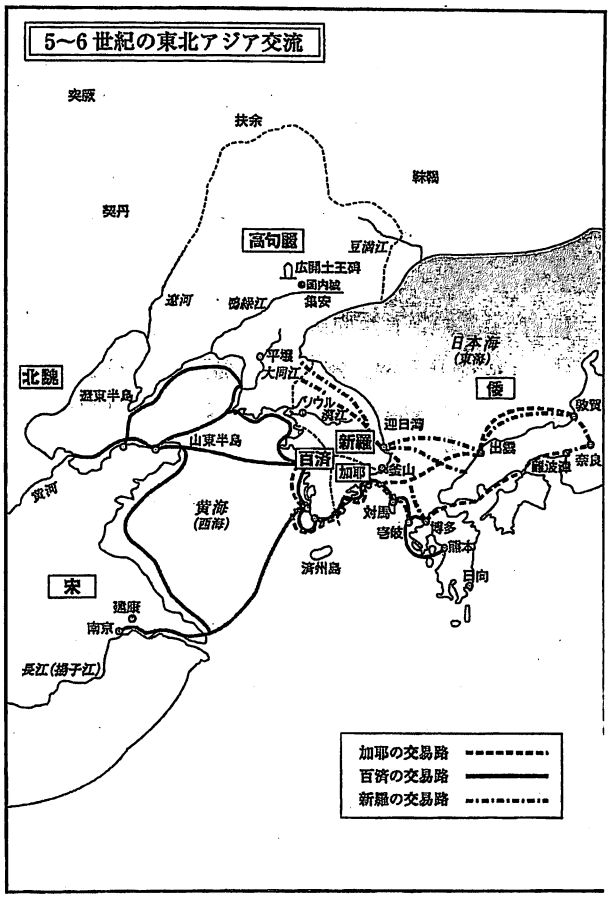
九、菊池川流域は「百済文化圏」

九州全体を視野に、古代の韓半島の人的・文化的交流とその影響を考える時、「新羅系」と「百済系」を考慮しなければならない。

まず「新羅系」の「秦氏」の分布を見ると、平野邦雄著『帰化人と古代国家』によれば、「秦氏」は「西は播磨・美作・備前・備中・讃岐・伊予・豊前・筑前」(54) に及ぶとし、肥後国は入っていない。そのことは、応神天皇の5世紀初期、「新羅系」の「秦氏」が、直接筑豊に入り、「香春神社」(採銅神) を祭り、その後、豊前国の宇佐に入り、そこに宇佐八幡神信仰の基盤を作ったことと一致する。

つぎに「百済系」の分布をみると、前掲の韓国教員大学歴史教育科著 (吉田光男監訳)『韓国歴史地図』(カラー版　平凡社　2006年) の「伽耶の対外交易路」(4～6世紀) に描かれた「百済の交易路」では、倭国での終点は「熊本」になっている。(右図⑪参照)

また「日本に伝わった百済文化」(6～8世紀) では、「百済に影響を受けた地域」を、北部九州の筑前・筑後・肥前・肥後・豊前 (宇佐は含まず) の範囲とし、またその地域の百済式山城は、大野城・基肄城・菊地 (まま) 城などの11城、古墳では船山古墳のみが記入されている (55)



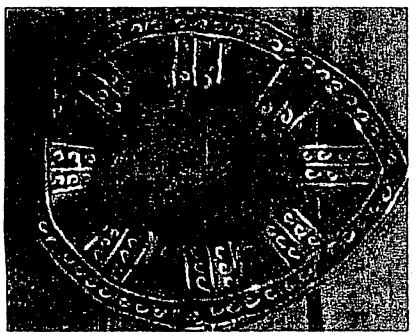
⑪5～6世紀の東北アジア交流

『韓国歴史地図』でも、江田船山古墳の被葬者は、出土遺物の類似から「新羅系」とする説よりも、「百済系」の方が妥当とする。5世紀後半～6世紀中頃には、菊池川流域に「百済系」の渡来人の「侯国」が存在し、肥後国は「百済文化圏」であったことは確実であろう。

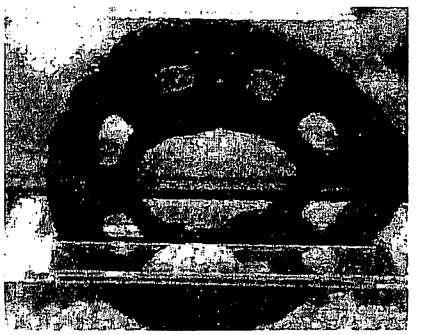
それから約100～150年後、「百済菩薩立像」を持った百済亡命貴族らによって、「鞠智城」が築造された。これらのことからも、菊池地方が「百済式山城」の築城の地となった大きな理由と思われる。

十、木柑子フタツカサン古墳の「銀象嵌の鍔」と伊勢市南山古墳の「銀象嵌の鍔」の酷似性

第二部に入る前に、是非触れておきたいのは、「木柑子フタツカサン古墳」の「木柑子西原遺跡」の二重周壕部から出土の「コンマ状の文様を銀象嵌した鍔」である。おそらくこれは、前掲の高木氏の③「中央政権との関係を強固なもの」にしたとの見解に関連すると思っている。



⑫「木柑子フタツカサン古墳」出土の銀象嵌鍔



⑬伊勢市「南山古墳」出土の鉄地銀象嵌鍔

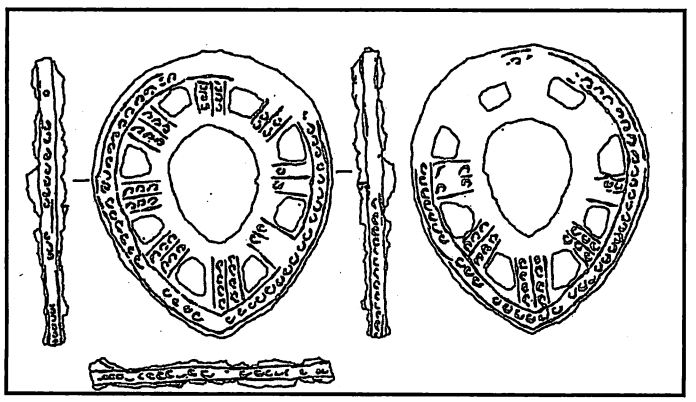
前ページの写真の左は、6世紀前半後期（525～550）の菊池市花房台地の「木柑子フタツカサン古墳」から出土した銀象嵌の鍔である。右は、三重県伊勢市立郷土資料館蔵の6世紀後半の「南山古墳」（みなみやまこふん）出土の「鉄地銀象嵌鍔」である。

後者の「鉄地銀象嵌鍔」を最初に見たとき、その大きさ・形状、8つのすかし窓の格子、周縁に2列の糸象嵌、その間に1列の勾玉文様など、その形態そのものが、前者の「木柑子西原遺跡」（「木柑子フタツカサン古墳」遺構の一部）から出土した銀象嵌の鍔との酷似に驚いた。この両者の写真を見た学芸員も間違えたほどであった。

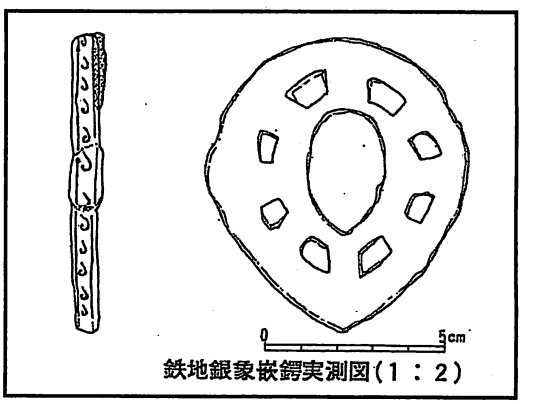
前者の「木柑子西原遺跡」出土の銀象嵌の鍔について、『木柑子遺跡群』（菊池市教育委員会　2002年）では、「長径9.2cm、短径7.6cm、厚さ0.55cmの倒卵形で、茎穴は長径3.8cm、短径2.8cm、重量115g。8つのすかし窓の格子と周縁、側縁に圏線で銀象嵌が施されている。格子部分には2列、周縁と側縁には1列の勾玉文様を圏線が区画している」、また銀象嵌の細工について、「まずノミで細い溝を彫り、その溝に銀の細線を打ち嵌め、最後に磨き上げる糸象嵌の技法が使われている。細線の幅は1mm以内の精緻なものである」(56) と記す。

後者の「鉄地銀象嵌鍔」について、伊勢市教育委員会文化振興課古川毅氏に依頼・入手した『南山古墳発掘調査報告』（伊勢市教育委員会　1982年）には、「直刀の倒卵形八窓の鉄鍔で、長幅8.2cm、短幅7.0cm、厚さ0.7cmの倒卵形で、（中略）象嵌は鍔縁両側の内側1.5mmに（中略）幅1mm前後の銀線象嵌を一条呈し、その間（5mm前後）に4mm～6mmの間隔をもって蕨手文を象嵌している」(57) と記されていた。

高木氏が「コンマ状の文様を銀象嵌した鍔」と表現した象嵌の文様は、前者は「勾玉文」、後者は「蕨手文」と表記している。表記の違いがあったが、実際比較して、その酷似には改めて驚いた。ここで両者の実測図を掲載しておく。



⑭木柑子西原遺跡出土の銀象嵌鍔の実測図



⑮南山古墳出土の鉄地銀象嵌鍔の実測図

遠く離れた三重県伊勢市と熊本県菊池市の出土の鍔を並べてみると、その形状・銀象嵌の文様など、その酷似性は一目瞭然である。それは単なる偶然なのか。まさか同一工房の技術者集団によって作られたと思われない方が多いだろうか。しかしあまりの酷似に、同一工房での製作ではないかと推測もできる。いろいろな文献や考古学資料に当たり、その根拠やヒントになるものがないかを探しているが、いまだ見出していない。

ただ5世紀後半には、前述のごとく、多くの「百済の今来漢人」（「今来の才伎」「今来漢人」）が、すでに日本全国に来住し、かなり高度な象嵌技術を駆使していた。その解読に諸説はあるものの、熊本県玉名郡和水町（旧菊水町）の江田船山古墳出土の太刀銘（銀象嵌）と埼玉県行田市の稲荷山古墳出土の鉄剣銘（金象嵌）は有力な証拠となり得る。

それから約1世紀後の6世紀後半であるので、この程度の銀象嵌の鍔は、どの地域にあっても製作可能であったと考えられる。しかし一体どこに来住した「百済の今来漢人」の製作品なのか。考古学者および古代研究者、加えて化学分析による工房所在地または候補地の割り出しをお願いしたい。

■第二部　古代朝鮮（百済）式山城「鞠智城」

まず、日本古代史における「鞠智城」築城前後の大和政権の動向とその側近勢力であった「百済系」と「新羅系」の影響などについて、その概要を見ておきたい。

一、「鞠智城」築城前後の大和政権

1、「百済系」の斉明・天智天皇

日本古代史に興味があって、これまで数多くの関係書籍を読んできた。今まで日本の古代政治は、天皇（大王）の確固たる政治方針によって行われていたものとばかり思っていた。しかし、最近の研究書を読むと、研究者の有名・無名を問わず、その多くは、百済系と新羅系の帰化人が、側近勢力として、天皇（大王）の政治に、非常に深く関わっていたとの見解が主流となっている。

天皇（大王）の政治方針の決定は、側近の帰化人が百済系と新羅系であるかによって、大きく左右されていたのである。しかも韓半島での両国の国家的対立の構図が、そのまま大和政権の政治方針に大きな影響を与えていた。右の図は、663年の「白村江の戦い」前後の斉明・天智・天武天皇の動向を中心にまとめたものである。(1)

周知の通り、日本の古代文化は、5世紀に、百済の王仁博士によって、『論語』・『千字文』が伝えられて、「儒教」が始まった。また538年（552年説あり）には、百済の聖明王によって「仏教」が公伝された。これらは百済との国際交流の象徴的な証である。

しかし、欽明天皇の「仏教」の受容は、百済系の帰化人である崇仏派の蘇我稲目と排仏派の物部尾輿の対立を表面化させた。この崇仏・排仏論争での物部氏の敗北、蘇我氏の勝利は、百済系の帰化人による側近政治の強化と蘇我氏の一層の専横化を推し進めることになった。

百済系の蘇我氏の勢力下で始まった推古－聖徳太子路線は、横暴な蘇我馬子の牽制と抑制に終始した。これは専横化した百済系の蘇我氏対策であり、また聖徳太子の新羅系の仏教文化の導入を試みる要因となった。

しかし、聖徳太子の抵抗も、太子の死去で頓挫してしまい、その後、同じ百済系でありながら、中大兄皇子は、蘇我氏の排除のため、大化元(645)年に中臣鎌足らと共に、「大化の改新」の武力クーデタを断行した。

大和政権と側近帰化人の派閥(1)

仏教公伝（538年）
欽明天皇（百済系）
崇仏・排仏論争
物部尾輿×蘇我稲目
｜（百済系）
推古天皇（百済系）
聖徳太子×蘇我馬子
（百済→新羅系）｜（百済系）
大化の改新（645年）
中大兄皇子×蘇我蝦夷・入鹿
（百済系）｜（百済系）
斉明天皇
（百済系）
｜
天智天皇（626～71）
（百済系）｜
白村江の戦い（663年）
｜
壬申の乱（672年）
／　＼
×大友皇子　○大海人皇子
（弘文天皇）　（天武天皇）
（百済系）　（新羅系）
｜
持統天皇
（新羅系）

中大兄皇子の「改新政府」は、蘇我氏に代わる新たな百済系帰化人で固められただけで、天智天皇になっても変らなかった。即ち斉明・天智天皇の政治は、「親百済」路線であり、百済系帰化人の側近勢力のもとで行われた。

この最中の斉明六（660）年に百済国が滅亡した。その知らせを受けた中大兄皇子（天智天皇）は、直ちに日本軍2万7000人と兵船400艘を以って、百済国の救済を実行した。しかし天智二(663)年の「白村江の戦い」で、唐・新羅の連合軍に完敗してしまった。

このように、天智天皇は、百済国再興のために、大和政権あげて援軍を派兵したが、もし天智天皇が

新羅系であったとしたら、おそらくこれほどまで百済国再興に情熱を持ち、国家的規模での援助はしなかったのではないかと思われる。

百済国の滅亡後、数多くの百済難民が日本に亡命してきた。天智天皇は、その受け入れに、「百済郡」などを開設、また唐・新羅の連合軍の日本進攻に備えて、九州地域には「大野城」「基肄城」などの古代朝鮮式山城を築造した。それらは、「百済系軒丸瓦」などの出土から、百済官人の指導による築城であった。より正確には「古代百済式山城」と言った方がよいであろう。

「鞠智城」に関して言えば、城の土塁内から「百済系軒丸瓦」が出土し、また2008年10月に発見された「百済菩薩立像」は、百済亡命貴族の「持仏」の可能性が高い。これらのことから、「鞠智城」は「古代百済式山城」と確認された。

ただ同じ「古代百済式山城」でも、前掲の「大野城」「基肄城」とは、その築城目的がかなり違うようである。これまでのように、一括して古代朝鮮式山城とするのではなく、専門家による本格的な築城法やその目的などについての比較研究に期待したい。

天智天皇死後の弘文元（天武元、672）年の「壬申の乱」での大海人皇子（後の天武天皇）の勝利は、「親百済」から「親新羅」への路線変更であり、側近帰化人の勢力交代を意味した。しかしこれについては、必ずしも研究者の間で見解が一致しているわけではない。

2、百済国との交流開始

大和政権の天皇系譜に繋がる百済国との交流開始とその後の歴史的経過について、いま少し『誰でも読める日本古代史年表』（吉川弘文館　2007年）などで詳しく見てみよう。

百済国は、AD4世紀中頃、韓半島南部の馬韓諸国を統一し、王国を建設した。当初は高句麗、6世紀以後は新羅の圧迫を受けたため、倭国（日本）と好みを通じて対抗し続けた。

まず百済との交流は、346年に近肖古王（きんしょうこおう）が即位し、364年に百済人の久氐（くてい）らが、加羅諸国中の卓淳（とくじゅん）国を訪ね、倭国との通交の仲介を求めてから始まっている。2年後の366年、倭国は、斯摩宿禰（しますくね）を卓淳国に派遣し、百済の通交要請に応えるために、使者を送っている。翌367年には、新羅が、百済の倭国への貢物を奪ったので、倭国は、千熊長彦を遣わし、新羅を責めた。

また374年には、近肖古王は、久氐らを派遣して、倭国に「泰和四（369）年」の金象嵌銘のある「七枝刀·七子鏡」（石上神宮蔵）を送ったが、百済王と世子（後継者）が、高句麗の背後を固めるために贈ったものとされている。また高句麗の「好太王碑文」には、391年、倭国が渡海して、百済・新羅を攻撃したと刻まれている。(2)

四世紀末には、「騎馬民族」を象徴する馬具と朝鮮発祥の横穴式石室が、北九州にもたらされ、五世紀初めには、馬具の中心は畿内に移り、後半には生産も始まっている。ちょうど百済系の実在の天皇とされた応神天皇の時期に当たる。この応神天皇には、「九州王朝」の創始説もあり、この馬具や横穴式石室の東進は、「神武東征」神話のモチーフの背景になったと思われる。

ついでながら、金容雲氏は、その間の韓半島の事情について、江上波夫氏の「騎馬民族征服王朝説」での騎馬民族の強調を批判し、百済の「担魯」（タムロ、囲・垣の意）制を重視した説を展開している。

その要旨は、①崇神天皇は、韓半島にあった「倭韓連合王国」の王であった。しかし「加耶」ではなく「熊津（久麻那利）」即ち百済系の出身であった。②その崇神天皇が日本列島を征服したこと。③崇神·応神（温祚系）・継体（沸流系）の王統は、加耶から百済系と交代しながら、いずれも扶余系（百済系）であった。④百済の連合（温祚・沸流）、加耶連合、邪馬台国連合をはじめ、ヤマト政権も豪族連合、すべて連合の基盤は「担魯連合王朝」であった。⑤天皇制の実態は、多くの「担魯」（百済の「日本支店」のような「分国」または「侯国」）による成立であった。⑥蘇我氏（百済系）の権力が甚大なのは、天皇家が「担魯」（百済系）の王で、本国の高官を厚遇した結果であった。(3) この金説は、大和政権と百済の親密な関係の理

由だけではなく、前項で取り上げた蘇我氏専横の根拠も、みごとに解説している。

再び本題にもどろう。倭国は、392年に百済の辰斯王の欠礼を理由に、王位継承に関与し始め、次の阿花王の397年には、倭国に派遣した王子直支（とき）を人質としたが、405年阿花王が死去すると、王子直支を送還、即位して腆支（てんし）王とした。このように、倭国は何かにつけ、百済の王位継承に深くかかわっていた。(4)

一方で、倭国では、「倭の五王」（讃・珍・済・興・武）が、韓半島での優位な立場の確保のために、積極的に中国の宋に朝貢し続けている。この五人の倭王の要求した肩書きには、いずれも「百済」が入っていた。例えば477年の武王（雄略天皇）の場合は、「使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓（辰韓）・慕韓（馬韓）七国諸軍事安東大将軍倭国王」を要求するが、宋は「百済」を削除した肩書きしか与えなかった。(5)

宋を宗主国とした朝貢形態と肩書きの要求は、中国と韓半島の従属関係の理解なくしては出てこない発想である。前述したように、応神天皇（讃）は百済系の「騎馬民族」の出であり、続く四王も百済系の天皇であった可能性がある。

この間にも、すでに見たように、461年には百済の蓋鹵（こうろ）王が、弟の昆支君（こにききし）を倭国に派遣するなど、両国間の交流関係は途切れることなく続いている。

507年に、大伴金村らは、応神天皇の五世孫とされた継体天皇（507～531、在位25年）を即位させた。大伴金村や継体天皇の対百済政策では、509年には任那(6)に逃亡した百済の百姓の子孫を送還し、512年には、百済の要請に応じて、任那四県を割譲するなどの破格の優遇策を講じている。周知の通り、大伴氏の失脚の原因となった。

既述したように、527年、継体天皇は、近江毛野に兵6万をつけ、任那復興のために九州に派兵したが、九州北・中部に勢力を持っていた筑紫国造磐井は、新羅と通じて阻止。翌528年、物部麁鹿火（あらかひ）を派遣、磐井と交戦し斬殺した。（「磐井の乱」または「磐井戦争」）しかし529年、近江毛野は任那復興に失敗、新羅に任那四村を占領されてしまった。

継体天皇が、百済文化の取入口であった任那復興に、倭国をあげて取り組んだのは、おそらく百済系の天皇であったからかもしれない。継体天皇の系統には、百済系の欽明天皇がいる。

百済国は、この継体天皇に対して、513年には五経博士の段楊爾（だんようにに）、516年には段に代えて、五経博士の漢高安茂（あやのこうあんも）を送っている。また宣化天皇の538年には、百済の聖明王が仏像・経論などを贈り、欽明天皇の552年には、釈迦仏・幡蓋（ばんがい）・経論を贈った。（「仏教公伝」）(7)

大和政権と側近帰化人の派閥(2)

天智天皇（百済系）
|
白村江の戦い（663）
|
壬申の乱（672）
／　＼
×大友皇子　○大海人皇子
（弘文天皇）　（天武天皇）
（百済系）　（新羅系）
|　|
|　持統天皇（女帝）
|　|
|　文武天皇
|　（新羅文武王）
|　|
|　奈良遷都（710）
|　元明天皇
|　|
百済王氏・百済氏　元正天皇
は上中官僚・高級　|
技術者の地位確保　|
|　聖武天皇
|　|
|　孝謙天皇（女帝）
|　|
|　淳仁天皇
|　|
|　称徳天皇（女帝）
|（約100年新羅系天皇）
光仁天皇（百済系）
平安遷都（794）
桓武天皇（百済系）・高野新笠（母）

3、百済との交流続行

大和朝廷の最有力者の蘇我氏は、「崇仏派」として「百済仏教」を取り入れた。同氏の氏寺「法興寺」（一名「飛鳥寺」、「飛鳥仏」は有名）の建立には、百済から直接寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工たちが派遣されている。また「法興寺」の落慶法要には、蘇我馬子らは「百済服」を着て参列したという。(8)

『日本書紀』では、「飛鳥寺」に関して、577年11月に「百済王、経論と律師・禅師・比丘尼・呪禁師・造仏工・造寺工をおくる」、588年には「百済、僧・仏舎利・寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工をおくる。蘇我馬子。善尼らを百済に派遣、法興寺（飛鳥寺）を建て始める」、592年10月には「法興寺の仏殿・歩廊を建てる」、593年1月には「法興寺塔心に仏舎利を納め、翌16日、刹の柱を建てる」、そして596年に「法興寺完成、馬子の子善徳を寺司とする（後略）」と、その経過を記す。(9)

記述したように、聖徳太子は、このような「百済一辺倒」の蘇我氏を牽制するために、遣隋使を派遣するなど、直接中国との交流を深め、「新羅仏教」（「広隆寺」の弥勒菩薩は新羅仏）に接近する政策をとる。しかし聖徳太子は、蘇我氏の横暴に苦慮しながらも、その権勢を抑えきれなかった。蘇我氏の完全な抑制は、645年の中大兄皇子・中臣鎌足らの「大化の改新」まで待たねばならなかった。その間も、百済国との文化交流は、少しも途絶えなかった。(10)

その後の倭国と百済国の国際関係がどのような経緯であったか。少々煩雑であるが、前掲の『誰でも読める日本古代史年表』から、「日本書紀」の記述を拾っておきたい。(10)

５９７年　４月「百済王、王子阿佐を遣わして朝貢」
５９９年　９月「百済、駱駝・驢馬・羊・白雉をおくる」
６０２年１０月「百済の僧観勒、暦本・天文地理書などを伝える」
６０９年　４月「筑紫大宰、百済僧ら85人の肥後漂着を報告」
６１２年　　「百済人路子工、御所南庭に須弥山・呉橋を作る。百済人味摩之、伎楽舞を伝える」
６１５年　９月「犬上御田鍬ら、隋より帰る、百済使、遣隋使に従い来朝」
６３０年　３月「高句麗・百済使、朝貢」
６３１年　３月「百済王、王子豊璋を人質として日本に送る」
６３５年　６月「百済使、朝貢」
６３８年　　「百済・新羅・任那使、朝貢」
６３９年　７月「舒明天皇、百済川の畔で大宮（百済宮）と大寺（百済大寺）造営を開始。12月百済川の畔に九重塔を建てる」
６４０年10月「入唐学問僧南淵請安・留学生高向玄理、百済・新羅の朝貢使とともに帰国。舒明天皇、百済宮に遷る」
６４３年　４月「百済王の子翹岐、調使とともに来朝」
６４５年　７月「高句麗・百済・新羅使、朝貢」
６４６年　２月「高句麗・百済・任那・新羅使、朝貢」
６４７年　　「新羅王子金春秋（のちの武烈王）ら、高向玄理とともに来朝し、人質となる」
６４８年　２月「高句麗・百済・新羅に学問僧を派遣」
６５１年　６月「百済・新羅使、朝貢」
６５２年　４月「百済・新羅使、朝貢」
６５３年　６月「百済・新羅使、朝貢」
６５４年　７月「西海使吉士長丹ら、百済・新羅の送使とともに唐より帰国」
６５５年　７月「越・陸奥の蝦夷194人、百済の調使150人を饗する」この年「高句麗・百済・新羅使、朝貢」
６５６年　　「高句麗・百済・新羅使、朝貢」

そんな中の660年9月、「百済使、新羅・唐軍の侵攻による百済滅亡を伝え」てきた。これを機に、倭国での百済国再興の動きが活発になった。

６６０年　　「10月百済の将鬼室福信、唐人捕虜100人余を献じ、救援と人質の王子余豊璋の返還を要請。12月斉明天皇、難波宮に移り百済救済の準備をする。この年、百済救援のため、駿河国に船を造らせる」
６６１年　　「1月天皇・中大兄皇子・大海人皇子、百済救援のため征西の途に就く。（中略）7月天皇、

朝倉宮で没し、皇太子中大兄皇子、称制、長津宮に遷り、百済救援のための指揮をとる。8月阿曇比羅夫・阿部比羅夫らを将軍とし、百済救済に遣わす。9月百済王子余豊璋を百済に送還。兵5000余を豊璋とともに百済に遣わす」

662年　「1月百済の将鬼室福信に矢・糸・綿・布・韋・稲種を送る。5月阿曇比羅夫らを百済に派遣し、豊璋を王位に就かせる」

663年　「3月上毛野稚子・阿部比羅夫らに、兵2万7000人を付し、新羅に派遣。6月百済王子余豊璋、鬼室福信を謀反の疑いで殺害。8月百済軍、唐・新羅軍と白村江で戦い大敗、豊璋、高句麗へ逃亡。9月百済の州柔城降伏し、百済の復興戦争は終結。この月、日本軍、百済遺民とともに帰国」

以上のような大和政権と百済との密接な交流関係から、天智天皇の百済国の救済のための親身の行動は、百済系の天皇として当然のことであった。

4、「百済王氏」・「百済氏」

663年の「白村江の戦い」での敗北によって、百済国の滅亡は確実となった。百済国からは、天智天皇を頼って、王族ばかりでなく、高級官僚から下級官吏・技術者・農民まで、あらゆる階層の多くの難民たちが、一挙に亡命してきた。

これらの亡命難民の中には、「今来漢人」よりも、さらに新しい帰化人となる「百済王氏」（くだらのこにきしうじ）・「百済氏」や高級官人（亡命貴族）らがいた。7世紀後半には、天皇の姻族として大きな勢力を持つことになる。

これらの「百済王氏」・「百済氏」・高級官人の亡命者や子孫たちの中には、天智天皇の設置した近江国の蒲生郡や神前郡に定住し、倭国の国防戦の重要な役割として参加している。またその後は、大学寮・陰陽寮・内薬司・内匠寮などの官人として、学問や技術の分野をリードすることになる。

これらの亡命難民たちは、百済での身分や階層に応じて、余（百済王氏）・鬼室（高級官僚）や答本（築城・学士・大学博士・大宰大典〔漢詩指導〕・典楽頭〔左大史〕・右大史）・沙宅（法官大輔・学士・呪禁博士）・四比（築城・陰陽允・博士・天文博士・算術優遊）・吉（解薬・医術優遊・内薬佑・正、侍医）・谷邦（兵法・陰陽師）・憶頼（築城）・楽浪（大学頭〔文章優遊〕）・木素・許などの氏姓が与えられ、大和朝廷の官人として編入される。

また8世紀の律令制度のもとでは、「実務的知識的官人」あるいは「雑戸」（宮廷工房）として、古代日本文化の主導的な役割を果たすことになった。(11)

「百済王氏」や「百済氏」について、山川出版社の『日本史広辞典』（1977年）により、さらに詳しく見ておきたい。

◎「百済王氏」は、古代朝鮮語で「くだらのこにきしうじ」「くだらのこきし」と読み、百済最後の王義慈王の皇子善光王を祖とする氏族で、旧姓は余であった。善光は、舒明朝に兄豊璋とともに倭国に渡ってきた。百済の滅亡・「白村江の戦」の後も残留し、「百済王」と称され、諸蕃賓客として遇された。持統朝には「百済王」姓を賜与され「化内民」となる。

8～9世紀前半になると、朝堂において重要な地位を占め、聖武天皇の寵臣であった敬福をはじめ、衛府や出羽・陸奥国司などの軍事関係の要職に就いた者も多くいた。また桓武・嵯峨両朝には、後宮にも勢力を持ち、百済系氏族の宗家的役割も果たした。

◎「百済氏」は、百済を氏名とする氏族で、いずれも百済系と考えられる。姓には、王（善光王の子孫）・朝臣（百済王族の子孫と考えられる余氏）・宿禰（余・飛鳥戸造氏）・公（余氏のほか鬼室・百済部氏）があり、これらの姓には、上中級官人や高級技術者がいた。またその下位には、造（連）・伎（百済手部・百済戸）の姓、さらに無姓（舎人・校生）も多くいた。(12)

なお672年の「壬申の乱」から奈良時代いっぱいの約1世紀は、天武天皇からの新羅系天皇が続いた。

しかしその間も「百済王氏」・「百済氏」は、大和政権の上中級官僚や高級技術者の地位を確保し続けていた。そして再び百済系の光仁・桓武天皇が天皇の座に就くと、その以後はずっと百済系天皇の系譜が続くことになった。(57 頁の「大和朝廷と側近帰化人の派閥 (2)」図参照)

5、「王興寺」の建立

2008 年 4 月 16 日付の「朝日新聞」は、「日本仏教起源に迫る」「飛鳥寺に先行、百済・王興寺遺跡」、「創建の王、技術者派遣」の見出しで、国立扶余文化財研究所の調査により、「王興寺」の塔の構造（地下に仏舎利）・出土品・瓦の文様などが、大和の「法興寺」（飛鳥寺）と酷似していること、また出土した舎利器の銘から、「王興寺」（王が興した寺院の意）は、百済の威徳王が「亡くなった王子の冥福」のために発願した寺で、577 年 2 月の創建であったことが判明したと報じた。

すでに見たように、『日本書紀』には、百済の威徳王は、同じ 577 年の 11 月、倭国に「経論」と律師・禅師・比丘尼・呪禁師、それに造仏工・造寺工を遣わしている。

早稲田大学の大橋一章氏は、これが「日本で造寺工・造仏工」の養成に繋がり、人材が育った 12 年後の 588 年には、威徳王は、再び僧・仏舎利・寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工を遣わし、さらに蘇我馬子が氏寺として、「法興寺」（飛鳥寺）を建て始める契機になったという。

その後、592 年 10 月には「法興寺」の仏殿と歩廊が完成し、翌 593 年 1 月には、「法興寺」の塔心に仏舎利を納め、翌日には刹の柱を建て、596 年には「法興寺」（飛鳥寺）が完成、百済の「王興寺」建立から 20 年後に、蘇我馬子は大和に「法興寺」（飛鳥寺）を創建したことになる。

また百済扶余の「王興寺」とその伽藍や構造、出土品や瓦の文様などの酷似（但し東北学院大学の佐川正敏氏は「単なる模倣ではない」という）は、百済の威徳王が、「王興寺」にかかわった造寺技術者を、蘇我馬子の氏寺「法興寺」（飛鳥寺）の創建のため、丸ごと派遣した可能性も考えられるという。これは、ただ倭国と百済国の文化的交流が、非常に濃厚であったというばかりでなく、百済の最高の造寺技術者を、惜しげもなく、当時の倭国の天皇を凌ぐ最高権力者蘇我馬子に提供していたことになる。国学院大学の鈴木靖民氏は、「百済と倭の王権間の交流」とまでいっている。

二、「白村江」の敗北・「百済国」の滅亡・亡命難民

1、「白村江」の敗北、「百済国」の滅亡

韓半島では、高句麗・百済・新羅の 3 国が鼎立の状態にあった。その中で、新羅は百済と同盟して、高句麗に対抗したり、百済は新羅に対抗するために高句麗と同盟するなど、3 国は国家生命をかけた駆け引きにしのぎを削っていた。

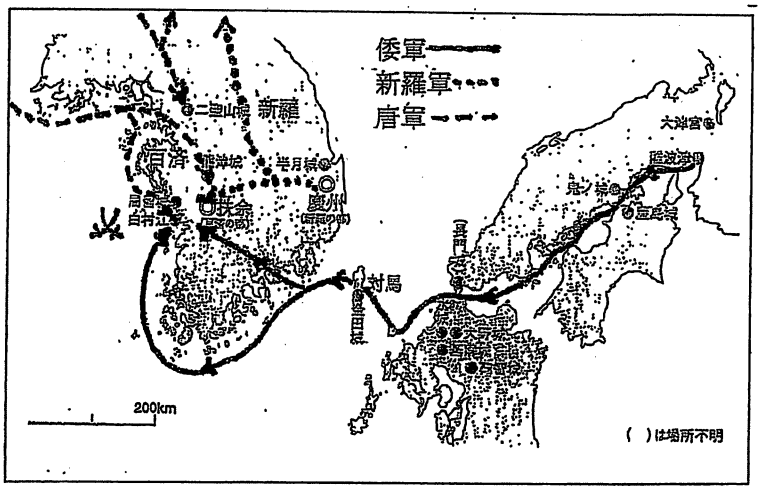
一方中国では、220 年後漢の滅亡後には、魏・呉・蜀の 3 国が覇権を争い、さらに五胡十六国や南北朝時代には複数の王朝が並立、または離合集散の分裂時代が続き、581 年に終止符を打った。隋の文帝（在位 581 ～ 604、北周の楊堅）で、589 年には南朝の陳王朝を滅ぼし、統一王朝の隋を建国した。

文帝は、周辺諸国に国域を拡大する征服戦争を行ったが、高句麗は遼河沿線の城塞を堅固にするなどして抵抗したので、隋の水陸軍 30 万による攻撃の試みは失敗に終わった。その後継者の煬帝は、30 万 5000 人の別働隊で平壌の直撃に失敗、再度の高句麗遠征も失敗した。加えて 3 度目の断行は、民心の離脱や兵卒の逃亡などの抵抗でまたもや失敗、とうとう 618 年に隋王朝は 40 年足らずで自滅した。

ついで高祖（在位 618 ～ 626）が唐を建国、2 代目太宗（在位 626 ～ 649）は積極的な勢力拡大政策を実施した。643 年に新羅は、唐に使臣を派遣し、百済が新羅の 40 余の城を攻取、高句麗と連合して、新羅の唐への入貢路を塞いでいると報じ、唐の救援軍の派遣を要請した。これは新羅の唐と高句麗の離

間策であった。

隋が高句麗攻略をした時、新羅はすでに高句麗の領地500里を掠奪していた。唐の太宗は、新羅の言い分のみを採用し、高句麗を背後から攻撃するために、百済出兵を承諾した。この方針は、病弱な高宗（在位649～683）に受け継がれたが、実際には則天武后の采配であったといわれる。



⑯「白村江」の戦い

このような唐の新羅支援のうちに、新羅の金春秋は、654年に即位して武烈王（在位654～661）となり、「遠交近攻」の外交手腕によって、百済・高句麗に敵対する新羅・唐の連合軍を実現させた。これに対抗して、655年に百済は高句麗と連合軍を結成し、新羅北部の33城を奪った。しかし新羅はこれを好機とし、唐の援軍を要請した。高宗は660年に水陸13万の大軍で百済を攻撃、新羅の武烈王も5万の大軍を百済に差し向けた。

百済は階伯（ケベク）将軍ら5000人の決死隊で応戦し、相手国に苦戦を強いったが、多勢に無勢の百済は、その都である泗沘城（扶余）を唐・新羅の連合軍に包囲された。百済最後の義慈王は熊津城（公州）に脱出して立て籠ったが、ついに660年に降服し、百済は滅亡した。そして唐軍は、百済王や王族、重臣93人、百済人1万2000人を捕虜にして帰国、泗沘城には唐軍1万人と新羅軍7000人が駐留した。

この直後も、旧将軍の鬼室福信らによって百済再興の戦いが続けられた。福信は日本に人質になっていた百済王子余豊璋を帰国させ、百済王にした。また福信の要請に応え、中大兄皇子や中臣鎌足らは2万7000人の援軍を送った。しかし百済国では、福信が余豊璋に殺されるなどの内紛が起こり、日本軍が到着する前に唐・新羅の連合軍のために、再興軍の居城周留城が包囲されていた。錦江下流の「白村江」（白江）では、唐の水軍170艘が、日本軍の到着を待ち構え、663年8月の「白村江」の戦いで、日本軍船と4度戦って、400艘を焼き払うなど、圧倒的な勝利をおさめた。（『旧唐書』）

2、鞠智城は「百済難民施設」では

前述のように、660年百済国は滅亡した。再興を試みたが、663年8月の「白村江」では大敗北、百済国から倭（日本）への大量の亡命者が続出した。

『月刊朝鮮』編纂委員の鄭淳台（ジョンスンテ）氏は、「世界史の決定的瞬間⑥－白村江海戦で倭軍全滅する」で、依田豊氏の「前後合せてすべての亡命者数は5500人になり、歴史からぬけ落ちた人たちを加算するとより多かったと予測される」（『日本歴史地理』16巻6号、菊池市国際交流課・金相廷〈キムサンジョン〉氏訳）を紹介している。しかし正確な実数は「未詳」というのが正確な表現であろう。その中には百済王族や官人ばかりでなく、多くの農民たちも含まれていたと思われる。

668年近江宮で即位した天智天皇は、これ以前の664年には百済の王善光（こきしぜんこう）を難波に移住させ、665年には近江国の「神前郡」（『倭名抄』では神崎郡）に百済人400余人の男女を、ついで669年には同国蒲生郡に男女700余人を居住させている。また、摂津国には「百済郡」（『倭名抄』によれば、「百済郡」は東部・南部・西部の3郷からなる）を設け、百済人を集住・保護している。

その上、668年に滅亡した高句麗国からの難民も少なくなかった。高句麗人たちは、日本海を渡って能登半島や越前海岸に漂着、その後信州・甲州から関東地方に分散居住したと推定されている。『続日本紀』の716年の項には、駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野の7国にいた高句麗人1799人を武蔵国に移住させ、「高麗郡」（『倭名抄』では高麗〔こま〕郡）を設けている。そしてリーダーの高麗若光を祭っ

た「高麗神社」（埼玉県入間郡日高町）まで創建している。

以上のような天智天皇の百済・高句麗の亡命者の難民対策は、おそらく他の国々でも行われたと思われる。例えば田中政喜氏は、「大宰府」付近では、665年に百済の農民400人、翌666年には2000人が帰化・土着したという。(13) これらの百済難民たちは、朝鮮（百済）式山城の「大野城」はもちろん、近くの「基肄城」の築城にも関係したと思われる。

さらに奈良期の条里制に繋がる新田開発にも、先進的な百済式の農業・土木技術がフルに活用されるなど、天智天皇が進めていた天皇中心の古代中央集権国家建設への国家プロジェクトにも参加させられたと考えられる。

このような歴史的背景からすると、「鞠智城」の場合も例外ではなかっただろう。即ち「鞠智城」の築城様式も、前の2城と同じく土塁・石塁の防壁と水門という基本的な設備など、朝鮮（百済）式山城の特徴を備えている。

「鞠智城」は、「大野城」や「基肄城」と同様、百済亡命の高等官人の指揮による築城であり百済からの難民たちも一緒になって築城に参加したものと思われる。しかし諸説では、「鞠智城」はあくまでも「大宰府」防備のための山城でしかない。

同じ築城条件のもとで作られた「鞠智城」であっても、地理的な条件からすれば、「大野城」や「基肄城」とは、まったく違った目的のために築城されたのではないか。即ち「鞠智城」築城当初の本来的な目的は何であったのか。これは「鞠智城」に関心のある多くの人たちの知りたがっていることである。

しかし専門家たちも、何故かこの遠距離や辟地という不便な条件を直視してこなかった。どうして「鞠智城」は、いまよりも不便極まりない当時の米原台地を選んで築城したのか。この疑問を解くには、従来の「大宰府」防備説から一度離れてみることが必要であろう。

従来の「大宰府」防備説は、多くの考古学者や古代史研究者など、その分野の専門家の間では、すでにパスした通説であり、いまでも異議を申し立てる研究者はいない。まったくの門外漢の者が、この通説に「物申す」ことは、非常に勇気がいる。しかし意を決して、これまで一度も俎上に上らなかった「百済難民施設」説を提唱したい。

これまでの諸先輩の諸説を踏まえた上で、さらに個人的ないくつかの疑問などを考察し直した結果、当初から九州に亡命してきた百済人の中には、例えば第一部でみた江田船山古墳などに代表される百済王族系一族の後裔で、すでに菊池川流域に定住し、これらの地域を支配していた同胞たちを頼ってきた難民たちも少なくなかったのではないかと思われる。

即ち「鞠智城」は、これらの難民たちを受け入れる施設的な要素を、築城そのものに持たせていたのではなかったのか。「大宰府」防備説への疑問は、とうとうこの「百済難民施設」という仮説に行き着いてしまった。是非とも、専門家間の視点で、この私説の検討をしていただきたい。

さらに説明を加えておきたい。660年の「百済国」の滅亡、その後の再興の動きも、663年「白村江の敗戦」によって完全に消滅し、多くの百済難民がおそらく日本各地に亡命してきたと思われる。この菊池川流域の玉名・山鹿・菊池にも、百済難民は百済王族系一族の後裔たちを頼って來住したであろう。

しかも新羅・唐連合軍による亡命百済難民の追撃の噂を恐れ、百済難民たちは、有明海の沿岸から遠く離れた内陸部をめざし、菊池川を遡り、山鹿郡を過ぎ、さらにその奥地の菊池郡を目指したのは自然な行動である。彼らにとって、まさしく僻遠の高地の米原台地こそが安全地帯であった。その地に「百済難民施設」の条件を満たす「鞠智城」（推定665年）を築城したのではないだろうか。

おそらくこの道案内は、かつて「江田船山古墳」の百済系王族の一族の被葬者の後裔が買って出たのだろう。今度発見された「百済立像」は、亡命貴族の持仏像と推定されているが、その時持参して来たのかもしれない。

『続日本紀』の文武二（698）年の「大宰府をして大野・基肄（肄）・鞠智の三城を繕治せしむ」の大野城・基肄（肄）城・「鞠智城」の一挙記載の記事は、あくまでも古代山城の「繕治」に注目して考えるべきであって、

この三つの古代山城を、常に大宰府と関係づけて考察することは、「はじめに」で述べた如く、かなり問題があるのではないかと思っている。即ち大野・基肄（肆）の二城は、大宰府の守備であった可能性は非常に高いことは間違いないが、「鞠智城」の築城に関しては、拙論の方がより自然ではないだろうか。

3、「白村江」の捕虜たち

660年8月には百済は滅亡し、663年8月の「白村江」後、多くの倭（日本）人捕虜が唐の長安に連れ去られている。

倭軍の兵士たち2万7000人の多くが、韓半島に一番近い九州地方で徴達されたことは十分想像される。その証左となるのが、「白村江」での日本人捕虜の出身地である。しかしその資料は極端に少ない。その中でも、菊池地方の近隣には、合志郡の壬生諸石（みぶのもろいし）や八女郡の大伴部博麻（おおともべのひろまろ）などがいた。

まず合志郡の壬生諸石については、『日本書紀』の持統十（696）年夏四月の条に、「戊戌（18日）、追大弐を以て、伊予の国風速郡物部薬と肥後の国皮石郡（合志郡）の壬生諸石と与に授け、并びに人ごとに絁（あしぎぬ）四匹、糸十絇（く）、布廿端、鎌廿口、稲一千束、水田四町を賜い、戸の調・役を復（ゆる）す。久しく唐の地に苦しみことを慰めたまう」（原漢文）とある。(14)「壬生諸石」は、663年の「白村江」の敗北後、唐軍の捕虜となり、34年間長安に抑留され、下賜された品々は、その代償であった。

また八女地方で「白村江」後に捕虜になったのは、大伴部博麻の他に、土師連富杼（はしのむらじほど）・氷連老（ひのむらじおゆ）・筑紫君薩夜麻（ちくしのきみさつやまろ？）・弓削連元宝児がいて、長安に抑留された。大伴部博麻は、そこで対馬・壱岐攻撃や九州攻撃などの論議を聞いた。それを日本の大和朝廷に知らせようと思ったが、悲しいかな、捕虜の身で、その費用もなかった。そこで大伴部博麻は「我何児（汝か）等と共に帰国せんと欲すれども、衣食の費なき故に能はず、願くば、我が身を売りて、以て衣食の費に充てん」と、自らは奴隷となって、他の者を日本へ帰した。

大和政権は、この報により、天智三（664）年には対馬・壱岐・筑紫国に防人と烽火台を設置、また水城が設け、さらに翌（665）年八月には長門城・大野城・基肄城、十一月には大和の高安城、讃岐の屋島城、対馬の金田城を築城したという。

その大伴部博麻は、28年間も奴隷の辛酸をなめ、持統四（690）年九月二十三日、新羅の送使大奈末金高訓らに従って、故国筑紫に帰着することができた。

『日本書紀』によれば、大和政権は、一ヶ月後の十月二十二日に、「汝、独り他界に淹滞すること、今に三十年なり。朕、厥（その）朝（みかど）を尊（おも）ひ、国を愛し、己を売りて、忠を顕せるを嘉す。故に務大肆（正六位？）、并びに絁（あしぎぬ）五匹、緜（わた）一十屯、布三十端、稲一千束（水田二町分、米100俵）、水田四町、其の水田は、曾孫（ひひこ）に乃至（いたせ）る也。三族の課役を免じ、以て其の功を顕わさむ」（原漢文）と詔し、永年にわたる捕虜生活の辛苦に、破格の恩賞で以って遇した。

尚八女郡北川内の室園神社の神職らが、美談として顕彰し、文久三（1863）年に「大伴部博麻呂碑」を建立、今日に至っている。(15)

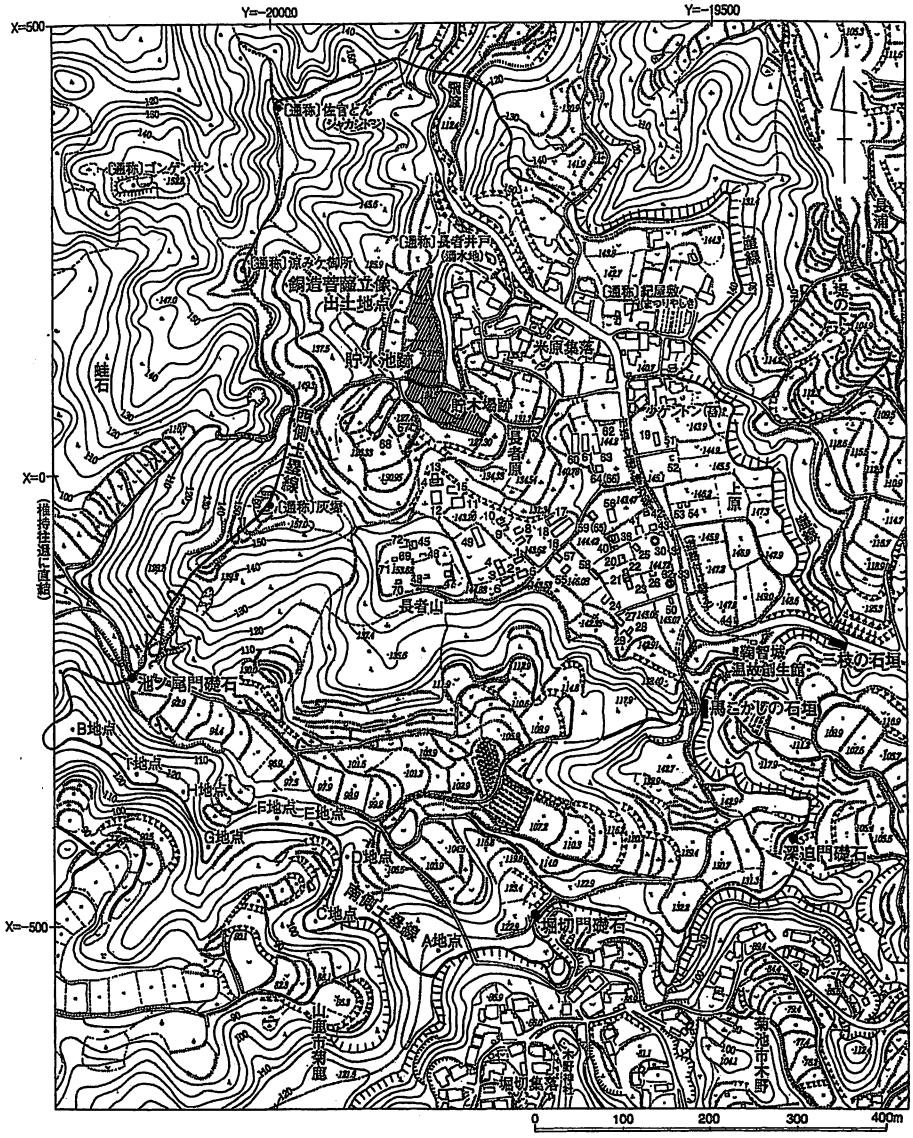
『西合志町史』では、「壬生諸石」の身分について、氏姓制度の時に皇子たちの養育のための「子代部・名代部」が、推古十五（607）年春二月に「壬生部を定む」即ち「壬生部」の名に統一された大和政権の伴部（品部）であろうと推測している。(16)

また「大伴部博麻」は伴部（品部）であり、「土師連」「氷連」「弓削連」は、天武十三（684）年の「八色の姓」では、第7位の姓にあたり、「筑紫君」は後の郡司クラスであった。これらの資料から、「白村江」の援軍に徴達され、唐軍の捕虜になった兵士たちは、律令制度の兵役で徴達された公民（班田農民）ではなく、地方の有力な富裕農民クラスの公民であったと考えられる。

三、古代朝鮮式山城「鞠智城」の築造

1、従来の諸説

まず古代朝鮮式山城「鞠智城」の全容図を掲げておきたい。(17)



⑰「鞠智城」の全容図　(注1) 1～72は検出建物跡
(注2) 長者原地区・上原地区は調査時の地形である。

①「鞠智城」築造の経緯

663年8月の「白村江」での倭軍の大敗北は、中大兄皇子ら大和政権に「唐・新羅の連合軍」による大逆襲を想起させ、直ちに日本列島の厳重な警戒体制を実施した。

まず「白村江」の直後、博多湾岸にあった「筑紫大宰府」(「那の津官家〔みやけ〕」)を、現在の「大宰府」まで移動させ、664年には「水城」を築き、第2の防衛線を構築した。さらに「対馬・壱岐・筑紫に防人と烽火を置く」(『日本書紀』)、即ち九州防備のために「防人」と通信手段として「烽火台」を配置した。しかしこの時代の「大宰府」は、小規模な掘立式の簡素な建築であったと推定されている。また「防人」そのものが令制化以前の創設であり、急場しのぎの対応であった。(18)

天智天皇は、665年に百済亡命官人の達率答本春初(とうほんしゅんそ)に「長門城」、達率憶礼福留(おくらいふくる)・四比福夫(しひふくぶ)に、「大野城」と「基肄(きい)城」を築城させた。これらの山城は、「逃げ込み城」とか「かけ込み城」といわれる「朝鮮(百済)式山城」の様式で、本来「戦うための城」ではなかったとされる。

しかし「大野城」は、「大宰府」の背後にあり、その立地場所から「水城」と共に、「大宰府」の防備を第一の目的にしたものであった。また「基肄城」は、佐賀県鳥栖市基山にあって、「大宰府」の後備的山城であり、有明海方面からの攻撃に対しては、前備的な山城の役割を持つことは、多くの研究者の一致するところである。

しかし「鞠智城」は、「大野城」と「基肄城」とまったく地理的な条件が違い、「大宰府」から遠く離れた熊本県山鹿市菊鹿と菊池市稗方にまたがる米原台地、当時も相当辺鄙な地域に築城されている。このことが諸説の生じる大きな原因となっている。

②「鞠智城」の立地条件

その代表的なものが、北條秀樹氏の国内支配の拠点設営説である。新版『古代の日本』③「九州・沖縄」で、北條氏は「大野城・基肄城をはじめとする山城の性格も再考を要するであろう。白村江対応策としてはその築城時期の遅れがすでに指摘されているが、これを国内支配の拠点造営としてみれば不都合はない。鞠智城の位置の問題がある。鞠智城の造営は天智紀にはみえないが『続日本紀』(以下『続紀』と記す)六九八（文武二）年条に大野・基肄・高安各城とともに修理された記事が残るので、天智期の築城とみても大過あるまい。現在熊本県菊鹿町米原の高台一帯に遺構が残るが、菊池川中流、前面に菊地平野が開け、はるかに有明海を望む場所に位置している。軍事拠点としては好適な位置を占めているが、こと唐・新羅軍の来攻に備えるものとしては不適当であろう。たとえ有明海からの攻撃を想定したとしても、やや曖昧な位置である。しかし視点を国内支配の面に切り替えれば、肥後・熊本の平野を望むこの位置は絶好である」と論じている。(19)

他の諸説も大同小異である。そのいくつかを紹介し、各説の後に、私の疑問を付しておいた。

①地理的防備位置説：「築城誘致」の候補地は他にも数多く考えられる。何故「鞠智城」なのか。
②構造的堅固な城郭説：朝鮮式山城（駆け込み城）であるが、大野城・基肄城の築城目的とは明らかに異なるのではないか。
③菊池平野の兵糧・兵站説：当時の地形的景情は、「茂賀の浦」の湖底領域が菊池平野であり、全体に多くの「沼地」が点在し、「干地」への移行期であった。8世紀前半に条里制が施行され、肥後国（2万3500余町の口分田）は、農業生産力の増大により、上国から大国へ昇格するが、兵糧・兵站基地の可能性は8世紀末以降が妥当である。
④大宰府出先機関説：大規模な倉庫群・政庁跡らしき遺構や八角鼓楼跡などから、一時的な防備施設ではない。大宰府の「隼人」対策の拠点説があるが、後世の追加機能ではないのか。
⑤軍事・経済上要地説：木崎温故創生館長談「7世紀後半の主要道路は菊池から山鹿・南関・八女へ通じ、鞠智城は軍事・経済上の要地」(2007年6月29日付・「熊本日日新聞」)、奈良期の肥後国の主官道は、熊本－植木－江田－南関－八女で、熊本－菊池－山鹿－南関は脇官道であった。

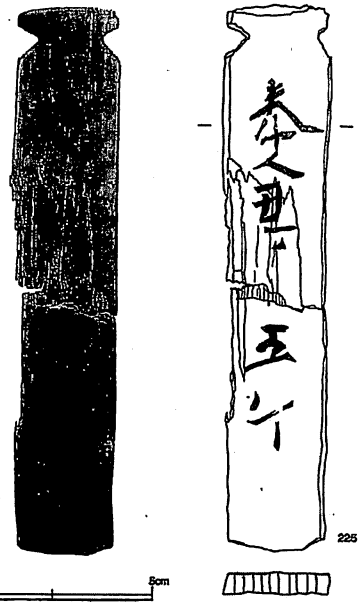
これらの諸説は、いずれも「大宰府」防備説を補強するものである。しかしながら、それらは「鞠智城」の築城当初の本来の目的ではなく、すでに存在した「鞠智城」に、後世の各時代に大和政権や律令政府の必要に応じて、政府機関としての機能を追加したものとも考えられる。

③鞠智城跡出土の木簡を通して

熊本県文化課の「鞠智城」遺跡の平成四（1992）年度の発掘調査で、韓国河南市の二聖（イーソン）山城に類似した「八角鼓楼」跡が2基（1基は建て替え分）発見された。また同九（1997）年の一月には「政庁跡」らしき遺構の発見、三月には古代山城では全国初の「木簡」の発見、そして七月には「素弁八葉蓮華文」の百済系軒丸瓦が出土した。これらは、「鞠智城」の解明を一層容易にした貴重な発見であると共に、日本の他の古代山城の研究にとって画期的な出来事であった。

「鞠智城」内の貯水池跡から発見された「木簡」について見ておきたい。この「木簡」は、長さ13.4cm・幅2.6cm・厚さ0.5cmで、墨書は「秦人忍□（米？）五斗」と読める。（次頁 図⑱参照）

「熊本日日新聞」（1997.3.31）には、この「木簡」に関する識者のコメントが記載された。①全国初の山城での発見、②政庁らしき建物跡や「木簡」を削る道具の刀子（とうす）などの出土から、大宰府と同じような行政機能を持つ城、③渡来人一族秦氏との関係、④「鞠智城」を含め古代山城は軍事施設との見方、そこに他所から搬送された米の荷札（付札）などがあった。また著名な研究者の見解として、⑤「鞠智城」統治範囲は、菊池平野一帯ではなく、「もっと広く、律令制度以前は南九州の国行政の拠点ではなかったか」（岡田茂弘氏）、⑥「秦人忍」（はたひとのおし）の帰化人は「四世紀後半に渡来後、京都など



〔1号木簡〕　第70図　第19次調査・28トレンチ出土遺物③（1号木簡）

⑱貯水池跡出土の「木簡」

関西を中心に勢力を広げていた秦氏の一族」との関係を示唆する、⑦「忍」の名から「当時大宰府付近にいたのでは」（小田富士雄氏）、また⑧「鞠智城の近くと考えるのが自然」（坪井清足氏）や⑨「城跡近くの松尾神社と秦氏がかかわりあるのでは」（県文化課）などの諸説（推測）が、やや興奮気味に飛び交っている。

さすが専門家の見解で、いずれ一理ある意見ばかりである。しかしこれらの意見を踏まえた上で、改めて「木簡」そのものの基本的定義に立ち帰り、そこから再び問題提起をしてみたい。

『国史大辞典』によれば、「木簡」の特徴として、「三・四世紀ごろの魏・晋時代の木簡には、紙木併用時代の木簡の特徴がよく示されていて、長さ・幅などの簡の法量が一定せず、表裏両面を使って、一簡で完結する程度の内容が書き込まれている。日本古代の木簡は、形状・内容ともにこの魏・晋代の木簡に類似したもの」であり、さらに日本古代の「木簡」は、「長さ二〇～三〇㌢ほどのものが多いが、特定の寸法を意識して作製したものではない。材は大部分が檜・杉で、加工しやすい樹種が選ばれている」と説明されている。

「木簡」の記載内容について、つぎのように分類される。

(1) 文書木簡　①官庁間で取り交わす往復文書など書式上何らかの形で授受関係が明らかな狭義の文書、②物品の出納などに伴う手控え的な記録などがあり、短冊形が多い。

(2) 付札　①調・庸などの荷物に「国郡里戸主姓名（税目・数量）　年月日」を記す貢進物付札、②物品の保管整理用の付札などで、短冊形の材の両端または一端近くに左右からの切込みをいれたものと、短冊形の材の一端をそのままに、他端を尖らせた形態のものがある。

(3) その他　①楽書・習書の類 (20)

前の「鞠智城」出土の「木簡」の「秦人忍□（米？）五斗」（裏に墨書なし）が、上記のどれに該当するかを検討してみた。「木簡」の形態からして、(2) ②の「物品の保管整理用の付札」に当たる。しかし平城京跡から出土した「（表）阿波国板野郡井隈戸主波多部足戸、（裏）秦人豊日白米五斗」（『平城京木簡概報』）の裏面部分の表記に酷似している。「表の国郡里戸主姓名」の部分がないので、(2) ①の「調・庸などの貢進物付札」には該当しない。

この「木簡」は、通説のように「秦人忍が□（米？）五斗を租米として、鞠智城に納入した」時の「付札」（荷札）〔(2) ①〕ではない。鞠智城が役人の秦人忍に給米として□（米？）五斗を支給した」時の「付札」（名札）〔(2) ②〕であって、支給額を示すものではないかと推測している。

この「木簡」（長さ 13.4cm・幅 2.6cm・厚さ 0.5cm）の大きさは、簡単に手中に隠せるくらいである。外部から租米として納入した米五斗（約 1.5 俵、90kg）の荷札にしては、余りにも小さすぎて不適当である。また頭しばりの一ヶ所しかないので、搬入時に取れて紛失しまう恐れもある。このようないくつかの条件をクリアできるとしたら、前述のように、「鞠智城」内で支給された官人給米用の付札と考えた方が妥当ではないだろうか。

④秦氏と「鞠智城」

武光誠氏は、その著『中国と日本の歴史地図』（ベスト新書　2003年）の中で、『魏志倭人伝』に記された古代習俗の「南方系の服装（袈裟衣・貫頭衣）から北方系の服装（男子埴輪の褌〔はかま〕）への転換」をあげ、大和朝廷は、南方系の文化を捨てて、こちらから出向いて、北方系（朝鮮半島の騎馬民族）の文化を取り入れたという独自の解釈を加えた見解を述べている。江上説のように、北方騎馬民族の南下および日本に渡来したのではないという。

また武光氏は、北方系の文化の窓口になったのが、5世紀頃の加耶地方からの渡来人（帰化人）で、6世紀末には、大和政権の支配層に取り込まれたといい、その代表が東漢氏（伝・後漢霊帝の曾孫、渡来技術集団を管理する「伴部」で、後に百済系の蘇我氏の配下となる）と秦氏（伝・秦の始皇帝の子孫、「はた」は古代朝鮮語で「海」の意、おそらく新羅からの渡来集団であろう）で、飛鳥時代には政治の動向を左右しうる勢力に成長し、このことが「日本の騎馬民族系の文化が重んじられる方向を決定づけた」との説を提示している。(21)

ここで、「木簡」の墨書「秦人忍米五斗」の「秦人」について考察しておきたい。

太田亮編著『姓氏家系大辞典』（角川書店　1981年）で、「秦」について「天下の大姓で、其の氏人の多き事、殆んど他に比なく、その分支の氏族も亦尠からず。各時代共、恒に相当の勢力を有する事も、他に類例なかるべし」、「其の分布が極めて広い。粗密の度こそあれ、既に中古の初めに於いて、北は奥州より西は九州に蔓って居た」(22) と記す。

平野邦雄氏は、『帰化人と古代国家』（前出）で、「秦氏は、その基盤として、全国に秦人・秦部・秦人部などの貢納民を有していた。その範囲は、東は美濃・伊勢・尾張・越前・越中、西は播磨・美作・備前・備中・讃岐・伊予・豊前・筑前に及んでいる。おそらく秦氏はその人口においても、古代豪族中、最大の規模をもっていたと思う」と述べ、「秦氏は土豪的・在地的である」と主張する。(23) 全国各地で土豪化した秦氏は、製鉄・製銅の技術を持っていた。

『日本史広辞典』（山川出版社）には、「秦氏」は「一般に古くから西日本一帯に移住し、機織や農耕に従事していた新羅系の人々が、欽明朝に王権に接近した山背の勢力を伴造として氏族的結合をとげたものとされている。以後多くの貢納によって王権を支えたので、一族は朝廷の倉の管理と関係が深い。推古朝に蜂岡寺（広隆寺）を建立した秦河勝がいる」と記す。

また前掲の『姓氏家系大辞典』には、「秦人」は「ハタビト、秦氏の族人にて、秦部と云ふと殆んど同じ、秦忌寸姓を賜ふ（秦忌寸と同祖）、弓月氏の後」、また「秦人部」は「秦人を以って組織したる品部」（技術者集団）、「秦部」は「秦人を以って組織したる部」（農耕民集団）(24)、また『日本史広辞典』は、「新羅から渡来し、西日本一帯に分布していた渡来人の総称。欽明元（540）年山背の秦氏の支配下に入り、戸数7053であったという。造籍の際、一般農民は秦部・秦人部などともされたらしい」と記す。

以上の資料から、「秦氏」は、全国の秦人・秦部・秦人部などの貢納民に基盤を持つ新羅系の帰化人で、山城を根拠に勢力を持ち、欽明天皇期に大和政権に接近し、経済的にも政権を支えた氏族で、「秦人」はその「秦氏」の配下に統合された「品部」「部民」であった。

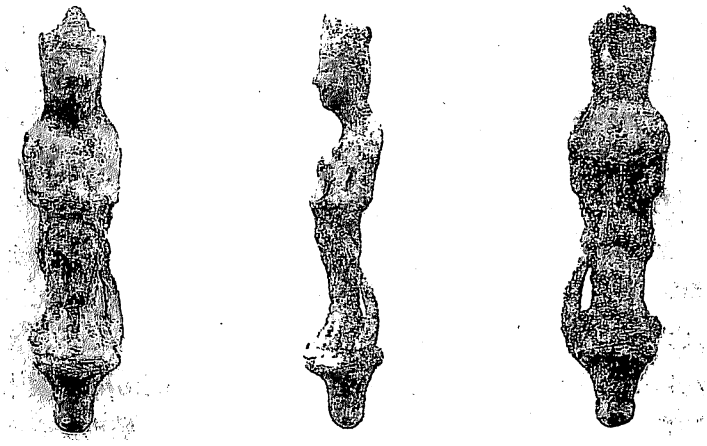
「木簡」の墨書の詳細な書風の比較研究から、その時期の確定は可能と思われるが、現時点では、前述した理由から、「秦人忍」なる人物は、地元の「秦部」（貢納民）というより、大和政権下の「秦人部」（品部）であり、おそらく大宰府に配属され、「鞠智城」に出向していた下級官吏と推定しておきたい。

⑤「百済立像」の出土

平成二十（2008）年十月二三日には「鞠智城」内の貯水池跡池尻部（池北端部）から「百済菩薩立像」（全長12.7cm、仏像部約9.7cm、幅3.0cm、三面頭飾・垂髪・天衣、臍前に持物、側面S曲、太目の臍）が発見された。7世紀中期（650～675年）の百済造仏で、「鞠智城」築造の時期と一致するなど、築城に関係した百済亡命貴族の「持仏」の可能性が高いと見られている。（2008年11月3日付の「熊

本日日新聞」)

既述したように、天智天皇は、665年に百済亡命官人の達率答本春初(とうほんしゅんそ)に「長門城」、達率憶礼福留(おくらいふくる)・四比福夫(しひふくぶ)に、「大野城」と「基肄城」を築造させた。筑波大学名誉教授井上辰雄氏は、これらの築城の担当者の官位が、百済の官位「佐平」につぐ第2位の高官「達率」であることに注目し、「百済の亡命貴族を責任者に任じ」たとし、その理由として「彼等が母国において、新羅や唐の猛攻に耐える堅固の城を築いていたという貴重な経験の持ち主」であったからと推測している。また671年正月の条に、天智天皇が、憶礼福留が兵法に優れるとして日本官職の「大山下(だいせんげ)」を授与したのは、「大野城」「基肄城」の築城の功績を高く評価したことによるとし、この二城の築城の延長として「鞠智城」が計画されたと述べている。



⑲「百済立像」

さらに井上氏は、この立像の宝珠を持つ姿から、法隆寺夢殿の救世観音像を想起して、「能く世間の苦を救う」(法華経)と誓願した観音(救世観音像)であったとすれば、「異国に亡命した百済のひとの持仏に最もふさわしい」と述べている。(2008.11.16「熊本日日新聞」)

しかし『日本史広辞典』によれば、「救世観音」は、「経典に定められたものではなく、信仰上うまれた尊像」で「聖徳太子の本地(本来の姿)ともいわれ、おもに太子関係の寺院に残る」と記す。県文化課の発表した「百済菩薩立像」と違ってしまう。一日も早く、この立像のクリーニング後の姿を見たいものである。

なお本論脱稿後、この「百済立像」の復元記事㉑を見た。巻末(P84)に掲載したので、参考にしてほしい。

2、現在の見解

熊本県文化財調査報告第249集『鞠智城跡(きくちじょうあと)』・総括報告書(熊本県教育委員会　2009年7月)には、「鞠智城」に関する現時点での県文化課の公式見解を掲載している。まず本論に関する部分の紹介をしたい。最後の「総括」では、現時点での疑問項目をあげ、かつ必要な解説がなされている。また各項目ごとに【考察】を設けたので、拙論との比較・検討をしてもらいたい。

①他の古代山城と異なり、極めて内陸部に入り込んでいる事

「鞠智城」は、大宰府から地図上の直線距離で62km、有明海に注ぐ菊池川の河口から30kmにあり、この関係から「有事の際に築造された古代山城では無く、別目的の城塞ではないか」の説があった。唐・新羅の連合軍に対して、内陸部に位置し、緊急時の対応が出来ないという考えであった。

また隼人説が浮上したが、最近では「大和朝廷に対する隼人の反乱は8世紀初頭まで下ることと、鞠智城が肥後の国府より30kmも後背地にある」ので関係ないことになった。

これに対して、小田富士雄氏は、「唐・新羅の船団の分隊が有明海に回り込むことを想定」、「陸部からの攻撃拠点として、鞠智城が城塞としての重みが出てくる」し、「国防の最南端基地という推論が成り立つ」という。今日では「鞠智城を考える上での大原則」になっている。

この視点から、内陸部に位置する疑問は、「有事の際に、比較的、安全な場所から大宰府の後方支援として兵站基地の役目を担ったと考えれば、矛盾がない」との見方に決着。さらに城内の備蓄米は、肥沃な菊池平野を生産基盤としたものと推察されるという。(25)

【考察】

この件に関しては、本論の首で述べた「鞠智城」の位置への素朴な疑問を再度読んでもらいたい。

遠方にある「鞠智城」の築城場所を、あくまでも大宰府の後方兵站・兵糧基地と関連付けて見ようとしている。その前提のもとで、小田氏の「唐・新羅の船団の分隊が有明海に回り込むことを想定」説を援用して「矛盾」が解消できたという。

また菊池平野を「備蓄米の生産基盤」としているが、「鞠智城」の築城当時の7世紀中葉の菊池平野は、4世紀中に枯渇した「茂賀の浦」の湖底部分にあたり、まだかなりの湖沼が点在していただろう。果して現在の菊池平野の状況から類推して、肥沃な「生産基盤」であったと推察してよいものだろうか。むしろ百済難民たちの技術力によって灌漑事業が進み、かつ耕地化していったと考えられる。

②築城時期に関する記載記事が無い事

「鞠智城」に関しては、『続日本紀』の文武二（698）年の記事に、「大宰府をして大野・基肆・鞠智の三城を繕治せしむ」とあるのみで、大野・基肆の二城のように、肝心の築城記事がない。

国書には11城の朝鮮式古代山城の記載はあるが、他にも16城の神籠石系山城が、いわば「文献未記載の城塞」であり、その数は「朝鮮式山城を凌ぐ」。出宮徳尚氏の「国の直轄事業だけではなく、地方の豪族が担当した分があったのではないか」との意見である。また近年の発掘調査で、朝鮮式古代山城と神籠石系山城はほぼ同時期の築城とされている。

「鞠智城」の築城は、建物跡などからの出土品の分析の結果、7世紀半ば以前の築城は考えられない。長者原地区では、建築遺構が6世紀後半の竪穴式住居址を切っているので、「鞠智城」の築城以前にこの土地に小集落が存在していたことになる。考古学的な所見から、大野城・基肆城と同時期の（665年）の築城である。(26)

【考察】

国書に「鞠智城」の築城年の記載がない理由として、出宮徳尚氏の「国の直轄事業だけではなく、地方の豪族が担当した分があったのではないか」との見解は、拙論からしても正しいと思う。

米原台地には、「鞠智城」の築城以前の6世紀後半にすでに集落が存在していた。また台（うてな）台地では、弥生期から大集落が営まれていた。その場所よりすぐ北の米原台地にも、当然集落があっても不思議ではない。

しかも菊池平野部に直接面した台（うてな）台地と違って、一谷奥まった米原台地は、緊急事態に対応できる地形であった。その利便性や重要性は、当時の菊池川流域の在地豪族たち、特に菊池在地の豪族には十分わかっていたことであろう。

そこに、大和朝廷の百済援軍にもかかわらず、663年の「白村江の戦い」では唐・新羅連合軍に敗れ、多くの百済難民の亡命が日本列島に集中したのである。このような状態であれば、おそらく当時の国書に記載されることの方が稀であったと思われる。

すでに詳述したように、5世紀後半～6世紀前半には、玉名・江田地方には、百済王族系の渡来人が定住・帰化していた。その象徴的な墳丘が、江田船山古墳の築造であった。言ってみれば、この地は、百済王族系の渡来・帰化人が設けた「百済侯国」であった可能性がある。また山鹿地域や菊池地域の在地豪族を含め、菊池川流域の在地豪族たちを支配したのは「火の中君」であった。その「火の中君」も、百済王族系の渡来・帰化人の後裔であったと思われる。

「白村江の敗戦」後、多くの百済難民たちは、おそらく迷わず、百済ゆかりの菊池川流域の在地豪族たちを頼って亡命してきたとしても不思議ではない。唐・新羅連合軍の追撃を恐れる状況で、大量の亡命者の受け入れ可能な安全な場所をどこに確保すればよいのか。在地豪族たちが百済同胞たちのために準備したのが米原台地であった。そしてこの地に、亡命貴族や官人たちの技術で以って、古代朝鮮（百済）式山城の「鞠智城」を築城した。言わば「鞠智城」は、築城当初から、亡命した百済難民施設的な要素

を有した山城であったというのが拙論の趣旨である。

そうであれば、大宰府防備の目的で築城された大野城･基肄城と同時期の（665 年）の築城であっても、その目的はかなり違ってくる。これまでの通説のように大宰府後備の兵站・兵糧基地は成り立たない。また多くの考古学者や古代史研究者が疑問を感じながら、明らかにし得なかった大宰府との距離や内陸部の謎は一挙に氷解してしまうことになる。

③他の古代山城と異なる立地条件

「鞠智城」は、標高 150m クラスの丘陵地に、「内托法」「夾築法」など古代山城特有の版築工法による土塁をめぐらし、さらに石塁・通水溝・貯水池の遺構を持つ城塞である。金田城・大野城・基肄城などは、標高 275 ～ 414m クラスの高山域に遺構が残っているなど、その標高に相違がある。(27)

【考察】

ここで注目することは、「鞠智城」の 150m の標高である。他の古代山城の半分以下の標高であり、極端に低い。この低い標高は何を意味するのか。防衛を主としたものか、それとも生活優先か。前者であれば、古代朝鮮式山城本来の「駆け込み城」的で、安全第一の要素として、高い標高が求められる。しかし「鞠智城」に関する限り、標高 150m クラスの丘陵地であった。この選定そのものが、防衛的要素を持ちながらも、日常生活の利便性を優先的に考慮した結果ではないのか。

④鞠智城と管理棟的建物の関係について

この「鞠智城」内域には、大型掘立柱建物跡群や倉庫群、それに管理棟的な建物群があり、この周辺から円面硯・墨書土器・小刀などが出土。また貯水池跡から木簡や 7 世紀後半の須恵器の平瓶も出土している。(28)

⑤建物の建て替えについて

「鞠智城」では、最大で 4 回の建て替えがあっている。第Ⅰ期は 7 世紀後半の創建期～繕治期（665 ～ 698 年）は東アジアの争乱期に当る。大型掘立柱建物が主流で、繕治期も建て替えではなく補修のみ。第Ⅱ・Ⅲ期は奈良時代で、国際情勢の緊張はなく、建て替えに小型建物の出現。第Ⅳ期は 9 世紀の平安時代（下限は 879 年）で、「鞠智城」の終末期になるが、この時期には大型礎石建物が構築される。浜田耕作氏は、新羅の盛んな海賊行為に関係するという。(29)

【考察】

百済式山城施設の変遷とその時期区分について、第Ⅰ期「百済難民施設」、第Ⅱ期「軍団施設」、第Ⅲ期「軍団衰退と私兵化」と考えている。「総括」の上記の内容について、つぎのように理解している。

第Ⅰ期「百済難民施設」（上記の第Ⅰ期。以下同じ）では、「鞠智城」で最初の建造物は、大型掘立柱建物が主流であった。多くの百済からの亡命者たちを収容し、かつ保護・管理するために必要な建造物ではなかったのか。繕治期にも建て替えられず、ただ補修のみで、約 33 年間、即ち 1 世代から 2 世代にかけて放置されていたとすれば、厳しい亡命生活であったと推測される。

おそらく八角形建物跡は、この時期の建立で、亡命避難民の心の拠り所とした道教思想を根底にした天壇（南側）・地壇（北側）ではなかったか。(⑧鞠智城の整備参照)

その後、奈良時代には小型建物の出現、平安時代には大型礎石建物が出現するが、その理由については、今後の研究が必要である。ただ言えることは、「鞠智城」の役割そのものが大きく変化したためと考えられる。それは何故なのか。

第Ⅱ期「軍団施設」（第Ⅱ・Ⅲ期）では、奈良時代なると、律令制の軍制により、肥後国に 4 軍団が設置された。その規模は 1000 人単位であった。現在のところ「益城軍団」の存在は明らかであるが、後の 3 軍団の配置とその場所は不明である。

肥後国内の唯一の古代朝鮮式山城の遺構を持つ「鞠智城」は、その始まりが、拙論のごとく百済難民施設的なものであったにしろ、その後は難民施設としての機能を終えてしまった。この「鞠智城」跡は、肥後国北部における軍団設置の好条件の場所として、「菊池軍団」が設けられたのではないか。それが大型礎石建物の出現と関係がないだろうか。

第Ⅲ期「軍団衰退と私兵化」（第Ⅳ期）では、平安中期には、地方豪族の「菊池氏」が登場する。その理由として「菊池軍団」の衰退とその私兵化にあったと推論し、すでに別稿を草している。

⑥貯水池について

貯水池は、城塞の水源確保に不可欠なものであるが、その遺構から、取水口・石敷遺構・貯木場跡・水汲み場跡（木組遺構）・堤防状遺構・柱穴列を検出、また出土遺物は７世紀後半～９世紀後半の時期幅があり、築城から廃城まで活用されたようである。(30)

⑦百済系菩薩立像の出土について

貯水池跡の池尻箇所から小型仏像が、池跡の最下層から出土した。大西修也氏によれば、７世紀後半の百済系菩薩立像という。百済からの渡来人が、「鞠智城」に持ち込んだ念持仏の可能性が非常に高い。『日本書紀』の天智４（665）年の「大野城や基肄城は、百済から亡命した達率の技術指導によって構築された」記事内容と一致する。(31)

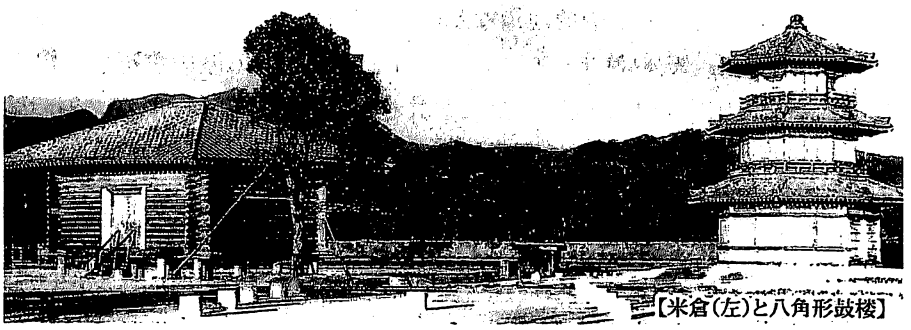
【考察】

貯水池は、築城当初即ち７世紀後半から終末期の９世紀後半まで利用されている。「鞠智城」内では、日常的に生活が営まれていた証となる。その池尻から７世紀後半の百済系菩薩立像が出土した。663年の「白村江の戦い」後に、菊池川流域にたどり着いた亡命貴族か官人の念持仏と推定される。そうすると、前述した「鞠智城」の標高からしても、拙論のごとく、築城当初は百済難民施設的な建物群であった可能性が濃厚になってくる。

⑧鞠智城の整備

「鞠智城」の八角形建物跡は、南北２箇所あり、最初北側は八角形の堂、南側は八角形の楼と推定したが、「鞠智城保存整備検討委員会」として、中国や朝鮮半島にルーツを持つ「鼓楼」と推論し、また『日本文徳天皇実録』に兵庫の鼓の記述からの推定もあって「八角形鼓楼」と結論づけている。(32)

しかし発見当初は、道教思想を根底に、南側が天壇、北側が地壇との考え方もあった。同時期、韓国京畿道河南市の「二聖山城」跡から八角形建物・九角形建物跡・十二角形建物跡が検出され、天壇・地壇説から望楼説にかわった。(33)


【米倉（左）と八角形鼓楼】

⑳「八角形鼓楼」（右）

【考察】

「鞠智城」の八角形建物は、果たして「鼓楼」でよいのだろうか。「二聖山城」は、百済最初の都城跡で、その城内に八角形建物がある。これが「鼓楼」にした基準という。

拙論のごとく百済難民施設とすれば、百済全盛時代の漢城の「二聖山城」を懐かしがる亡命百済王族

や貴族・官人および人民たちの居住山城としての「鞠智城」には、「鼓楼」よりもむしろ道教思想を根底にした天壇（南側）・地壇（北側）の方よいのではないだろうか。

2008年11月8日の「鞠智城めぐる日韓シンポジウム」で、韓国国立中央博物館長チェク・グァンシク氏は、講演「古代韓日の文化交流－高句麗・新羅・百済の交流について」の中で、鞠智城の八角形建物跡の構造の類似性などから、「当時、日本は中国よりも古代朝鮮国家からより強い影響を受けた」と説明、さらに八角形建物は朝鮮半島の例と同じく祭祀関係の建物であった可能性が高いと、天壇・地壇説を主張した。(2008年11月9日付「熊本日日新聞」) チェク氏の説に賛意を表したい。

第三部　地名「鞠智」と「菊池」の解明

一、「鞠智城」の読み

報告書の「総括」は以上であるが、最初の「第5節　国書に見る大和朝廷と鞠智城の動向」で、「鞠智城」の読みについて記す。その大意は、つぎのようであった。

文武二年の城名は「鞠智」で、この時期、菊池の地は、『倭名類聚抄』によると、「久々知」と表記、「鞠智」は「くくち」の発音である。従って、創建期の正式城名は「くくち城」である。この「繕治」の記事から161年後に、「鞠智城」が再び国書に登場する。この時期、城名は「鞠智」から「菊池城院」「菊池城」の表記に変化した。今の「きくち」の呼称は、この時期からの変化である。「くくち」は、現在使われていないので、県では実態に即して「鞠智城」を「きくちじょう」と呼称した。(1)

「菊池」の地名は、延久三（1070）年に藤原則隆が下向し、生活の拠点とした深川の湧水池「菊之池」を短縮した「菊（之）池」＝「菊池」とする説が、今でも一般的に信じられている。江戸期の和漢学者渋江松石は、その著『菊池風土記』で、すでに「付会伝承」の俗説と断言している。

「菊池」の起源をたどっていくと、「菊之池」ではなく、「鞠智」（くくち）に到達する。その当時の「鞠智」は、決して「きくち」と読まなかった。また前の報告書の見解とは違って、ほんの少し前まで、地元では「くくち」と読んでいた。菊池地方の古老に聞いてもらえば、すぐにわかることである。

ところが、最近熊本県や菊池市などの公的機関では、「鞠智城」にわざわざ「きくちじょう」とルビまでふって読ませている。これはまったくの誤読である。過去の歴史を正しく知らないことから生じた結果である。少なくとも「国営歴史公園」に指定される前には、このネーミングの問題は、正しく決着をつけてほしい。

この報告書の「鞠智城」の読みの変遷は、余りにも短絡的である。何故に「鞠智」（くくち）読みにこだわるのか。以下、その論拠を示したい。

二、地名「鞠智」と「菊池」からの古代史解明

地名「鞠智」は、「きくち」ではなく、何故「くくち」としか読めないのか。その理由を日・韓・中三国の古代言語の比較によって解明を試みた。また「鞠智」から「菊池」への改字はなぜ行われたのか。

その変遷を明らかすることが、そのまま菊池地方の古代史の解明の一助になる。

1、「鞠智」から「菊池」へ改字

いまの菊池地方の地名は、最初「くくち」があった。後述するように、「くくち」が和名か韓名かについては、議論が別れるであろう。またどんな漢字が当てられていたかも不詳である。

しかし天智二（663）年八月の「白村江の敗北」から約35年後の文武二（698）年の『続日本紀』には、「大宰府をして大野・基肆・鞠智の三城を繕治せしむ」の記事がある。「鞠智城」の初見である。「くくち」に「鞠智」の文字を当てて表記されていた。

奈良時代の和銅六（713）年、元明天皇は、『風土記』の編纂時に、従来の地名を瑞祥漢字に改字せよとの詔を出し、「鞠智」は「菊池」に改字された。その後の天安二（858）年閏二月二十四・二十五日には「菊池城院兵庫の鼓自ら鳴る。丁巳、又鳴る」、夏六月二十日には「肥後国菊池城院兵庫の鼓自ら鳴り、菊池城の不動倉十一宇火あり」（以上『文徳実録』）、さらに貞観十七（875）年夏六月二十日には「群鳥数百、菊池郡倉舎の葺草を噬（か）み抜く」、元慶三（879）年三月十六日には「肥後国菊池郡城院兵庫の戸鼓自ら鳴る」（以上『三代実録』）の文献に出てくる。また東大寺大仏殿回廊西脇出土の「木簡」の「肥後国菊地（まま）郡」の墨書（天平一九～天平勝宝三〔747～751〕年と推定）からも実証される。

前の報告書では、この段階で、「鞠智」から「菊池」に改字され、その読みも「くくち」から「きくち」になったとするが、この結論に驚いている。

その論拠を示す前に、この「鞠智」の「鞠」から「菊池」の「菊」への漢字の改字は、古代人の単なる思いつきではなく、つぎのようなルールに基づいていたと思われる。角川書店の『字源』によれば、「鞠」は「かはらよもぎ、菊に通ず」、また「菊」は「古、鞠に作る」とあって、「鞠」と「菊」は、同字源の漢字であった。「鞠智」から「菊池」への改字の一つからも、古代人の優れた知恵が感じられる。

2、「鞠智」も「菊池」も“久々知（くくち）”

以上のように、漢字表記は、「鞠智」から「菊池」へ変った。平安時代の承平年間（931～7）、源順編纂の『倭名類従鈔』の中では、「菊池」は「久々知」と訓じていた。即ち漢字表記が「鞠智」から「菊池」へ変わっても、その発音と読みは「くくち」のままであった。前掲の報告書では、「鞠智」から「菊池」に変わったことのみ強調し、肝心の「くくち」読みの存続を見落としている。

以前、菊池市国際交流課の金相廷（キム・サンジョン）氏から、「鞠智」のハングル発音は“kukchi”（ククチ）で、パッチムのない日本語では「久々知」（くくち）と発音・表記したのではないかと、示唆のある意見を聞いた。これに大きなヒントを得て、つぎのように考察してみた。

まず日本語の「くくち」地名があって、それをそのまま古朝鮮語（古韓語）で“kukchi”または“kukji”（ククジ）と発音、その発音を忠実に漢字表記したのが「鞠智」ではなかったのか。さらに韓国語辞典で「菊」・「池」の発音を合成すると、その発音は「鞠智」と同じ“kuktʃi”（ククジまたはグクジ）であった。

このように、発音からしても、奈良時代人の「鞠智」から瑞祥文字の「菊池」への改字は、でたらめではなく、ちゃんとしたルールに依拠していた。「鞠智」からの漢字「菊池」へ変わっても、その発音は「くくち」でなければならなかったのである。『倭名類従鈔』の「菊池郡」の訓読が「久々知」であることが、何よりの証拠である。

3、「鞠智」（くくち）地名の起源と意味

それでは「くくち」の意味は何であろうか。地名は本来ほとんど自然地形に依拠して命名されている。中原英氏は、「水がピチャピチャした湿地帯」また「茂賀の浦の水が引いた後の湿地帯」の意を語源とする。またAD3世紀後半に、『魏志倭人伝』に登場する「邪馬台国」の「卑弥呼」と対峙した「狗奴（くな）国」の役人「狗古智卑狗（くこちひこ）」説もある。いまのところ、「くくち」の語源を解明した地名研究者は

いない。

「くくち」のさらなる語源は「くこち」であった。『魏志倭人伝』で、「ひみこ」に「卑弥呼」同様、「くこち」に「狗古智」の漢字の借音を当てて表記している。ただ同じ表音漢字でも、「呉音」で読むと、「くこち」でなく「くくち」となる。即ち「くくち」は「呉音」読みであり、後述するように、その「呉音」の大きな影響を受けたのが「百済音」(「百済語」) であった。そうすると、「くくち」は「百済音」(「百済語」) であった可能性も出てくる。

その「くこち」(「くくち」) は、「く・こ・ち」(「く・く・ち」) または「くこ・ち」(「くく・ち」) の語幹に分けられる。前掲の『地名用語語源辞典』によれば、「く・こ・ち」の「く」は「クユ」(崩・潰) の語幹で崩壊地、「こ」は「湖」(みずうみ) を示す地理地名用語で、特に「湖」は「水＋胡 (巨に通じ、大きなの意) で、大きな水」、また「ち」は場所を示す接尾語で、みち (道)・つち (土)・ふち (縁) などの和語の「ち」とされる。前述した「茂賀の浦」と無関係ではないようである。

また「くこ・ち」の「くこ」は「くご」の変で、「クボ」(窪) の意である。呉音では「くく」となる。この「くく」は、①「一般に周囲より低く窪んだ所・谷間」、②「山中の小平坦地」、③「山間の湿地」、④「何かに包まれたような地形」、⑤「山間小盆地・谷奥」などの意味がある。こちらも「茂賀の浦」の枯渇した自然地形をさしているといえるかもしれない。(2)

以上のことから、「くこち」→「くくち」は、カ行の変化 (通音) であり、本来の地名の意味は、そのまま変わりなく受け継がれていることになる。また「くくち」→「きくち」の場合も同様で、カ行の通音である。

その「きく」の意味は、「ククムの語幹で、何かに包みこまれたような地形」で、「くく」の意味とまったく変わっていない。即ち地名の読み方が多少変わっても、通音の範囲であれば、その地名の意味は、ほとんど変わらないのである。

かつて縄文湖・弥生湖の「茂賀の浦」が存在し、枯渇後の菊鹿盆地の自然地形「くこち」を、「呉音」の流れを汲む「百済音」(「百済語」) では、「くくち」と発音していた。この地域一帯は「狗奴国」に属し、その役人で、この地の支配者を、「呉音」で「狗古智卑狗 (くくちひく〔こ〕)」(ひく〔こ〕は男性の美称) と称したのではないか。

『魏志倭人伝』の著者陳寿 (AD223 ～ 265) は、AD3 世紀後半の倭国の様子を記録する上で、「邪馬台国」の女王「卑弥呼」に対峙していた「狗奴国」の存在とその地域を明らかにするために、男王卑弥弓呼 (ひみくこ) と共に、有力役人として「狗古智卑狗 (くくちひく〔こ〕」の名を、意識的に記載したのかもしれない。

4、「鞠智」地名は和名か、韓名か

天智二 (663) 年八月の「白村江の敗北」直後の 665 年に築城された当時、すでに「大野城」「基肄城」「鞠智城」と漢字表記がなされていた。和音と韓音のどちらで発音されていたかはわからない。

金相廷氏によれば、三国時代の百済と新羅の国境付近に「大野 (テヤ) 城」があった。百済亡命の高官たちは、自ら築城した山城に、母国の山城名をとって「大野城」と命名したという。

また韓国では、漢字が入ってくる以前に、古韓語の地名があった。例えば「ハンバツ」は、「大きな田んぼ」という地名で、その漢字表記が「大田」(テジョン) であった。また「タルグボル」は、「広い岡」の意で「大邱」(テグ)、「ソラボル」が「慶州」(キョンジュ) というように、もともとあった古韓語の地名の意味と漢字の意味を合わせるように漢字表記をしたという。漢字の「借意」的表記である。

285 年に百済の王仁によって漢字 (論語・千字文) が、538 年 (553 年説あり) に百済の聖明王によって仏教が公伝、その時以来、大宰府は漢字と仏教文化の一つの中心地であった。おそらく大宰府に近い「おおの」は、その頃から「大野」と漢字で表記されていたものと思われる。

あるいは、金氏の話のように、もともと自然地形の和名「おおの」地名ではなく、築城当時は「大野 (テヤ)

城」と発音していたのが、いつの間にか「おおの」と和名で読まれ始めたとも考えられる。あるいはまた、和名「大野（おおの）」の漢字が、亡命百済の高官たちの母国への望郷心にマッチしたのかもしれない。

このように、大宰府近くの「おおの」は、早くから日本風に「大野」の漢字表記をしていたと思われるが、しかし「基肄（きい）城」（「椽（き）城」の改字、韓音では“kii”〔キイ〕または“ki”）は、665年に古代朝鮮式山城が築城されるまでは、あまりあるいはまったく重要視されなかった地域であったと思われる。鄙びた「きやま」付近に「きい（き）じょう」が築城されるに至って、百済亡命官人たちによって、「基山」の「基肄城」という漢字「借音」による表記がなされたとも考えられる。

また「鞠智城」（“kukchi”、“kukji”〔ククジ〕）は、もっと僻遠の鄙地の「くくち」地方に築城された。その理由について、第二部で、菊池川流域の百済王族系の「担魯」即ち「分国」（「侯国」）と関係があり、「白村江」の敗北後、多くの亡命百済難民が、藁をも掴む思いで頼ってきた時の難民施設（併設または併置を含む）論を提示しておいた。

おそらく天智天皇は、すでに進行または設置されていた亡命百済難民施設を利用して、より堅固な「鞠智城」の築城計画を、その上に乗せ、古代朝鮮式山城の築城技術を有した百済亡命官人たちを派遣したのではないか。

この亡命百済難民施設を併用した古代朝鮮（百済）式山城の築城により、大和政権でも、この地に亡命・収容された百済人たちの掌握が必要となり、漢字の「借音」による「百済音」表記の「鞠智城」の命名がなされ、日韓共通の地名になったと思われる。

言うまでもなく、「基肄」（基山）や「鞠智」についても、今後十分な検討が必要である。しかしこれらの拙い見解からでも、当時の日本と百済国の関係の親密さを十分髣髴することができる。

5、「鞠智」（くくち）は「百済音」読み

鎌田正・米山寅太郎編著『漢語林』の付録「漢字について」によれば、古代中国の魏・呉・蜀三国時代の文化の中心は、揚子江下流の呉地方であったことから、AD3世紀～6世紀までは、呉の発音（「呉音」）が共通語として使用されていた。百済では、漢字は「呉音」で発音されていた。その「呉音」は、古代日本では「朝鮮の百済を経由したために『百済音』とも呼ばれ」ていた。(3)

既述したように、日本は文化先進国の百済国と最も親密な交流関係にあったので、当時の日本では、「呉音」即ち「百済音」が両国の共通語であったと思われる。このことに関して、金容雲は、前掲の著『日本語の正体－倭の大王は百済語で話す』の中で、「百済王家と倭王家の言葉は共通していた」と強調している。(4)

また岡田英弘氏はその著『日本史の誕生』の中で、「七世紀の共通語は中国語百済方言」の項目を設け、「七世紀までの日本列島で、共通語の役割をはたしたのは、南朝の中国文化の影響が強い百済方言だっただろう。百済語も他の華僑の話す口語よりも、漢字で綴った文語に近い言語だったからである」と記している。(5)

「呉音」が、韓半島特に百済国に入って、「百済音」（「百済語」）となったことは確実である。しかしその「百済音」（「百済語」）には、本来今日のハングルのパッチムに当たる発音があったのであろうか。

金思燁著『古代朝鮮語と日本語』（講談社　1974年）によると、終声子音については、「無声子音を終声とする古語の音節は、ほとんど開音節型であった」とし、「中世語に見られる複合子音は、古代語には存在しなかった」と推定している。結論としては、パッチムはなかったとする。(6)

そこで、つぎのような推論を試みた。中国では、「呉音」の後、AD7世紀～9世紀には「漢音」（隋・唐の都長安付近の発音）が使用された。「漢音」の特徴は、「四声」（「平声」・「上声」・「去声」・「入声」〔にっしょう〕）であった。特に「入声」（にっしょう）は、現代中国語にない－p.－t.－kの音で終わる、短くつまった発音であった。「日本の漢字音（旧仮名づかい）で、フ・ツ・ク・チ・キのつく音」として、古語に残った。(7)

前の金思燁説からすれば、ハングルの終声子音（パッチム）には、漢音の「入声」の－p.－t.－kの

音の影響があるのではないか。「百済音」（「百済語」）は、隋・唐時代の先進的な文化の影響のもとで、当然共通語としての漢音の「四声」、特に「入声」の影響を強く受けたのではないか。その「入声」が、ちょうど日本の「漢字音」（「旧仮名づかい」）同様、今日のハングルの終声子音（パッチム）の母体になったと思われる。

即ち「くくち」に「百済音」（「百済語」）通り「鞠智」の借音漢字をあて、"kukchi"（ククチ）と発音した。現在でも「鞠智」をハングルで"kukchi"（ククチ）とパッチムで読むのは、この「入声」の影響ではないか。

再度別の角度から、「鞠智」の考察をしておきたい。当時百済国では、呉音の影響が強い「百済音」を使用していたので、「鞠」は、呉音では「コク」〔オク韻〕・「ギク」（因みに、漢音では「キク」〔イク韻〕）と発音していた。その「鞠」の呉音「コク・ギク」が、「入声」の影響を受けた「百済音」では「クク」（"kuk"）と発音するようになっていた。その背景があって、地名「くくち」の発音に、そのまま「鞠智」の漢字を当てたものと思われる。当時の亡命の百済官人たちが考え出した和名地名の漢字表記かもしれない。

以上の拙論は、あくまでも仮説であり、日韓両国の言語学者による実証が不可欠である。

6、「菊池」（きくち）は「漢音」

「鞠智」は、中国語では現在"juzhi（ジュージィー）"、ハングルは"kukchi"（ククチ）と発音する。また「菊池」も、中国語は"juzhi"、ハングルは"kukchi"と同じである。

『漢語林』によれば、「菊池」の「菊」は、漢音で「キク」と読み、これ以外の読み方はない。付録「漢字について」で、この「菊」は「当時日本でその物がなかったり、ひきあてる適当なことばのなかったものは、漢字の音がそのまま日本語として用いられ、従って訓のないもの」の代表的な漢字の一つとなっている。(8) 即ち「きく」は日本語の「訓」ではなく、中国語の「音」（漢音）であった。「菊」は元来日本にはなかった植物で、中国からの帰化植物であった。

「菊」は中国に自生するチョウセンノギク（中国北部・朝鮮半島に分布、白色系）とシマカンギク（中国南部に分布、黄色系）との交雑種で、唐代（782～806）かそれ以前に、両種の自生していた華中（中国中部）で生成したといわれている。日本には、奈良時代に渡来したという説が有力である。丹羽鼎三氏は、歴史的研究により、その時期は、延暦十六（797）年の平安初期、唐で「菊」が作られた直後に伝来したと推定している。(9)

少々横道にそれてしまうが、「菊」の渡来時期について、丹羽説では、前述した奈良時代の和銅六（713）年、元明天皇の『風土記』の編纂時に、「鞠智」から「菊池」に改字された云々とは、約85年のタイムラグが生じる。また東大寺大仏殿回廊西脇出土の「木簡」の「肥後国菊地（まま）郡」の墨書（天平一九～天平勝宝三〔747～751〕年と推定）とは50年もある。そうすると、「菊」の奈良時代渡来説の方が正しいのではないだろうか。

ついでに、「菊」に関するその後の歴史を見ておきたい。平安時代には、色々な草木を御殿の前庭や壺に植え込み、集めた草木類の優劣を判じ、歌の題を出し合って風流を競う「前栽合」（せんざいあわせ）という遊戯が流行していた。「前栽合」は、『日本紀略』に醍醐天皇の延喜元（901）年八月二十五日の記事の中にあるが、すでに宇多天皇の寛平年間（889～898）年には「前栽合」として「菊合」が行われていた。(10)

承平年間（931～937）に編まれた源順（みなもとのしたごう）の『倭名類聚鈔』によれば、「菊」の和名は「加波良與毛木」（カハラヨモキ）または「可波良於波岐」（カハラオハキ）で、花は白色・紫色・黄色があった。

漢音では「キク」の意があった「鞠」は、やがて「萬利（まり）」即ち「毬」の意のみとなり、平安中期にはすでに「菊」に通じる意味はなくなっていた。「鞠」から「菊」への変化の背景には、このような歴史と漢字の意味の変遷があったのである。

7、「菊池」（きくち）読みのはじまり

それでは、「菊池」を「きくち」と発音また読むようになったのはいつ頃からであろうか。桓武天皇（在位 781 ～ 806）が、延暦十二（793）年四月に、年度分者の「漢音」を習得していない者の得度を禁じた勅とは関係しているのではないか。即ち漢字をすべて「漢音」で発音するように命じた平安初期ではなかったかと推測している。

つぎの表は、これまで述べてきた「鞠智」（くくち）や「菊池」（きくち）の変遷をまとめたものである。

年代	漢字表記と読み	音韻	摘　要
	くこち（地名）	不明	「茂賀の浦」の湖沼（跡）の意か
AD3C 後半	狗古智卑狗（くくちひく）	呉音	『魏志倭人伝』の「狗奴国」官人名
7C 後半 (698)	「鞠智城」（くくち）	百済音	天智二 (663) 年八月の「白村江の敗北」後、『続日本紀』文武二（698）年の記事
8C 初頭 (713)	「菊池」（くくち）に改字	百済音	和銅六（713）年『風土記』編纂期に元明天皇の詔
8C 中 (747 ～ 751)	「菊池郡」（くくちのこおり）	百済音	東大寺大仏殿回廊西脇隣接地出土の「木簡」に「肥後国菊地（まま）郡□（子）養郷人」
8C 後半 (792)	「菊」の漢音は（きく）のみ	漢音・百済音の併用	延暦十一（792）年桓武天皇の「漢音」使用の詔。明経の徒に呉音を禁じ、漢音習熟を命じ、翌年仏徒にも漢音を習熟をさす
9C 中・後半 (858) (875) (879)	「菊池城院」（くくちじょういん、きくちじょういん。前者の読みが正しいと思われる）	漢音・百済音の併用	天安二（858）年閏二月「菊池城院兵庫の鼓自ら鳴る。丁巳、又鳴る」、夏六月「肥後国菊池城院兵庫の鼓自ら鳴り、菊池城の不動倉十一宇火あり」（『文徳実録』） 貞観十七（875）年夏六月「群鳥数百、菊池郡倉舎の葺草を噬（か）み抜く」、元慶三（879）年三月「肥後国菊池郡城院兵庫の戸鼓自ら鳴る」（『三代実録』）
10C 前半 (931 ～ 7)	「菊池郡」（久々知と訓ず）平安前期、「鞠」は（きく）読みで、「まり」（毬）の意。「菊」は（きく）の読みで、植物。和名は「かはらよもき」「かはらおはき」	漢音・百済音の併用	源順編纂の『倭名類聚鈔』では、「菊池郡」は「久々知」と訓ず。漢字表記が「鞠智」から「菊池」へ変わっても読みは「百済音」（くくち）のまま
11C 後半 (1070)	「菊池」（きくち）	漢音	初代菊池則隆の下向説、「菊の池」の短縮形（付会伝説）
12C 以降	「菊池」（きくち）	漢音	以後「菊池氏」「菊池郡」の使用

この表からわかるように、「鞠智」は、8 世紀初頭の奈良時代に「菊池」に改字され、8 世紀後半の平安初期には、桓武天皇により「漢音」が奨励された。しかし 10 世紀前半の平安中期まで、「菊池」は少なくとも 150 年間ずっと「くくち」と読まれ続けた。地名の読みが、容易に変わり難いことの証拠である。

その「菊池」が「きくち」と読まれ始めたのは、いつ頃からだったのか。11 世紀後半に初代藤原則隆が、深川の「菊之池」付近に下向・居住した説は、これまで見たように、また江戸期に渋江松石も指摘するように、学問的には根拠のない「付会伝説」の類であった。

しかし、ここで問題にしたいのは「菊池」が「菊之池」の短縮形と信じられてきた事実である。この背景には、「菊池」が「呉音」の流れを引く「百済音」で「くくち」と読まれていたことが、すでに忘れ去

られてしまっていたからである。

その一方で、「菊池」の「漢音」読みの「きくち」が一般化し、また「菊池」が「きくち」と読まれても、何の違和感もないばかりか、前述した「菊池」の起源を「菊之池」の短縮として付会し、「菊池」を姓や郡名に使用されても、当然のこととして信じられた状況が生じていた。

その時期として、藤原則隆下向説とは関係なく、いままで11世紀後半が一番妥当ではないかと考えていた。しかし「長崎歴史文化博物館」展示の江戸初期製作の「日本地図屏風」(「行基図」)には、肥後国十四郡の菊池郡に該当する地名に「ククタ郡」(タはチの誤筆で、ククチ)と記されていた。そうすると、17世紀初頭段階でも「くくち」読みが残っていたことになる。今後の研究にしたい。

おわりに

この拙論は、真の古代日韓交流史を追及しながら、いままで5年もの間あたためて来ていたものである。「はじめに」で断った通り、考古学にも日韓古代史にも、まったくの門外漢である。素人ならば素人らしく、大それた論文を書く必要はないと、お叱りを受けそうである。確かにその通りである。しかしそうせざるを得なかった理由も聞いてほしい。

第一部で論じた「江田船山古墳」の被葬者に関しては、考古学者・古代史研究者をはじめ、盛んに論じられて、次第にその姿が明らかになるなど、大きな成果をあげている。この拙論もその研究成果に負う所が大きい。

しかし第二部で論じた朝鮮式山城「鞠智城」については、これまで数回の日韓シンポジウムでも、盛んに論議が重ねられてきた。それなりの期待をもって参加してきたが、一向に満足のいく見解に出会わなかった。ただ日韓両国の研究者や識者の見解は、より精細さを増してきている。傾聴すべき研究内容も多いが、満足するまでに到っていない。

その一つが、本論で追究してきた拙論の視点が、まったく研究者の論点になっていないことである。「はじめに」でも触れたように、その研究姿勢そのものが、「鞠智城」の築城当初から、大宰府の後備に関係する朝鮮式山城であり、その関係の建造物の遺構・遺跡とする見方に終始していることである。日韓両国いずれの研究者たちも、この呪縛から一向に解き放たれていない。またその関係を真剣に問い直そうと努力して来ていない。

これまでの「江田船山古墳」や「鞠智城」の研究では、それ以前に存在した可能性のある「茂賀の浦」について、神話・伝承なるが故に、ただ疑問視するばかりで、本格的に考古学や古代史の俎上に乗せようとはしていない。「茂賀の浦」の石壁の崩壊で出現した湖底が、今日の菊池平野の原形であるとの主張に関しても同様である。おそらくこのような研究状況が続く限り、「江田船山古墳」や「鞠智城」の歴史的真実への接近は難しいと思っている。

また第三部では、「鞠智」は「きくち」ではなく、何故で「くくち」と読むのか。この「鞠智」の解明には、きっと方法があると思っている。これまで古代の漢字の「和音」、「呉音」、「百済音」(「百済語」)、そしてハングルなど、日韓の古語言語学・比較言語学的研究の複数の先達たちの書籍にあたり、活用できる研究成果を探し求めてきた。現時点での研究の一端を紹介したつもりである。

これら三部からなる拙論は、その論及の仕方や研究内容は必ずしも完全ではない。いま全部を読み返してみると、論旨にもかなりのブレがある。数多くの弱点も散見される。本論がいまだ構築途上にあるこ

とを露呈している。

門外漢の方法論なので当然であると、自分なりに納得している。しかしながら、この貧弱な方法論さえ、これまでに、誰も試みようとしてこなかった。このような歴史的な解明への接近方法があることも知ってほしかった。

しかし拙論のような試みには、必ずクリアしなければならない大きな課題がある。それは、研究者の前に立ちはだかる「権威主義」である。研究者たちは敬遠しながらも、不満に思いながらも、何時しか自己規制や自己抑制に陥ってしまっている。

おそらくそれへの挑戦なしには、拙論程度の方法論さえ不可能であろう。私の場合、幸か不幸か、常に門外漢視されている。この気軽さが、「権威主義」の呪縛からいつも自由にしてくれる。「権威主義」的な専門家には、かえって見えないテーマや課題に簡単に接近できる。もちろん素人の浅学さは否定できない。しかし本論が些かでも問題提起となるならば、その目的はある程度達成されたことになる。

この拙論はかなり長大になってしまった。事務局には、このことを再三断ったが、幸いにも快諾してもらった。拙論のまずさにもよるが、とにかく「江田船山古墳」と「鞠智城」の築城との密接な関係を、一挙に論じたかったためである。ご海容を願いたい。

(2010年3月16日　稿了)

【注記】

■はじめに

(1) 朴鐘鳴監修・権仁燮著『朝鮮と日本の関係史－善隣と友好の歴史』(明石書店　2000年)、歴史教育研究会（日本）・歴史教科書研究会（韓国）編『日韓歴史共通教材－日韓交流の歴史（先史から現代まで)』(明石書店　2007年)、歴史教育者協議会（日本）・全国歴史教師の会（韓国）編『向かい合う日本と韓国・朝鮮の歴史・前近代編上』(青木書店　2006年）などにより作成。

(2) 韓国教員大学歴史教育科著（吉田光男監訳）『韓国歴史地図』(平凡社　2006年）p16～20・32・36～37、42～43など

■第一部　「江田船山古墳」の被葬者像を探る

(1) 2009日韓歴史シンポジウムin玉名　発表資料集「熊本県北部の古代文化と韓半島」(熊本日韓文化交流研究会編　2009年11月）p58

(2) 楠原佑介・溝手理太郎編『地名用語語源辞典』(東京堂出版　1983年）p70

(3) 同前p562

(4) 同前p28

(5) 同前p181

(6) 白石太一郎監修・玉名歴史研究会編『東アジアと江田船山古墳』(雄山閣　2002年）p82、但し奈良時代の人口約560万人説もある。(早水融著「人口誌」・岩波書店『日本通史』第1巻)

(7) 江口素里奈著『古代史発掘・江田船山古墳鉄剣銘の秘密－被葬者は百済王の王子だった!!』(五月書房　2007年）p99

(8) 金容雲著『日本語の正体－倭の大王は百済語で話す』（三五館　2009年）p33
(9) 前掲『地名用語語源辞典』p534
(10) 前掲江口著 p98～100
(11) 前掲『東アジアと江田船山古墳』p55～62
(12) 同前 p36
(13) 前掲江口著 p127
(14) 同前 p86
(15) 同前 p168～9
(16) 同前 p48・51・52・54
(17) 七城町誌編さん委員会『七城町誌』（七城町　1991年）p106～7
(18) 前掲江口著 p96
(19) 黒板勝美編『日本書紀』中巻（岩波文庫　1931年）p274～5

夏四月、百済の加須利君、〔蓋鹵王なり〕池津姫の燔殺されたるを飛聞（つたへき）きて、〔適稽女郎なり〕籌議（はか）りて曰く、昔、女人を貢りて采女と為す。而るを既に禮（あや）無くして、我が国の名を失へり。今より以後、女を貢る合（べ）からず。乃ち其の弟軍君（こにきし）〔混支君なり〕に告げて曰く、汝宜しく日本に往（まゐ）でて、以て天皇に事へまつれ。

軍君対へて曰く、上君（きみ）の命（みこと）違ひ奉る可からず。願はくは君の婦（みめ）を賜ひて後に遣し奉（たま）へ。加須利君、則ち孕婦を以て既に軍君に嫁與（あは）せて曰く、我が孕婦既に産月に當れり。若し路に於て産まば、冀はくば、一船に載せて、随至何處（いづこにいたるとも）、速に国に送らしめよ。遂に與に辞訣（わか）れて朝（みかど）に奉遣（たてまつ）る。

六月丙戌朔、孕婦、果して加須利君の言ひし如く、筑紫の各羅（かわらの）島に於て児を産む。仍りて此の児を名づけて島君（せまきし）と曰ふ。是に於て、軍君即ち一船を以て島君を国に送る。是を武寧（むねい）王と為す。百済人此の島を呼んで主島（にりむせま）と曰ふ。

秋七月、軍君京に入る。既にして五子あり。〔百済新撰に云ふ、辛丑年、蓋鹵王、弟混支君（こにきし）を遣して、大倭に向（まゐ）て、天皇に侍（つか）へまつらしめ、以て先王の好（よしみ）を修む〕

(20) 同前 p222～3
(21) 宇治谷孟著・全現代語訳『日本書紀』上（講談社学術文庫　2007年）p292
(22) 前掲『東アジアと江田船山古墳』p139
(23) 前掲江口著 p170・171～2
(24) 同前 p177
(25) 同前 p32・81
(26) 前掲発表資料集「熊本県北部の古代文化と韓半島」p56～7
(27) 同前 p63～4
(28) 同前 p60
(29) 前掲『東アジアと江田船山古墳』p139～p140
(30) 同前『東アジアと江田船山古墳』p73
(31) 朴鐘鳴監修・権仁燮著『朝鮮と日本の関係史』（明石書店　2000年）p89
(32) 平野邦雄著『帰化人と古代国家』（吉川弘文館　2007年）p114
(33) 前掲『東アジアと江田船山古墳』p73
(34) 同前 p98
(35) 前掲「熊本県北部の古代文化と韓半島」p65
(36) 前掲『帰化人と古代国家』p214
(37) 前掲『東アジアと江田船山古墳』p140

(5) 岡田英弘著『日本史の誕生』（ちくま文庫　2008年）p316
(6) 金思燁著『古代朝鮮語と日本語』（講談社　1974年）p126・140
(7) 前掲『漢語林』付録「漢字について」p1184
(8) 同前 p1183～1184
(9) 『大日本百科事典』（小学館　1968年）p353
(10) 『国史大辞典』第8巻（吉川弘文館）p419

■写真・図版掲載一覧

① 縄文～AD4世紀頃の海岸線推定図（中原英氏作成）
② 清原台地航空写真（白石太一郎監修・玉名歴史研究会編『東アジアと江田船山古墳』〔雄山閣 2002年〕）p121
③ 中古附上古玉名郡繁昌図
④ 写真　江田船山古墳（『東アジアと江田船山古墳』）　グラビア（写真提供・熊本県教育委員会）
⑤ 江田船山古墳太刀銘（同前）　p35（東京国立博物館『国宝銀象嵌銘大刀』による）
⑥ 江田船山古墳の副葬品にみられる三相・三人の被葬者（縮尺不同）（同前）　p31
⑦ 西海道の古代官道図（木下良著・事典『日本古代の道と駅』　吉川弘文館　2009）p293・303・335より作成
⑧ 菊池川流域の装飾古墳などの分布図（横穴を除く）（『東アジアと江田船山古墳』）p156
⑨ 菊池川流域の首長変遷図（同前）　p163
⑩ チブサン古墳壁画（冠をかぶり両手をあげた被葬者）、松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』（熊本日日新聞社－熊本の風土とこころ⑦－　1976年）チブサン古墳のカラー図版
⑪ 金容雲著『日本語の正体－倭の大王は百済語で話す』巻頭　前掲『韓国歴史地図』p32と同一の地図（白黒版）。印刷の鮮明度を考え、これを掲載した。
⑫ 「木柑子フタツカサン古墳」出土の銀象嵌鍔
⑬ 伊勢市「南山古墳」出土の鉄地銀象嵌鍔
⑭ 木柑子西原遺跡出土の銀象嵌鍔の実測図（『木柑子遺跡群』）p78
⑮ 南山古墳出土の鉄地銀象嵌鍔の実測図（『南山古墳発掘調査報告』）p32
⑯ 「白村江」の戦い
⑰ 「鞠智城」の全容図、熊本県文化財調査報告第249集『鞠智城跡』・総括報告書（熊本県教育委員会　2009年7月）p13
⑱ 貯水池跡出土の「木簡」（同前）　p78
⑲ 「百済立像」（同前）　p145
⑳ 写真「八角形鼓楼」（パンフレット「国指定史跡・鞠智城跡を国営公園に」）
㉑ 「金色の菩薩像復元」

㉑「百済立像」の復元

(38) 宇治谷孟著・全現代語訳『日本書紀』下（講談社学術文庫　2006 年）p45 ～ 46

【注記】黒板勝美編『日本書紀』下巻（岩波文庫　1932 年）p47

十七年春正月、百済の王子・恵罷（まか）らむと請ふ。仍りて兵仗（つはもの）、良馬を賜ふ甚多（にへさ）なり、亦頻りに賞禄（たまもの）す。衆の欽（たふと）み嘆（ほ）むる所なり。是（こゝ）に阿部臣・佐伯連・播磨直を遣して、筑紫国の舟師を率ゐて、衛（まも）り送りて国に達（いた）らしむ。別に筑紫の火君（ひのきみ）を遣して、〔百済本記に云く、筑紫君の児、火中君（ひのなかのきみ）の弟。〕勇士一千を率ゐて、弥弖〔みて、弥弖は津の名なり〕に衛（まも）り送らしむ。因りて津路の要害（ぬみ、ぬま）の地を守らしむ。（中略）十八年春三月庚子朔、百済の王子余昌、嗣ぎて立つ。是を威徳王と為す。

(39) 前掲『東アジアと江田船山古墳』p144

(40) 同前 p172

(41) 同前 p173

(42) 同前 p145

(43) 前掲宇治谷孟著・全現代語訳『日本書紀』下　p358 ～ 359

【注記】黒板勝美編『日本書紀』中巻（岩波文庫　1931 年）p290

「廿一年夏六月壬辰朔甲午、近江毛野臣、衆（いくさ）六万を率ゐて、任那に往きて、為に新羅に破られたる南加羅（ありしひのから）・喙己呑（とくことむ）を復興建（かへした）て、任那に合わせむと欲す。是に筑紫国造磐井陰に叛逆を謀りて猶豫（うらもひ）し、年を経ぬ。事の成り難きを恐れて、恒に間隙を伺ふ。新羅是を知りて、密に貨賂（まひなひ）を磐が所（もと）に行（おくりや）りて、毛野臣の軍を妨遏（た）へよと勧む。

是に於て磐井火・豊（ひのくにとよのくに）二国に掩據（おほひよ）りて、勿使修職（つかまつらしめず）。外は海路を邀（た）へて、高麗・百済・新羅・任那等の国の年ごとの貢職（みつぎ）の船を誘致（わかつり、をこつり）し、内は任那に遣せる毛野臣の軍を遮り、（後略）」

(44) 前掲『東アジアと江田船山古墳』同上 p185

(45) 同前 p183 ～ 184

(46) 山鹿市博物館編『熊本の装飾古墳』、原本が探し出せず、平成四（1992）年 4 月 5 日の菊池 R.C 創立 20 周年記念講演「菊池氏期限以前の歴史について（仮説）」に転載分（p5）より記述

(47) 同前 p157

(48) 同前 p160

(49) 同前 p95 ～ 96

(50) 松本雅明編著・白石巌写真『熊本の装飾古墳』（熊本日日新聞社－熊本の風土とこころ⑦－1976 年）チブサン古墳のカラー図版、p94

(51) 前掲『東アジアと江田船山古墳』p160 ～ 162

(52) 同前 p164

(53) 前掲「熊本県北部の古代文化と韓半島」p9 ～ 10

(54) 前掲『帰化人と古代国家』p109

(55) 前掲『韓国歴史地図』p42

(56) 前掲『木柑子遺跡群』p77

(57) 前掲『南山古墳発掘調査報告』p32

■第二部　古代朝鮮（百済）式山城「鞠智城」

(1) 平野邦雄著『帰化人と古代国家』（吉川弘文館　2007 年）、金容雲著『日本語の正体－倭の大王は百済語で話す』（三五館　2009 年）、岡田英弘著『日本史の誕生』（ちくま文庫　2008 年）など、

他に多数の古代史関係書籍を参考に作成した。

(2) 吉川弘文館編集部編『誰でも読める日本古代史年表』(吉川弘文館　2007年) p27～29

(3) 前掲『日本語の正体－倭の大王は百済語で話す』p95～6、99～100、105・109

(4) 前掲『誰でも読める日本古代史年表』p30～31

(5) 同前 p37～38

(6) 田中俊明著『古代の日本と加耶』(山川出版社　2009年) p6·32、田中氏は、「任那」は「金官国」と同じ、または「金官国に任那邑落を含む」とする。朴天秀著『加耶と倭』(講談社　2007年) には、第三章「任那日本府はなかった」を掲載。

(7) 同前 p42～56

(8) 前掲『帰化人と古代国家』p218～9

(9) 前掲『誰でも読める日本古代史年表』p66～75

(10) 同前 p76～125

(11) 前掲『帰化人と古代国家』p165～167

(12) 『日本史広辞典』(山川出版社　1977年) p664

(13) 田中政喜著『歴史をたずねて　筑紫路大宰府』(青雲書房　1976年) p27

(14) 西合志町史編纂協議会編『西合志町史』資料編 (1994年) p201

(15) 八女郡教育会編『郷土教育資料』(八女郡中学校教育研究会　1934年) p18～22、福岡県教職委員組合八女支部『八女郡教育資料・全』(1953年) p83～84

(16) 西合志町史編纂協議会編『西合志町史』通史編 (1995) p228

(17) 熊本県文化財調査報告第249集『鞠智城跡』・総括報告書 (熊本県教育委員会　2009年7月) p13

(18) 前掲『歴史をたずねて　筑紫路大宰府』(青雲書房　1976年) p13・27

(19) 新版『古代の日本』③「九州・沖縄」(角川書店　1991年) p279～80

(20) 『国史大辞典』第13巻 (吉川弘文館) p825・写真版「木簡」

(21) 武光誠著『中国と日本の歴史地図』(ベスト新書　2003年) p110～111

(22) 太田亮編著『姓氏家系大辞典』第三巻 (角川書店　1981年) p4710～11

(23) 前掲『帰化人と古代国家』p109・116

(24) 前掲『姓氏家系大辞典』p4775～76

(25) 前掲『鞠智城跡』・総括報告書 p149

(26) 同前 p149～150

(27) 同前 p150

(28) 同前 p150

(29) 同前 p150～151

(30) 同前 p151

(31) 同前 p151

(32) 同前 p151

(33) 同前 p17

■第三部　地名「鞠智」と「菊池」の解明

(1) 前掲『鞠智城跡』・総括報告書 p5

(2) 前掲『地名用語語源辞典』p165・197・395、167

(3) 鎌田正・米山寅太郎編著『漢語林』(大修館書店　1989年) 付録「漢字について」p1184

(4) 前掲『日本語の正体－倭の大王は百済語で話す』の全体、特に p98